

# 吹田操車場遺跡確認調査報告書

—吹田操車場跡地地区（仮称）の整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査—

平成20（2008）年11月

独立行政法人  
鉄道建設・運輸施設整備支援機構

吹田市教育委員会

## 序

吹田市と摂津市にまたがる吹田操車場は、大正12（1923）年、当時東洋一といわれる我が国屈指の物流拠点として操業を開始し、経済活動や国民生活を支える重要な役割を担ってきました。しかし、その後の物流の変化に伴い昭和59（1984）年には約60年間にわたるその役割を終えました。

現在、その操車場の跡地におきまして、吹田市では本地区を吹田市東の玄関口として位置づけ、「緑と水につつまれた健康・教育創生拠点の創出」を目指したまちづくり計画の策定を進めています。

一方、操車場跡地では、平成10（1998）年の（財）大阪府文化財調査研究センターによる試掘調査をはじめとするその後の発掘調査により、旧石器時代から近世にかけての遺構や遺物の包蔵が明らかとなっていますが、本市がまちづくりを計画する用地についてはほとんど調査が行われていません。このことから、計画を進める上で、埋蔵文化財の状況を確認するために鉄道建設・運輸施設整備支援機構が確認調査を実施することとなり、本市はその依頼を受けて教育委員会の文化財担当職員を派遣しました。

本書はその確認調査の成果をまとめたものであり、当地一帯の歴史を考える資料として活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にあたってご指導・ご協力いただきました地元の方々や関係機関をはじめとする多くの方々に感謝申し上げますとともに、今後も文化財保護にご理解・ご協力賜りますようお願い申し上げます。

平成20（2008）年11月28日

吹田市教育委員会

教育長 田口省一

## 例　　言

1. 本書は、平成19（2007）年度・平成20（2008）年度に、「吹田操車場跡地地区（仮称）の整備に関する基本協定書」に基づき独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構が実施した、吹田市芝田町における吹田操車場遺跡確認調査の成果をまとめたものである。
2. 確認調査を実施するにあたっては、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構からの調査協力依頼により、本市は吹田市立博物館文化財保護係賀納章雄・堀口健二を派遣した。整理作業については、確認調査期間中は現地に設けた現場事務所で行い、確認調査終了後は吹田市立博物館内資料整理室（吹田市岸部北4丁目10番1号）において実施し、資料の保管も同所で行っている。
3. 本文の執筆は、第2章を増田真木が行い、他を賀納が行った。
4. 確認調査では、当初調査区の上端が $6 \times 6$ m、底辺が $4 \times 4$ mとなるように計画していたが、調査区を設定する場所の状況に応じて、その規模は各調査区で変化する結果となった。
5. 各調査区は、南西から北東方向へのびる鉄道敷地に沿う形で設定したことにより、ほとんどの調査区画の一辺が東西・南北方位軸から傾くことになった。このことから、本文中では、鉄道敷地の北西側境界に沿う調査区画の一辺方向を便宜的に「北」として方向を呼称した。
6. 図中の方位は磁北を示し、標高はT.P（東京湾標準潮位）を示す。
7. 遺物実測図の縮尺は、土器・土製品を $1/4$ 、石器・石製品を $3/4$ とした。
8. 確認調査及び資料整理に際しては、大阪府文化財保護課の指導を受けるとともに、次の方々のご指導・ご協力を得た。記して感謝致します。（敬称略）  
赤松佳奈、秋山芳恵、伊部貴雄、岡本圭司、小川里美、亀井聰、木船安紀子、高井明美、花崎晶子、林裕子、柳本照男
9. 確認調査及び整理作業には、以下の方々の参加を得た。  
(調査員) 佐藤健太郎  
(調査補助員) 今西加奈、鴨野有佳梨、谷真理子、平川葉子、山口卓也

## 目 次

第1章 位置と環境 .....	1
第2章 調査の経過 .....	5
第3章 調査の成果 .....	8
【No.1調査区】 .....	8
【No.2調査区】 .....	8
【No.3調査区】 .....	9
【No.4調査区】 .....	10
【No.5調査区】 .....	11
【No.6調査区】 .....	12
【No.7調査区】 .....	13
【No.8調査区】 .....	14
【No.9調査区】 .....	16
【No.10調査区】 .....	17
【No.11調査区】 .....	18
【No.12調査区】 .....	20
【No.13調査区】 .....	21
【No.14調査区】 .....	22
【No.15調査区】 .....	23
【No.16調査区】 .....	23
【No.17調査区】 .....	26
【No.18調査区】 .....	28
【No.19調査区】 .....	29
【No.20調査区】 .....	31
【No.21調査区】 .....	32
【No.22調査区】 .....	33
【No.23調査区】 .....	34
【No.24調査区】 .....	36
【No.25調査区】 .....	38
【No.26調査区】 .....	40
【No.27調査区】 .....	41
【No.28調査区】 .....	42

【No29調査区】	43
【No30調査区】	45
【No31調査区】	47
【No32調査区】	49
【No33調査区】	50
【No34調査区】	52
【No35調査区】	53
【No36調査区】	54
【No37調査区】	55
【No38調査区】	56
【No39調査区】	57
【No40調査区】	58
【No41調査区】	60
【No42調査区】	61
【No43調査区】	62
【No44調査区】	64
【No45調査区】	65
【No46調査区】	67
【No47調査区】	68
【No48調査区】	69
【No49調査区】	73
【No50調査区】	74
【No51調査区】	76
【No52調査区】	79
【No53調査区】	80
【No54調査区】	82
【No55調査区】	85
【No56調査区】	88
【No57調査区】	89
【No58調査区】	91
【No59調査区】	93
第4章　まとめ	94

## 第1章 位置と環境

吹田操車場遺跡は、JR東海道線吹田駅から岸辺駅付近にかけての間、かつての吹田操車場の跡地を中心に広がる旧石器時代～中世の複合遺跡である。吹田市は、市域北側約3分の2を千里丘陵が占め、その南側に平野が広がるという地形的特徴を有するが、JR東海道線は吹田・岸辺駅間をちょうど千里丘陵の縁辺に沿うような形で平野部を通っていることから、そこを中心へ広がる吹田操車場遺跡は、市域の平野部の中においても丘陵寄りの相対的に標高が高い位置にある。

吹田市の平野部は、主に神崎川や淀川などの沖積作用によって形成されたものであり、千里丘陵の南端部となる本市出口町付近を境にして、東側を安威川低地、西側を神崎川低地と区分されるが、JR吹田駅付近から南側には繩文海進時に形成されたと考えられている吹田砂堆が微高地としてある。吹田操車場遺跡は、安威川低地側に位置することになるが、安威川低地の南側では、現地表面の標高がおよそ4～5m程度であるのに対し、吹田操車場跡地付近では標高6～13mとなる。これは吹田操車場等の造成のため盛土が行われていることにもよるが、今回の調査範囲の中で確認した操車場造成直前まで耕作地として利用されていた旧地表面での標高をみても6.7～9.7mとなり、相対的に標高が高いことがわかる。そして、吹田操車場遺跡付近での調査では、締まった黄灰色（もしくは青灰色）の粘土を主とする土層が地山層として確認される地点が多く、その土質は、完新世以降の河川堆積物によくみられる軟弱な土砂の堆積とは様相が異なり、千里丘陵上でみられる土と質感がよく似ている。このことから、千里丘陵起源の土砂が流出して堆積したものが、この付近の地山層として確認されているのではないかと考えられる。

このように、吹田操車場遺跡付近は相対的に標高が高いことから、河川の氾濫等による沖積作用の影響を受けることは少なかったようである。よって、地山層の上面に沖積作用による土砂の堆積が厚く認められる地点としては、かつて千里丘陵から南側へとのびていたであろう谷筋と考えられる付近あたりであり、その他では、近現代の盛土層を除いて、地山層の上に土砂が厚く堆積する地点は少ない。多くの地点では、地山層上に何層かの土層を薄くはさんで操車場造成前の旧耕作土が堆積するか、もしくは地山層直上に直接旧耕土層が覆う地点も確認される。こうしたことから、旧耕土層以下、地山層に至るまで各土層は近代以降の造成工事や農作業などの影響を受けやすい環境にあり、結果として遺構・遺物等が搅乱を受けているという状況も見受けられる。

ここで、吹田操車場遺跡周辺の主だった遺跡の動向についてみると、まず旧石器時代では、吹田操車場遺跡でも旧石器の出土をみているが、千里丘陵上に位置する吉志部遺跡・吉志部瓦窯跡においては国府型ナイフ形石器などの旧石器とともに礫群が検出されており、平野部に位置する目俵遺跡・高城遺跡でもナイフ形石器等が出土している。また、吹田操車場遺跡から西へ約2kmの千里丘陵を中心に広がる垂水遺跡でも旧石器をみる遺跡として知られている。

縄文時代では、吹田操車場遺跡も含め、丘陵部にある吉志部遺跡・吉志部瓦窯跡・七尾瓦窯跡・片山公園遺跡・片山芝田遺跡・垂水遺跡、平野部に位置する高城遺跡・高城B遺跡・目俤遺跡・中ノ坪遺跡・高畠遺跡などで縄文時代の石器など石器類が検出されているが、中でも吉志部遺跡・中ノ坪遺跡・七尾瓦窯跡・片山公園遺跡においては縄文草創期のものと目される尖頭器が検出されている。これに対して、縄文土器を出土した遺跡は少なく、七尾瓦窯跡・七尾東遺跡・目俤遺跡などで縄文晩期の土器片、吹田砂堆上にある高浜遺跡で中期の土器片、また神崎川低地に位置する豊鳴郡条里遺跡において後期の土器片が出土している。

弥生時代になると市域西部で良好な資料をみる遺跡が多くなる。垂水遺跡は高地性集落として知られ、前期から後期にかけての弥生土器が検出されており、銅鏡鑄型の可能性を有する転用砥石も採集されている。また、丘陵斜面において確認された北泉遺跡においても前期から後期にかけての良好な資料が得られている。このほか、神崎川低地に展開する藏人遺跡・垂水南遺跡・五反島遺跡・榎坂遺跡などでは残存状態の良好な弥生後期を中心とした遺物を多く検出している。一方、市域東部では、吹田操車場遺跡でも少ないながら遺物の出土はあるが、良好な残存状況での遺物の出土をみる遺跡は少ない。そうした中、正雀川をまたいで展開する七尾東遺跡においては竪穴式住居跡1棟が検出されており、目俤遺跡では弥生後期から古墳前期にかけての掘立柱建物跡が8棟検出されている。このほか、中ノ坪遺跡では弥生後期の周溝状の溝が、天道遺跡でも弥生後期の溝とみられる落ち込み跡が検出されている。また、旧山田小川村では、明治時代の溜池開削工事に伴って銅鐸が見つかっている。

次に古墳時代では、吹田市域で確認されている古墳の数は少なく、詳細のわからないものも多い。これまでに発掘調査が実施された古墳は、古墳終末期の7世紀前半のものとみられる吉志部古墳と新芦屋古墳の2基のみであるが、新芦屋古墳は石棺を納めた木芯粘土室を主体部として馬具や鉄刀等を副葬品にもつ特異なものであった。ところで、古墳時代の吹田で特徴的といえるのが、千里丘陵上に多くの須恵器窯が築かれ、須恵器生産が盛んとなることである。市域での須恵器生産は6世紀前半から多くなり、6世紀後半にピークをむかえ、7世紀前半に衰退するが、これまで56か所で窯跡が確認され、中でも吹田須恵器窯跡No32（S T 32）は初期須恵器生産窯として知られている。このほか、平野部における遺跡では、垂水南遺跡・藏人遺跡・五反島遺跡・榎坂遺跡などで良好な資料が検出されている。特に、垂水南遺跡では竪穴式住居跡や水田畦畔などが検出されるとともに、鍛冶関連資料や滑石製品工房の存在を示す資料が得られている。榎坂遺跡でも竪穴式住居跡が検出されているが、ここでは河道跡に弥生後期の遺物を含みつつ庄内式期から布留式期にかけての土師器が多量に出土している。また、垂水遺跡においても平野部で古墳時代の資料が確認されており、注目される資料としては溶解痕のある4世紀の銅鏡片がある。さて、これらはいずれも吹田市西部の神崎川低地に位置する遺跡であるが、吹田市東部側の遺跡では先述の目俤遺跡や中ノ坪遺跡・片山荒池遺跡で建物跡が確認されているほか、片山荒池遺跡では群集土坑が検出されており、吹田操車場遺跡においても古墳時代後期から奈良時代にかけての群集土坑が検出されている。このほか、高城B遺跡では井戸

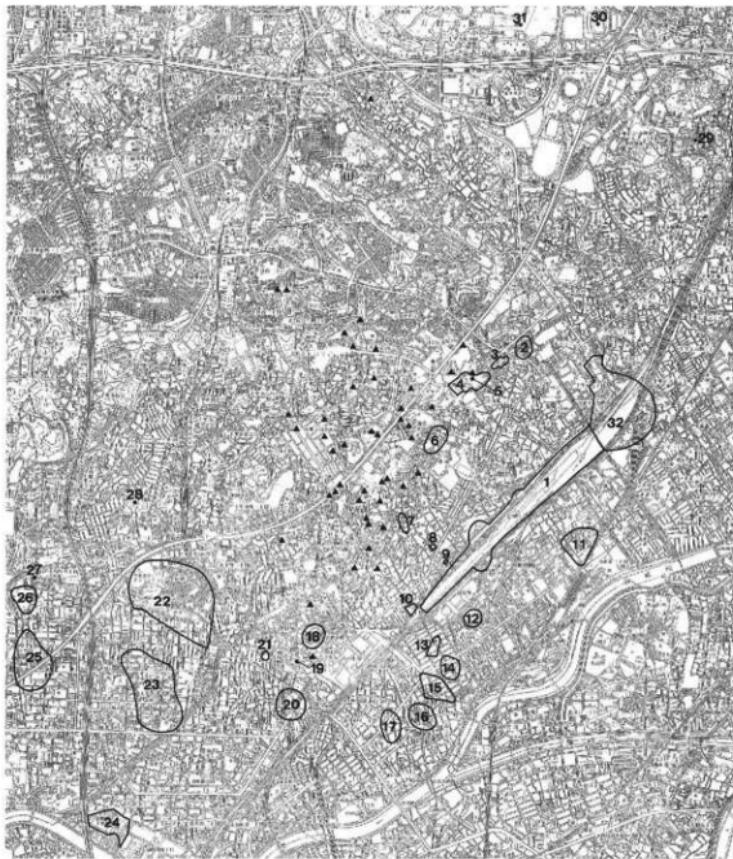
などが検出されている。

次に、飛鳥時代・白鳳時代では、終末期古墳である吉志部古墳や新芦屋古墳もその時代の範疇に入るが、吹田市ではこれまでに確認されている遺跡の数はそれほど多くない。従来は須恵器窯である S T 34、S T 38、S T 39、S T 9 や、茨木市の穂積磨寺との関連が考えられている白頭瓦窯跡が知られる程度であったが、近年になって吹田操車場遺跡において飛鳥時代の遺構・遺物が確認されており、先述の群集土坑も当時代のものを含むと考えられている。

さて、吹田では奈良時代になっても確認されている遺跡の数は多くないが、特記すべきものとしては後期難波宮の瓦を生産した七尾瓦窯跡がある。そして、吹田操車場遺跡では群集土坑内から七尾瓦窯産の瓦が出土しており、さらに吹田操車場遺跡では奈良三彩も出土している。このほか、片山東屋敷廻遺跡では建物跡が確認されており、また明確な遺構はないものの桜坂遺跡では銅製丸瓶が出土している。

平安時代になると、吹田は奈良時代末の淀川と三国川間の開削により、水上交通の中継地として栄え、当時代の遺構・遺物を検出する遺跡の数も増すが、五反島遺跡では平安時代前期の河道路跡や堤防跡が検出されており、唐式鏡をはじめとする祭祀色の濃い遺物が数多く出土している。また、千里丘陵では、吉志部瓦窯跡において平安宮造営当初にその瓦を供給するための瓦生産が行われた。吉志部瓦窯産の瓦は吹田操車場遺跡や垂水南遺跡・高浜遺跡などでも認められている。

ところで、平安時代以降、中世にかけての吹田市域では荘園の経営が盛んとなるが、垂水南遺跡では、「垂庄」・「中庄」などと書かれた平安時代初期の墨書き土器が出土しており、付近一帯に展開していたとされる垂水荘との関連が考えられている。また、桜坂遺跡では綠釉陶器や灰釉陶器、水晶、製塙土器など特異な遺物とともに牛馬骨を検出しており、当地域に展開したとされる垂水西牧との関連が考えられている。また、鎌倉から室町時代にかけての良好な資料が得られている蔵人遺跡は、応永10（1403）年の「春日社領桜坂郷名主百姓等申状案」でその名が初出する蔵人村と何らかの関連があるものと考えられている。ここであげた3遺跡は神崎川低地に位置する遺跡であるが、現在のところ、吹田市東部側においては高城B遺跡・吹田操車場遺跡・片山芝田遺跡などで建物跡などの遺構が検出されているものの、荘園経営と直接的に関連づけられる遺跡は認められていない。ただし、平安時代から中世にかけての溝や畦畔など耕作関連の遺構は市域平野部において全般的に認められている。そして、それらは条里地割の方針にのったものが多い。吹田市は千里丘陵の南端部付近で、その東側が鶴下郡、西側が豊嶋郡と分かれるが、鶴下郡において吹田操車場遺跡が広がる一帯では、鶴下郡南部条里とよばれる真北から33度西側へ傾く条里地割が認められている。また、豊嶋郡での条里地割は真北から1～3度東へ傾いているが、豊嶋郡条里遺跡では豊嶋郡条里の東限に当たる鎌倉時代の大溝が確認されている。



(遺跡名)

- |             |             |                |
|-------------|-------------|----------------|
| 1. 吹田操車場遺跡  | 12. 目俟遺跡    | 23. 垂水南遺跡      |
| 2. 七尾東遺跡    | 13. 高畠遺跡    | 24. 五反島遺跡      |
| 3. 七尾瓦窯跡    | 14. 高城遺跡    | 25. 藏人遺跡       |
| 4. 吉志部瓦窯跡   | 15. 高城B遺跡   | 26. 橋坂遺跡       |
| 5. 吉志部古墳    | 16. 高浜遺跡    | 27. 家形石棺墓      |
| 6. 吉志部遺跡    | 17. 都呂須遺跡   | 28. 垂水西原古墳     |
| 7. 片山東屋敷跡遺跡 | 18. 片山公園遺跡  | 29. 新芦屋古墳      |
| 8. 片山芝田遺跡   | 19. 出口古墳    | 30. 山田銅鐸出土地    |
| 9. 天道遺跡     | 20. 畿略郡条里遺跡 | 31. 白頭瓦窯跡      |
| 10. 片山荒池遺跡  | 21. 北泉遺跡    | 32. 明和治遺跡（摂津市） |
| 11. 中ノ坪遺跡   | 22. 垂水遺跡    | ▲は須惠器窯跡を示す     |

第1図 吹田操車場遺跡及び周辺主要遺跡分布図(1:40,000)

## 第2章 調査の経過

吹田操車場遺跡は、昭和42（1967）年に吹田操車場内の道路及び側溝工事に際して中世の瓦器碗、土師器皿等の遺物の出土が確認されるとともに、南側の吹田工場内において中世の瓦の出土が確認されたことから遺跡の存在が明らかとなった。

遺跡確認後は近年に至るまで、遺跡の大半が操車場敷地内であったことから本格的な発掘調査等が行われることはなく、遺跡の実態は明らかでなかった。しかし、近隣において弥生時代から中世にかけての遺跡が確認されていたことから、当初の確認範囲周辺地域にも遺跡が展開することは十分に予想され、平成10（1998）年に（財）大阪府文化財調査研究センター（当時）が行った試掘調査により、ほぼすべての調査区で旧石器時代から近世に至る遺構・遺物が確認され、操車場跡地のほぼ全域に遺跡範囲が拡大した。

この試掘調査の結果を受けて、吹田信号場駅基盤整備工事の計画に伴い大阪府教育委員会と日本鉄道建設公團（当時）との間で協議が行われ、平成12（2000）年から駅舎、倉庫、遊水池等計画地の発掘調査が（財）大阪府文化財センターによって実施された。

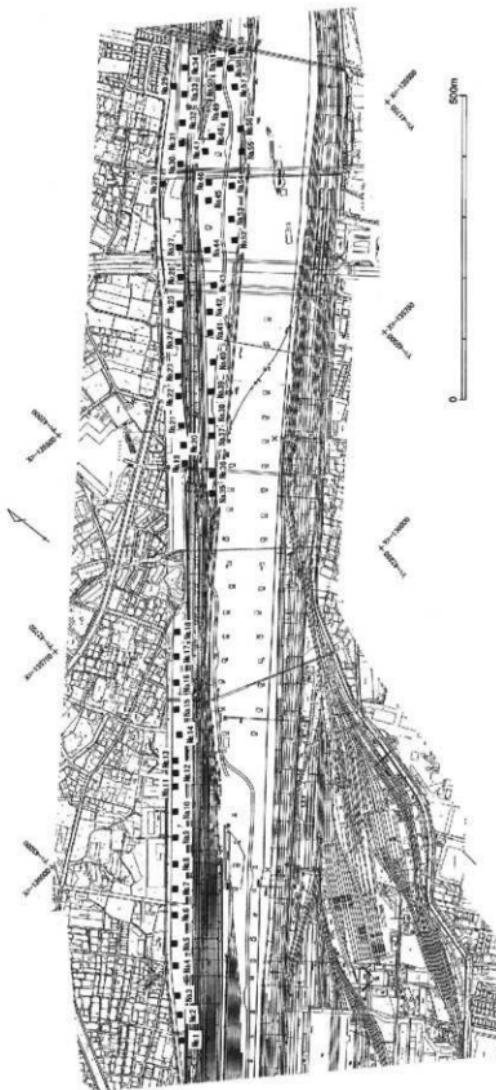
一方、吹田市では操車場跡地の北側約15haにおいて、本市東の玄関口として様々な機能集積を図り、「緑と水につつまれた健康・教育創生拠点の創出」を目指したまちづくり計画の策定を進めているが、計画地は吹田操車場遺跡に当たり、整備計画を進める上では埋蔵文化財の状況等を把握しておくことが必要であるため、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（以下、「鉄道・運輸機構」とする）と吹田市との協議の結果、操車場跡地内のまちづくり用地の確認調査を平成19（2007）年11月19日付「吹田操車場跡地地区（仮称）の整備に関する基本協定書」に基づき鉄道・運輸機構が実施することとし、鉄道・運輸機構から本市への確認調査の協力依頼により、本市が文化財担当職員を派遣することとした。

調査の実施にあたっては、大阪府教育委員会と市教育委員会とが協議し、操車場跡地南側で実施された平成10（1998）年の試掘調査をもとに計59か所の調査区を設定し、現地における調査を平成19（2007）年12月25日から開始し、平成20（2008）年7月17日に完了した。そして、その後、引き続いて遺物の整理作業及び報告書刊行のための作業を行った。



調査風景

第2図 調査区断面図



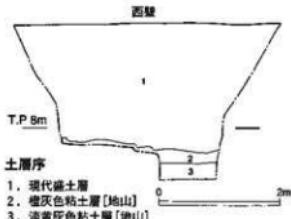
第1表 調査区基準杭座標一覧表

No.	X	Y	No.	X	Y
1	-136351.265	-43046.221	31	-135312.911	-42035.838
2	-136320.58	-43020.695	32	-135290.215	-42012.320
3	-136292.911	-43000.251	33	-135261.836	-41979.535
4	-136257.431	-42967.705	34	-135234.857	-41949.968
5	-136229.875	-42944.768	35	-135745.150	-42385.820
6	-136196.548	-42911.915	36	-135720.512	-42363.151
7	-136166.327	-42882.237	37	-135675.750	-42321.829
8	-136136.068	-42852.613	38	-135658.215	-42303.112
9	-136105.683	-42822.973	39	-135623.850	-42270.521
10	-136075.392	-42793.328	40	-135591.501	-42236.015
11	-136045.215	-42763.587	41	-135552.759	-42207.053
12	-136030.300	-42748.824	42	-135527.801	-42183.808
13	-136015.319	-42734.061	43	-135502.110	-42146.902
14	-135685.004	-42704.452	44	-135453.275	-42116.284
15	-135954.728	-42674.785	45	-135410.125	-42069.497
16	-135924.438	-42645.087	46	-135389.180	-42047.813
17	-135894.156	-42615.346	47	-135350.616	-42019.289
18	-135864.656	-42584.904	48	-135339.506	-41992.893
19	-135678.019	-42384.440	49	-135329.075	-41954.649
20	-135652.738	-42365.135	50	-135294.605	-41933.288
21	-135628.664	-42344.610	51	-135271.649	-41907.292
22	-135591.554	-42313.812	52	-135473.379	-42072.034
23	-135567.409	-42292.020	53	-135447.590	-42054.695
24	-135527.168	-42252.120	54	-135419.641	-42026.336
25	-135485.680	-42209.296	55	-135392.280	-41976.312
26	-135454.130	-42175.712	56	-135363.292	-41952.604
27	-135421.735	-42145.387	57	-135312.767	-41915.451
28	-135342.264	-42106.972	58	-135287.344	-41899.985
29	-135242.581	-41981.760	59	-135272.093	-41873.389
30	-135336.034	-42061.555			

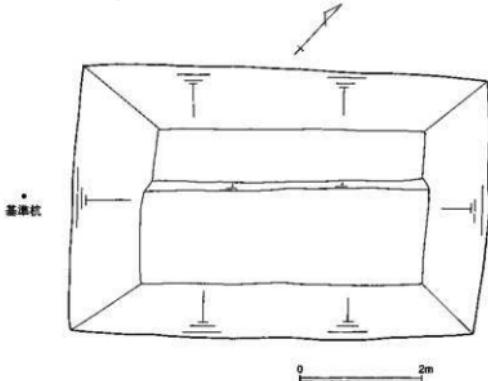
### 第3章 調査の成果

#### 【No.1 調査区】

6.5×4 mの調査区を設定した。約1.85～2.1m厚の現代盛土層直下において、地山層である橙灰色粘土層等の堆積を確認した。旧地形は既に削平を受けており、遺構・遺物は検出されなかった。



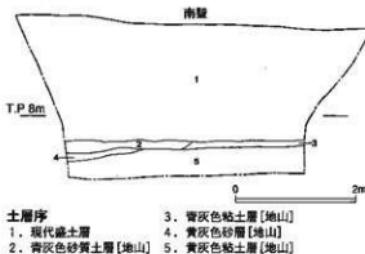
第3図 No.1 調査区土層断面図



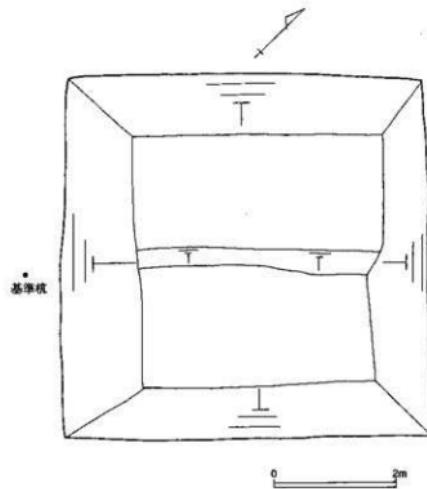
第4図 No.1 調査区平面図

#### 【No.2 調査区】

5.8×5.8mの調査区を設定した。約1.8～2.05m厚の現代盛土層直下において、地山層である青灰色砂質土層等の堆積を確認した。旧地形は既に削平を受けており、遺構・遺物は検出されなかった。



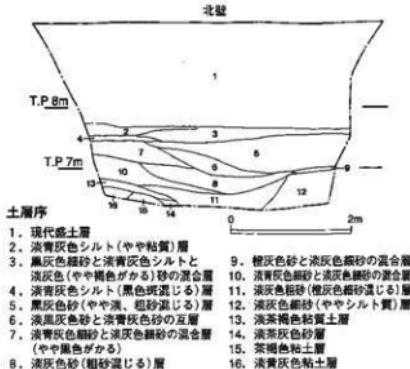
第5図 No.2 調査区土層断面図



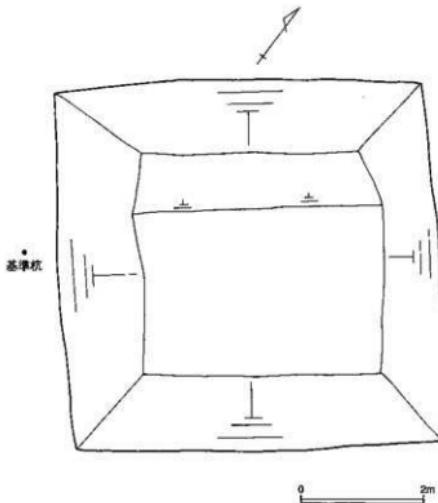
第6図 No.2調査区平面図

### [No.3 調査区]

6×5.8mの調査区を設定した。約1.65～1.75m厚の現代盛土層以下、シルトや砂を主体とする土層の堆積を確認した。他の調査トレンチでの調査状況からみて、この土層は谷状の地形の中に堆積したものであって、遺物の包含ではなく、自然堆積層であると考えられる。そして、現代盛土層下においては旧耕土層や旧表土層が認められず、旧地形は既に削平を受けており、遺構も検出されなかった。



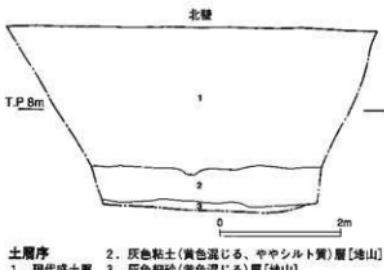
第7図 No.3調査区土層断面図



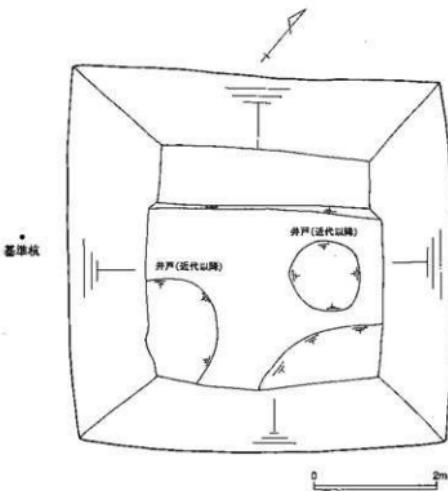
第8図 No.3調査区平面図

### 【No.4 調査区】

$6 \times 6$  mの調査区を設定した。約23m厚の現代盛土層直下において、地山層である灰色粘土(黄色混じる、ややシルト質)層の堆積を確認した。旧地形は既に削平を受けており、地山面上に近代以降の井戸が2基認められたが、明確な遺構・遺物については検出されなかった。



第9図 No.4調査区土層断面図



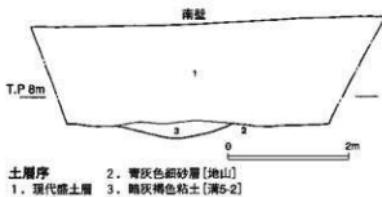
第10図 No.4 調査区平面図

### [No.5 調査区]

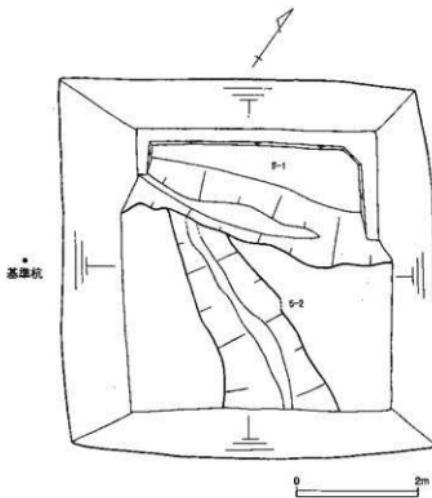
5.9×5.9mの調査区を設定した。約1.75~1.8m厚の現代盛土層直下において、地山層である黄灰色粘土・青灰色細砂層の堆積を確認した。地山層上面においては落ち込み1か所と溝1条を検出したが、遺構面上に旧耕土層などの覆土層はなく、遺構は既にある程度削平を受けた状態であった。

落ち込み5-1は、調査区北側に約60cmの深さで落ち込んでいた。埋土は上層に灰色砂が混じる緑灰色粘土、下層に暗灰色粘土が堆積し、上層には攤乱土の影響なのか黒色斑が混じっていた。落ち込み層の方位は、概ねN70°Eを示していた。溝5-2は、幅約0.8~1.9m、深さ約30cmを測り、その方位は概ねN65°Wを示していた。埋土は暗灰褐色粘土であった。

これらの遺構の時期については、遺構面上に遺物包含層がなく、遺構も削平されている状況であり、断定はできないが、落ち込み5-1内で瓦器・土師器・須恵器片、溝5-2内で須恵器片が若干出土したことから、中世以前のものである可能性が考えられる。ここで図化できた遺物は、落ち込み5-1出土の瓦器片（1）1点のみであった。



第11図 No.5 調査区土層断面図



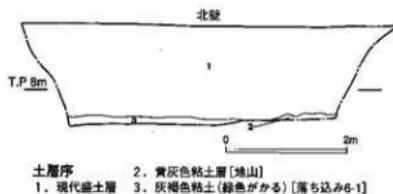
第12図 No. 5 調査区平面図



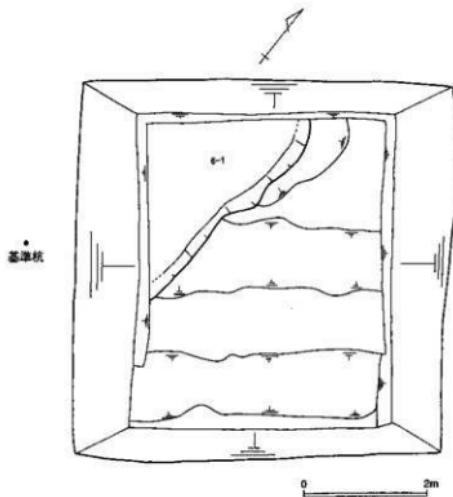
第13図 No. 5 調査区出土遺物

### 【No. 6 調査区】

6 × 6 mの調査区を設定した。約1.4～1.55m厚の現代盛土層直下において、地山層である黄灰色粘土層の堆積を確認した。地山層上面においては落ち込みを1か所検出した。落ち込み肩の方位は概ね N 7° E を示し、調査区北西隅で緑色がかった灰褐色粘土を埋土として約15cmほどの深さで落ち込んでいた。落ち込み上面には旧耕土層などの覆土層ではなく、全体的に搅乱を受けている状況であった。落ち込み内からは中世以前のものとみられる土師器片が1点出土したのみであり、その時期は定かでない。



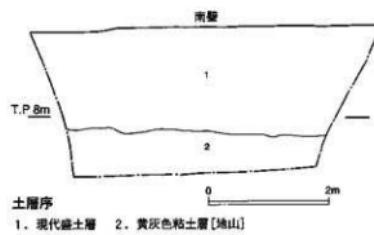
第14図 No. 6 調査区土層断面図



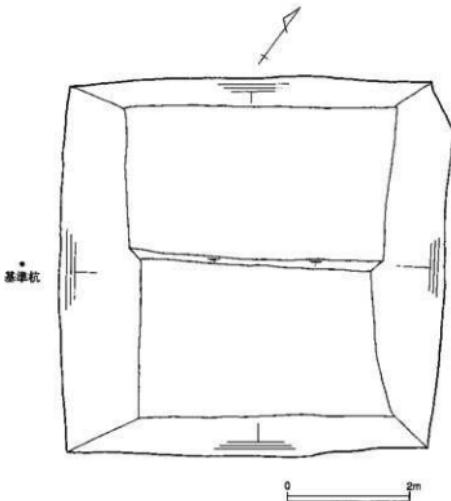
第15図 No. 6 調査区平面図

### [No. 7 調査区]

6 × 6 mの調査区を設定した。約1.6～1.8m厚の現代盛土層直下において、地山層である黄灰色粘土層の堆積を確認した。旧地形は既に削平を受けており、遺構・遺物は検出されなかった。



第16図 No. 7 調査区土層断面図

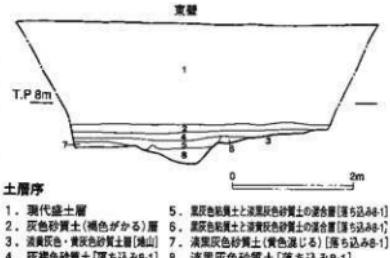


第17図 No.7 調査区平面図

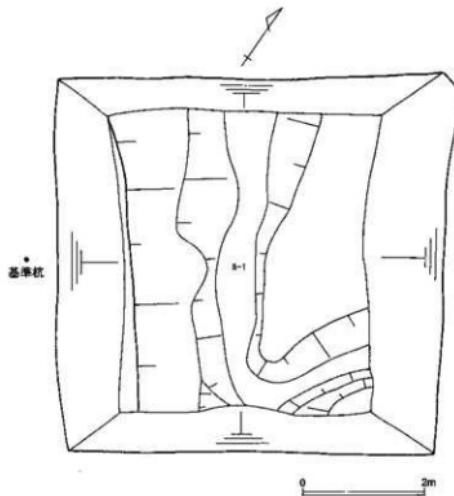
### [No.8 調査区]

$6 \times 6$  mの調査区を設定した。約1.65~1.7m厚の現代盛土層以下、灰色砂質土（褐色がかる）層（8~15cm厚）、地山層である淡黃灰色・黃灰色砂質土層の堆積を確認した。このうち、灰色砂質土（褐色がかる）層において須恵器・土師器・黒色土器・瓦器片の包含を確認し、図化できた遺物を第20図（3~8）に示した。これらは細片ばかりで摩滅したものが多かったが、下限時期のものとしては鎌倉時代の瓦器椀（7）が認められた。そして、灰色砂質土（褐色がかる）層下においては落ち込みを1か所検出した。

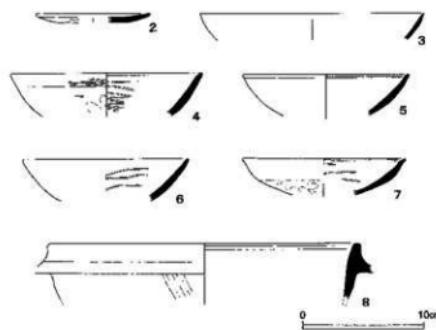
落ち込み8-1は、調査区の西端から東側にかけて灰褐色もしくは黒灰色系の砂質土を埋土として落ち込んでいき、落ち込み内ではL字状に曲がる形でさらに溝状に深くなる箇所が認められた。その深さは溝状の深い部分で概ね50~60cmを測った。落ち込み内においては須恵器・土師器片を検出したものの、明確に時期を判断し得るものはなかったが、覆土層包含の遺物の様相をみると、落ち込み8-1は中世以前のものではないかと考えられる。



第18図 No.8 調査区土層断面図



第19図 No.8 調査区平面図

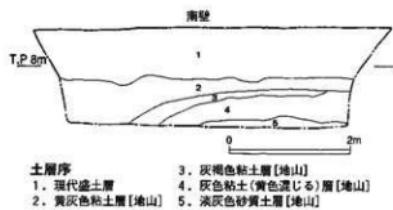


2: 盆土層除去中(土器器底)  
3~8: 灰色砂質土(褐色がかる)層  
(3 黒色土器B縹緥, 4~7 瓦器柄, 8 土器器羽釜)

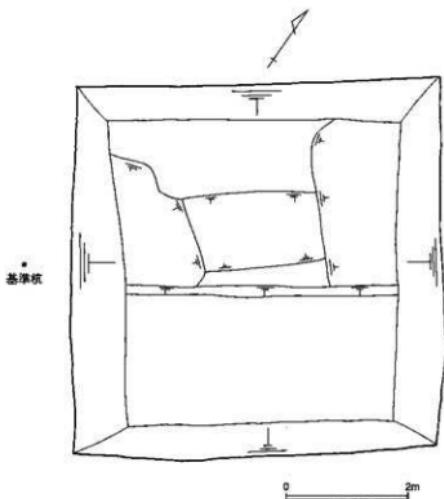
第20図 No.8 調査区出土遺物

## 【No. 9 調査区】

6 × 6 mの調査区を設定した。約0.85～0.9m厚の現代盛土層直下において、地山層である黄灰色粘土層等の堆積を確認した。盛土層内で土師器細片を1点検出したものの、旧地形は既に削平を受けており、明確な造構・遺物は確認できなかった。



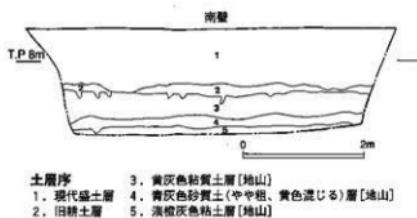
第21図 No. 9 調査区土層断面図



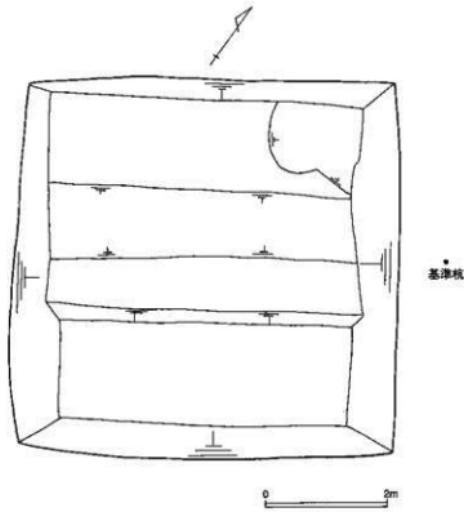
第22図 No. 9 調査区平面図

## 【No.10調査区】

6×6mの調査区を設定した。約0.9~1.05m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（5~40cm厚）、地山層である黄灰色粘質土層等の堆積を確認したが、地山層は擾乱を受けている部分が多く、遺構・遺物については検出されなかった。



第23図 No.10調査区土層断面図



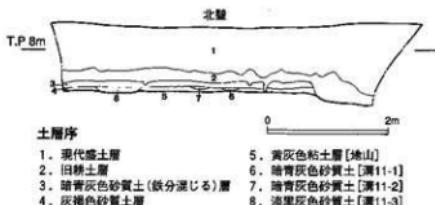
第24図 No.10調査区平面図

## [No.11調査区]

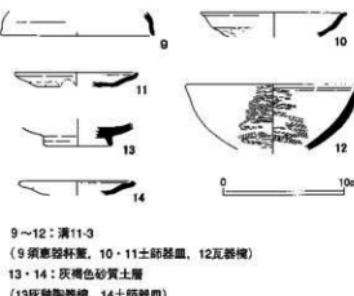
6.1×6 mの調査区を設定した。約0.7~1.2m厚の現代盛土層以下、旧耕土層(5~20cm厚)、暗青灰色砂質土(鉄分混じる)層(約10cm厚)、灰褐色砂質土層(5~10cm厚)、地山層である黄灰色粘土層の堆積を確認したが、調査区の東側では、旧耕土に伴うとみられる淡黒灰色砂質土層が約40cmの深さで落ち込み、地山層を切り込んでいた。このうち、暗青灰色砂質土(鉄分混じる)層と灰褐色砂質土層において土師器・須恵器・瓦器片等の包含を確認し、各土層下で遺構を検出した。

暗青灰色砂質土(鉄分混じる)層下(第1面)においては、溝を3条検出した。溝11-1と溝11-2は、幅約20~30cm、深さ約4cmを測り、埋土は暗青灰色砂質土となり、溝11-3は、幅約50~80cm、深さ約12cmを測り、埋土は淡黒灰色砂質土であった。その方位は、3条とも概ねN23°Wを示していた。そして、溝11-1で須恵器・土師器片、溝11-3で須恵器・土師器・瓦器・黒色土器(B類)片を検出した。これらのうち図化できた遺物としては溝11-3出土のもの(9~12)があり、瓦器椀(12)が遺構出土遺物の中で下限時期を示すものとなり、第1面の時期は概ね平安時代後期のものではないかと考えられる。

灰褐色砂質土層下(第2面)においては、ピット4基と溝1条を検出した。ピット11-4・11-5・11-6は、径が20~30cmで、深さはピット11-4・11-5で約5cm、ピット11-6で約24cmを測った。また、ピット11-7は、部分的な検出であり、その上面は旧耕作土間連の土層によってある程度削平されていたが、検出部分で約23cmの深さを測った。溝11-8は、幅約25cm、深さ約7cmを測り、その方位はN23°Eを示し、第1面の溝とは方位が異なっていた。各遺構の埋土は、ピット11-7が暗灰褐色砂質土で、他が灰褐色砂質土となる。ピット11-4・11-5・11-6において土師器等の遺物を検出したが、ピット11-4で黒色土器A類碗片、ピット11-6で土師器ての字状口縁皿片があり、第2面の時期としては平安時代中期が考えられる。なお、第2面の遺構出土遺物で図化できるものはなかったが、覆土層出土の遺物で2点(13・14)図化できた。このうち、13は灰釉陶器碗片であり、残存部分において調整は回転ナデによっている。



第25図 No.11調査区土層断面図



第26図 No.11調査区出土遺物

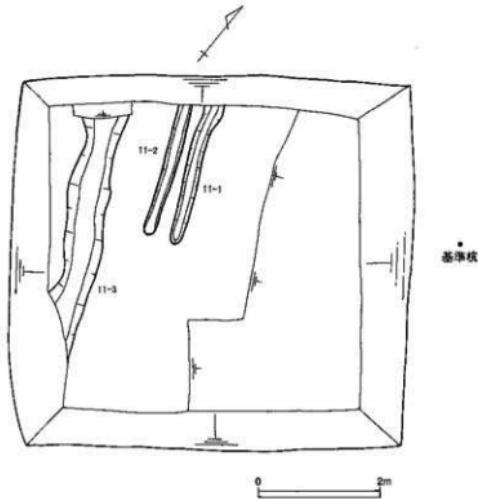
9~12: 溝11-3  
(9須恵器杯底, 10~11土師器底, 12瓦器底)  
13・14: 灰褐色砂質土層  
(13灰褐色陶器片, 14土師器底)

9~12: 溝11-3

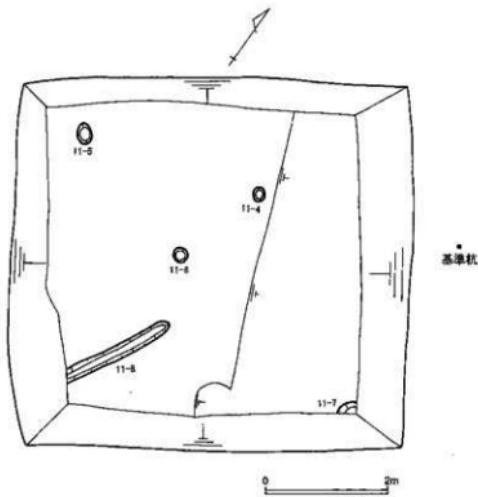
(9須恵器杯底, 10~11土師器底, 12瓦器底)

13・14: 灰褐色砂質土層

(13灰褐色陶器片, 14土師器底)



第27図 No.11調査区平面図(第1面)



第28図 No.11調査区平面図(第2面)

## [No.12調査区]

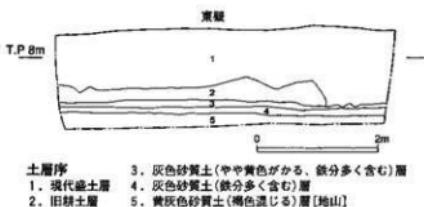
6 × 6 mの調査区を設定した。約0.75～1 m厚の現代盛土層以下、旧耕土層(15～40cm厚)、灰色砂質土(やや黄色がかる、鉄分多く含む)層(8～12cm厚)、灰色砂質土(鉄分多く含む)層(10～15cm厚)、地山層である黄灰色砂質土(褐色混じる)層の堆積を確認したが、調査区西半部では、旧耕土層直下において近代以降に至る井戸とみられる大型の土坑が4基重複して確認され、それより古い時期の土層についてはみられなかった。

調査区東半部では、灰色砂質土(鉄分多く含む)層において須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・青磁・瀬戸焼おろし皿片等を包含するのを確認し、この土層下において9条の溝を検出した。溝は、幅10～20cm、深さ1～3cm程度を測り、それぞれ平行もしくは直交してのび、その方位はN23°W(N67°E)を示していた。おそらくは農作業等に伴い形成されたもの

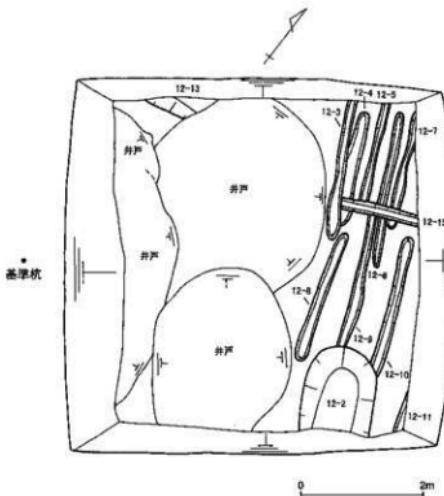
とみられる。溝12-3・12-5・12-6・12-10においては土師器片をごく少量検出し、溝12-6においては瓦器片を含み、遺物量は少ないが、これらの溝はおそらく中世のものであると考えられる。溝出土の遺物で図化できるものはなかったが、覆土層出土の遺物では2点(15・16)図化できた。16は瀬戸焼おろし皿であるが、底部外面には糸切り痕が残る。

ところで、調査区南東部で溝に重複する形で土坑12-2を検出したが、この土坑については、旧耕土層直下から切り込むもので、時期は新しいものである。また、調査区北西部で部分的に検出した土坑12-13は、近世以降の井戸に切られる形で検出したものであるが、土坑内から土師器片1点を検出したのみで、その時期は定かでない。

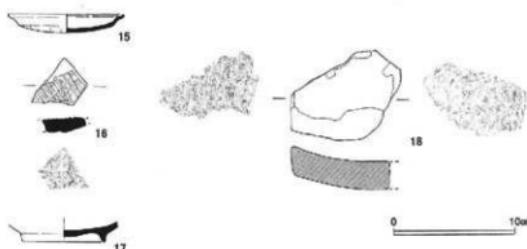
なお、調査区西半部の時期の新しい南側の土坑内からではあるが、黒色土器A類楕(17)と平瓦(18)が出土した。18は須恵質で凹面側に布目痕を残し、凸面側はヘラナデされている。



第29図 No.12調査区土層断面図



第30図 No.12調査区平面図



15・16：灰色砂質土(鉄分多く含む)層(15土器部, 16窓戸焼おろし皿)  
17・18：近代以降土坑(17黒色土器A類焼, 18平瓦)

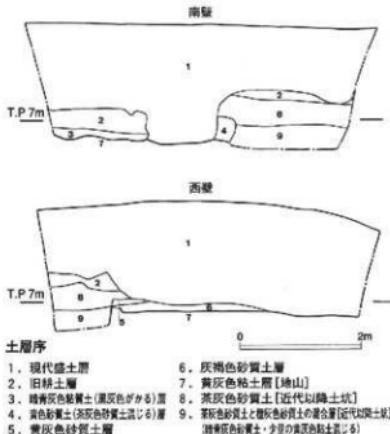
第31図 Na12調査区出土遺物

### [No.13調査区]

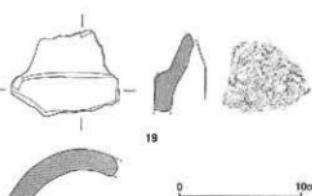
$6 \times 6$  mの調査区を設定した。約1.05～1.4m厚の現代盛土層以下、旧耕土層等の堆積を確認したが、調査区は南北方向にのびる現代の水路跡に伴う擾乱によって、東側と西側に分断される形となった。

調査区東側部分では、現代盛土層以下、旧耕土層(30～40cm厚)、暗青灰色粘質土(黒灰色がかる)層(10～20cm厚)、地山層である黄灰色粘土層の堆積を確認した。暗青灰色粘質土(黒灰色がかる)層では須恵器片を少量包含していたが、これは土質から旧耕土層に関連するものとみられ、他に明確な遺構・遺物は確認できなかった。

調査区西側部分では、その北側が大きく擾乱を受けていたが、現代盛土層以下、旧耕土層(15～30cm厚)、黄灰色砂質土層(約10cm厚)、灰褐色砂質土層(約15cm厚)、地山層である黄灰色粘土層の堆積を確認した。旧耕土層下において近代以降の井戸と考えられる土坑を1基検出したが、他に明確な遺構は検出できなかった。また、灰褐色砂質土層において少量の土師器・須恵器片の包含を認めたが、その時期は明確でない。

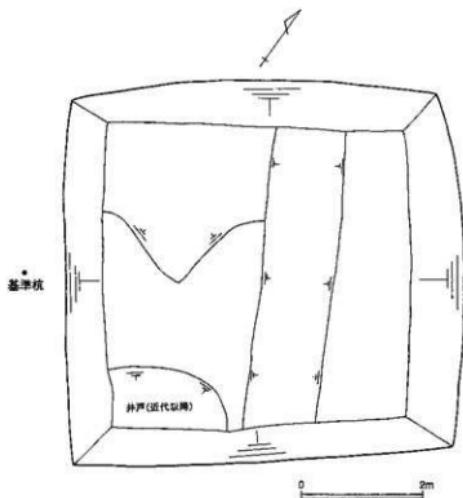


第32図 No.13調査区土層断面図



第33図 No.13調査区出土遺物

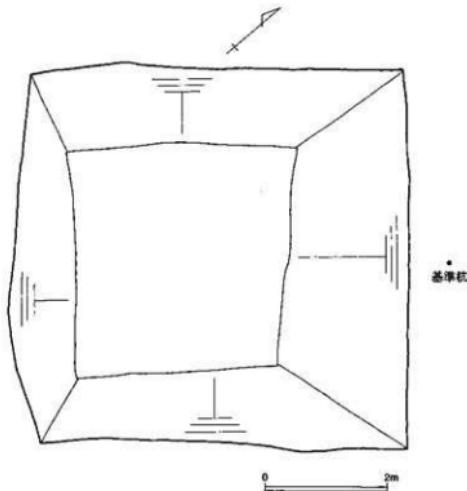
なお、近代以降の土坑内より、摩滅が著しく不明瞭であるが、凹面側に布目痕と思われる痕跡をもつ丸瓦片（19）が1点出土した。



第34図 No.13調査区平面図

#### 【No.14調査区】

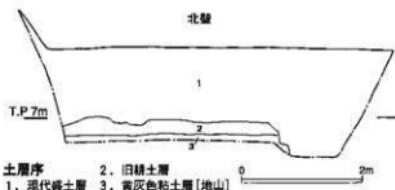
6×6 mの調査区を設定した。現地表面から3m以上掘削を行ったが、現代盛土層・擾乱土層が認められるのみであった。安全面を考えて、それ以上の掘削は行わなかった。



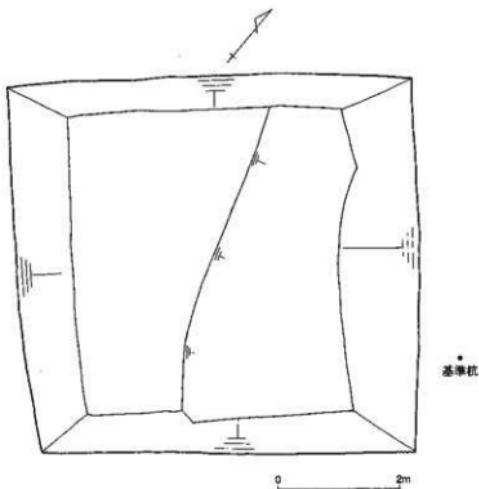
第35図 No.14調査区平面図

### 【No.15調査区】

6.3×6 mの調査区を設定した。約1.2～1.95m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（18～30cm厚）、地山層である黄灰色粘土層の堆積を確認したが、調査区東半部は擾乱を受けており、調査区西半部においても遺構・遺物は検出されなかった。



第36図 No.15調査区土層断面図



第37図 No.15調査区平面図

### 【No.16調査区】

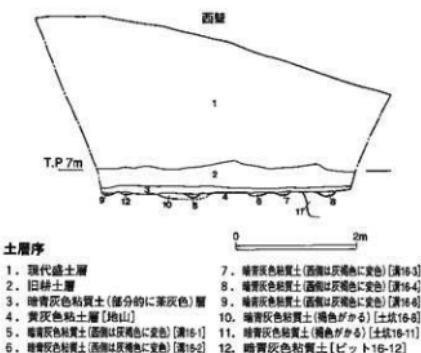
6.5×5.9mの調査区を設定した。約1.3～2.5m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（25～45cm厚）、暗青灰色粘質土（部分的に茶灰色）層（5～15cm）、地山層である黄灰色粘土層の堆積を確認した。このうち、暗青灰色粘質土（部分的に茶灰色）層においては須恵器・土師器・瓦器片の包含を認めることができ、器種は不明であるが壺などの底部と思われる須恵器と瓦器碗を図化することができた（20～22）。

遺構については、暗青灰色粘質土層下において溝、落ち込み、土坑、ピットを検出した。溝は5条検出し、それらはともにN73°Eの方位をもって平行にのびていた。調査区南西端で部

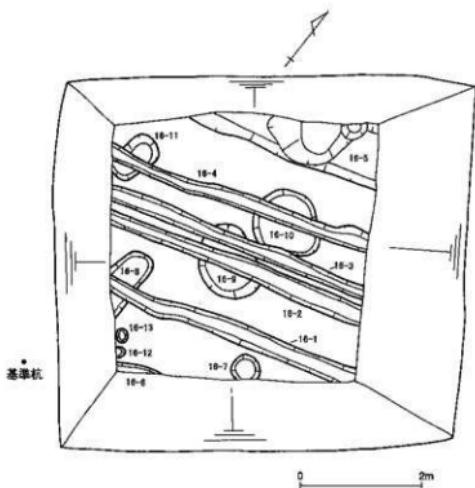
分的に検出した溝16-6を除き、各溝の幅は概ね15~30cmを測り、その深さは、溝16-1・16-2・16-3・16-6で3~5cm、溝16-4で6~9cmを測った。これらの溝の埋土は、調査区東側で暗青灰色粘質土であったが、西側では変色して灰褐色となっていた。

調査区北東側で検出した落ち込み16-5も、その落ち込み肩の方は溝と同じくN73°Eを示し、検出部分で北側へ概ね20cmの深さで落ち込んでいた。さらに落ち込み内には部分的に土坑状に深さ約40cmで窪む箇所があり、もともとは土坑が落ち込みに重複していた可能性がある。落ち込み16-5の埋土は東側で暗青灰色粘質土であったが、西側で変色して灰褐色であった。

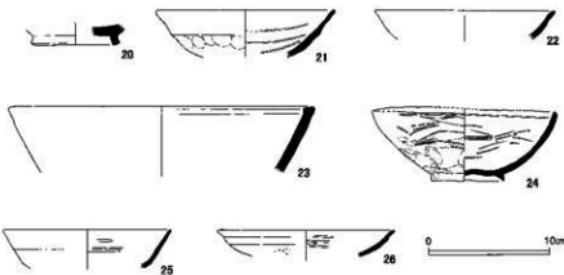
土坑は4基検出したが、すべて溝に重複されていた。土坑16-9・16-10はともに径約1.2mを測り、埋土については、土坑16-9が東半で暗青灰色粘質土、西半で変色して灰褐色粘質土となり、土坑16-10では灰褐色粘質土が埋土であった。土坑16-8はやや細長で長径1m以上、短径約50cm、土坑16-11は長径約80cm、短径約50cmを測り、土坑16-8・16-11の埋土は褐色がかる暗青灰色粘質



第38図 Na16調査区土層断面図



第39図 Na16調査区平面図



20~22: 鮎青灰色粘土質(部分的に茶色)層

(20須恵器底部, 21・22瓦器楕)

23~26: 落ち込み16-5

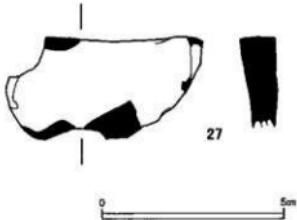
(23須恵器鉢, 24~26瓦器楕)

第40図 No.16調査区出土遺物①

土であった。また、ここでは検出した溝を保存する形で埋め戻したために、溝の下にある土坑を完掘していないが、掘削した範囲での各土坑の深さは、土坑16-8で約10cm、土坑16-9で約19cm、土坑16-10で約6cm、土坑16-11で約50cmを測った。

ピットは3基検出した。ピット16-7は径約45cm、深さ約5cm、ピット16-12は検出部分で径約20cm、深さ約4cm、ピット16-13は径約20cm、深さ約5cmを測った。これらのピットにおいて柱痕は確認されなかった。

さて、これら遺構からは、ピットを除いて須恵器・土師器・瓦器片等が検出されたが、細片が多く、図化できたのは、落ち込み16-5出土の須恵器鉢・瓦器楕(23~26)と溝16-2出土の用途不明の石製品(27)であった。24の瓦器楕は楕葉型のものでほぼ完形に復原できたが、摩滅が著しくてすべての調整を観察するのは難しいものであった。24の瓦器楕については時期がやや古いものであるが、他の遺構出土の遺物も含めてみると、概ねは25・26の瓦器楕のように鎌倉時代を下限時期とするものがみられ、ここでの検出遺構についてはおそらく鎌倉時代のものであろうと考えられる。なお、溝16-2出土の石製品(27)は用途不明であるが、石材の一隅を丸く抉って磨いたような加工が施されている。

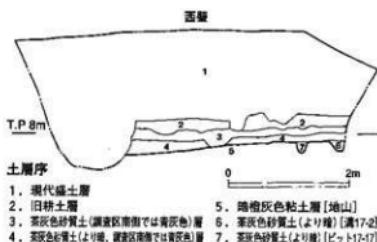


第41図 No.16調査区出土遺物②(石製品)

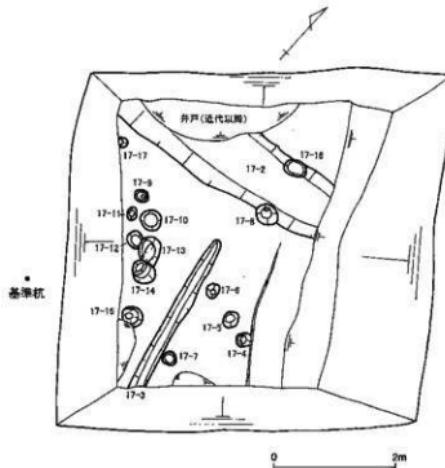
## 【No.17調査区】

6 × 5.7mの調査区を設定した。約0.75～1.5m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（15～25cm厚）、茶灰色砂質土（調査区南側では青灰色）層（10～20cm厚）、茶灰色砂質土（より暗、調査区南側では青灰色）層（10～25cm厚）、地山層である暗橙灰色粘土層の堆積を確認した。このうち、茶灰色砂質土層と茶灰色砂質土（より暗）層には時代相を同じくする古墳時代～中世の須恵器・土師器・瓦器片などの遺物を多く包含していたが、近世以降の瓦片も多く含んでいた。この2層からの出土遺物で図化できたものを第44図（29～34）に示したが、31は凸面に格子目タタキ、凹面に布目痕がみられる平瓦であり、橙灰色を呈している。また、32は飛鳥時代の須恵器杯蓋であり、天井部外表面はヘラ切りの後ナデられ、2条の線刻によるヘラ記号がみられる。

遺構については、調査区北側において旧耕土層下で井戸とみられる大型の土坑を認めたが、ここからは中世以前の須恵器・土師器・瓦器片を含みつつ（図化できたものは28）、近現代の瓦片が検出され、層位的にも時期の新しいものであった。また、茶灰色砂質土（より暗）層下の地山層上面においては溝、ピットを検出した。溝については2条検出した。溝17-2は、幅0.9～1.2m、深さ約27cmを測り、N80°Eの方位をもってのび、溝17-3は、幅25～30cm、深さ6～



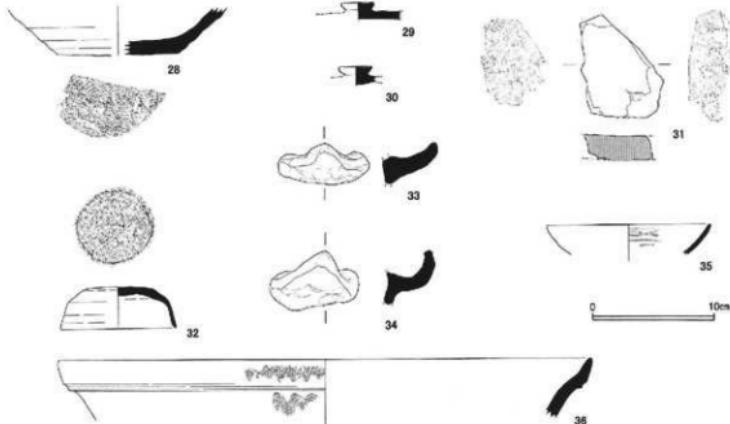
第42図 No.17調査区土層断面図



第43図 No.17調査区平面図

9 cmを測り、方位はN 14° Wを示していた。埋土については、溝17-2で茶灰色砂質土（より暗）、溝17-3で暗青灰色砂質土（褐色混じる）であった。ピットは14基検出した。ピットの径は概ね20~40cmを測ったが、その深さについては相対的に深くなるもので、ピット17-4で約35cm、ピット17-8で約32cm、ピット17-14で約27cm、ピット17-15で約53cm、ピット17-16で約23cmとなり、10~19cmの深さのものがピット17-5・17-9・17-10・17-13、4~8cmのものがピット17-6・17-7・17-11・17-12であった。その埋土については、多くのものが褐色混じりか、褐色砂質土が多く混じる暗青灰色砂質土であったが、ピット17-8については茶灰色砂質土（暗青灰色砂質土混じる）、ピット17-16・17-17は茶灰色砂質土（より暗）であった。ここでは建物跡などに復原できるピットの並びは確認できなかった。

さて、茶灰色砂質土（より暗）層下で検出した遺構に伴っては中世以前の遺物を認めることができた。ピット内からは、ピット17-5・17-7・17-8・17-9・17-14・17-15で須恵器・土師器・瓦器片等の遺物を検出したが、ピット17-8・17-9・17-15では鎌倉時代のものとみられる瓦器腕片が下限時期のものとして認められた（図化できたものは35）。また、溝に伴っては、溝17-2で弥生土器・土師器・須恵器片（図化できたものは36）、溝17-3で須恵器・土師器片を検出し、これらの溝では古墳時代の須恵器蓋杯の破片が下限時期のものとして認められた。このように、ここで検出遺構の時期については、古墳時代のものを含む可能性もあるが、概ね鎌倉時代以前のものではないかと考えられる。ただし、この遺構面の覆土層となる茶灰色砂質土（より暗）層は近世以降に形成された土層であるとみられ、遺物を検出しなかった遺構もあることを鑑みると、検出遺構の中には近世以降のものも含む可能性が考えられる。



28：近代以降土坑（須恵器鉢）, 29~31：茶灰色砂質土層（29・30須恵器蓋, 31平瓦）

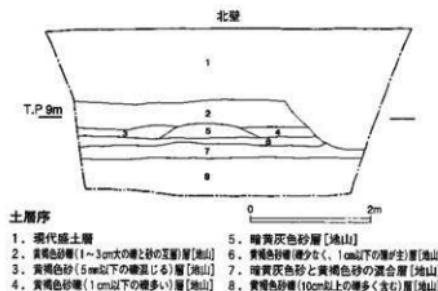
32~34：茶灰色砂質土（より暗）層（32須恵器蓋杯, 33・34土師器把手）

35：ピット17-8（瓦器鉢）, 36：溝17-2（須恵器蓋）

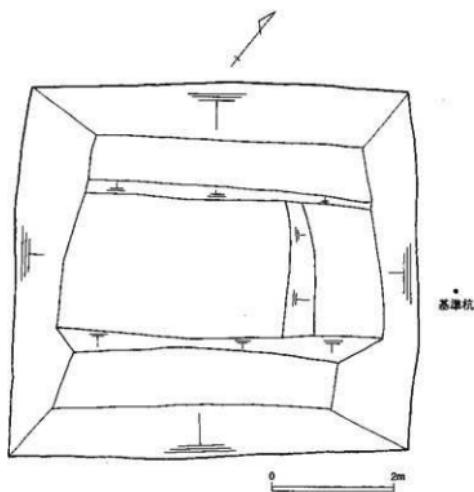
第44図 Na17調査区出土遺物

### 【No.18調査区】

6.3×6 mの調査区を設定した。約1.15m厚の現代盛土層以下、地山層とみられる黄褐色砂礫層等の堆積を確認したが、地山層は擾乱を受けている部分が多く、遺構・遺物については検出されなかった。黄褐色砂礫層は、他の多くの調査区で地山層として確認している黄灰色もしくは青灰色の粘土層とはやや様相が異なり、低位段丘に伴っての土層であろうか。



第45図 No.18調査区土層断面図



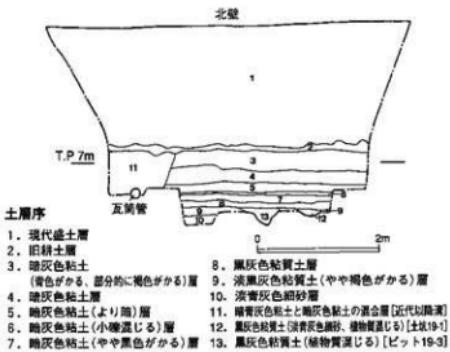
第46図 No.18調査区平面図

## 【No.19調査区】

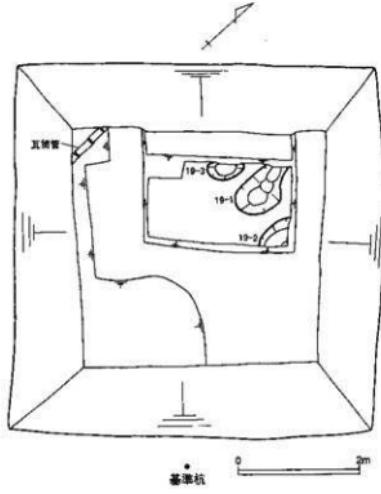
5.9×5.9mの調査区を設定した。約1.95~2m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（5~20cm厚）、暗灰色粘土（青色がかる、部分的に褐色がかる）層（25~35cm厚）、暗灰色粘土層（17~30cm厚）、暗灰色粘土（より暗）層（約15cm厚）、暗灰色粘土（小礫混じる）層（3~6cm厚）、暗灰色粘土（やや黒色がかる）層（10~12cm厚）、黒灰色粘質土層（7~15cm厚）、淡黒灰色粘質土（やや褐色がかる）層（約15cm厚）、淡青灰色細砂層の堆積を確認した。

このうち、暗灰色粘土（青色がかる、部分的に褐色がかる）層以下、黒灰色粘質土層までの各土層において遺物の包含を確認した。

暗灰色粘土（青色がかる、部分的に褐色がかる）層では土師器・須恵器片とともに近世以降の陶磁器片を少量包含していた。暗灰色粘土層と暗灰色粘土（より暗）層では須恵器・土師器片・瓦器片を包含し、下限時期の遺物として中世のものがあった。暗灰色粘土（小礫混じる）層では須恵器・土師器片・暗灰色粘土（やや黒色がかる）層と黒灰色粘質土層では須恵器片を



第47図 No.19調査区土層断面図

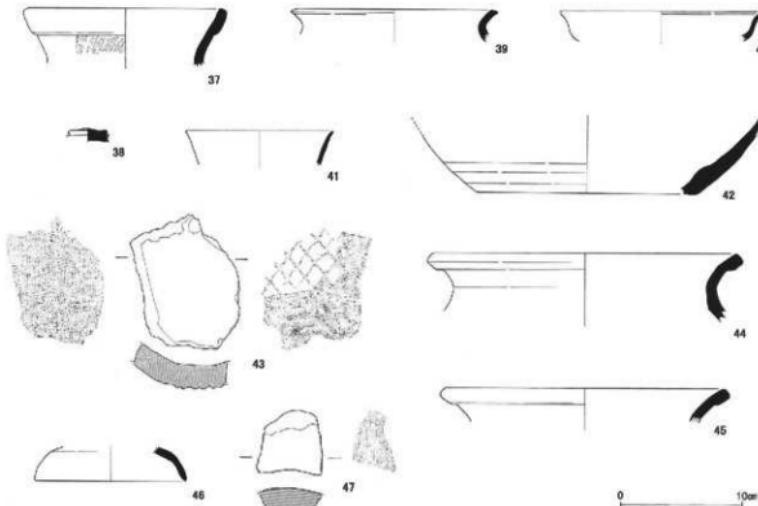


第48図 No.19調査区平面図

包含しており、これら3層の形成時期としてはおそらく古墳時代後期頃ではないかと考えられる。ここでの出土遺物で図化できたものを第49図に示したが、43は暗灰色粘土（より暗）層出土の凸面に格子目タタキ、凹面に布目痕をもつ平瓦である。また、ここでは排出土中からあるが、凹面に布目痕をもち須恵質に焼成された丸瓦片（47）が1点認められた。

造構については、黒灰色粘質土層下においてピットと土坑を検出したが、これらは黒灰色粘質土を主体とする埋土に植物質を多く含んでおり、状況から人為的な掘削によるものではなく、植物痕であろうと考えられる。そして、土坑19-1では須恵器片を少量含み、その中に古墳時代後期のものとみられる杯蓋片（46）が1点あった。

なお、近代以降のものと思われるが、調査区北西隅に旧耕土層下において溝を掘り込み、瓦筒を利用した配水管がみられた。



37・38：暗灰色粘土（青色がかる）層（37須恵器底、38須恵器蓋）。39：暗灰色粘土層（土器器底）  
40～43：暗灰色粘土（より暗）層（40土器器皿、41須恵器底、42須恵器身、43平瓦）  
44：暗灰色粘土（やや黒色がかる）層（須恵器底）。45：黒灰色粘質土層（須恵器底）  
46：土坑19-1（須恵器杯蓋）、47：排出土中（丸瓦）

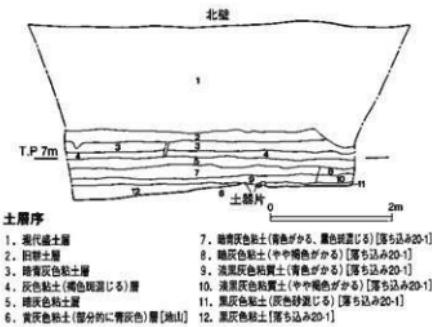
第49図 No.19調査区出土遺物

## [No.20調査区]

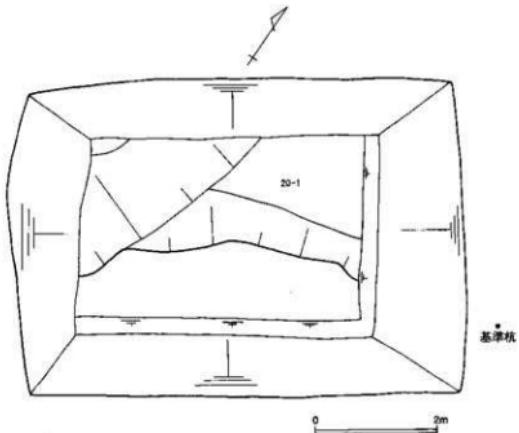
7 × 5 mの調査区を設定した。約1.7 ~1.8m厚の現代盛土層以下、旧耕土層(15~20cm厚)、暗青灰色粘土層(12~20cm厚)、灰色粘土(褐色斑混じる)層(5~15cm厚)、暗灰色粘土層(10~25cm厚)、地山層である黄灰色粘土(部分的に青灰色)層の堆積を確認した。

このうち、暗青灰色粘土層では須恵器・土師器・瓦片・灰色粘土(褐色斑混じる)層では土師器・瓦器片・暗灰色粘土層では土師器・黒色土器片が少量化ずつ包含するのを確認し、灰色粘土(褐色斑混じる)層においては中世、暗灰色粘土層では平安時代の遺物が下限時期のものとして認められた。ここで図化できたものには、暗青灰色粘土層出土の土師器羽釜(48)と布目痕を残す平瓦(49)があった。

遺構については、暗灰色粘土層下において落ち込み1か所を検出した。落ち込み20-1は、調査区の北側へ向かって25~50cmの深さで落ち込み、調査区北西側で深くなり、落ち込み肩はやや屈曲しながら東西方向へのびていた。その埋土は、上層が暗青灰色もしくは暗灰色の粘土で、下層が淡黒灰色粘質土・黒灰色粘土であった。堆積状況から人為的な掘削によるものではなく、自然地形の落ち込みと考えられるが、落ち込み内からは遺物が出土し、多くの須恵器片とともに

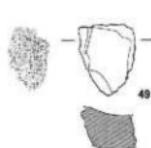


第50図 No.20調査区土層断面図



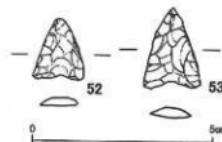
第51図 No.20調査区平面図

に少量の土師器片、そして石鎚 2 点（52・53）が出土した。須恵器片の量は多かったものの、ほとんどが壺の部体片で時期を明確にとらえ得る部位はなかったが、共伴の土師器片には、古墳時代のものとみられるもの（50・51）があった。このことから、落ち込み 20-1 の堆積時期は概ね古墳時代中～後期になるものと考えられる。



48・49：暗青灰色粘土層（48土師器羽垂、49平瓦）  
50・51：落ち込み 20-1（50土師器壺、51土師器高杯？）

第52図 No.20調査区出土遺物①



第53図 No.20調査区出土遺物②（石鎚）

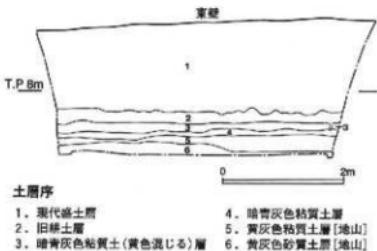
### 【No.21調査区】

6.2×6.1m の調査区を設定した。約 1.3～1.55 m 厚の現代盛土層以下、旧耕土層（20～25cm 厚）、暗青灰色粘質土（黄色混じる）層（10～18cm 厚）、暗青灰色粘質土層（6～12cm 厚）、地山層である黄灰色粘質土～黄灰色砂質土層の堆積を確認した。このうち、暗青灰色粘質土（黄色混じる）層と暗青灰色粘質土層に少量の遺物の包含があったが、両層はほぼ同質であったことから、掘削段階では両層を 1 土

層としてとらえ、遺物も 1 土層内のものとして取り上げた。遺物には、須恵器・土師器・瓦器・瓦片があり、下限時期のものとして中世の瓦器片が認められた。

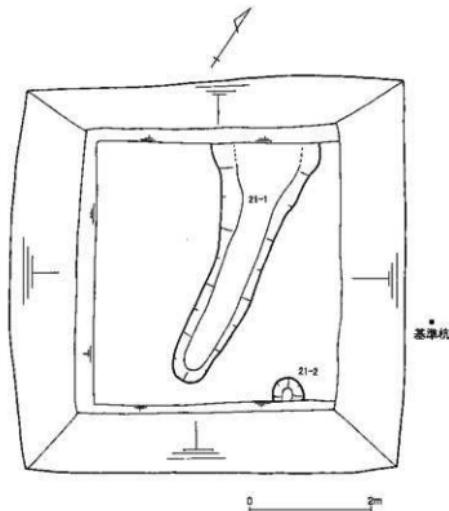
遺構については、暗青灰色粘質土層下において溝 1 条とピット 1 基を検出した。溝 21-1 は、幅 0.65～1.8m、深さ約 6～10cm を測り、概ね N 10° W の方位をもってのびていた。埋土は暗青灰色砂質土であった。ピット 21-2 は、検出部分で径約 50cm、深さ約 10cm を測り、埋土は灰色粘土（青色がかる）であった。遺構内から遺物の出土はなかったが、覆土層で中世の遺物がみられたことから、遺構の時期としては中世以前のものであるという可能性が考えられる。

なお、ここでの出土遺物で図化できるものはなかった。



第54図 No.21調査区土層断面図

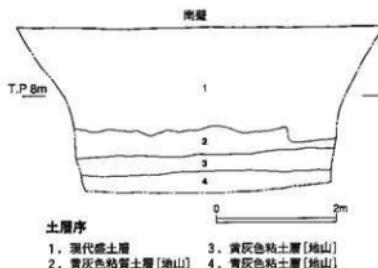
- |                    |                |
|--------------------|----------------|
| 1. 現代盛土層           | 4. 暗青灰色粘質土層    |
| 2. 旧耕土層            | 5. 黄灰色粘質土層〔地山〕 |
| 3. 暗青灰色粘質土（黄色混じる）層 | 6. 黄灰色砂質土層〔地山〕 |



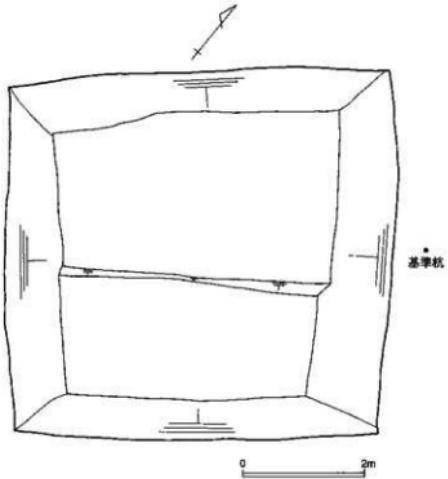
第55図 No.21調査区平面図

### 【No.22調査区】

6.1×5.7mの調査区を設定した。約1.65～1.9m厚の現代盛土層直下において、地山層である黄灰色粘質土層等の堆積を確認した。旧地形は既に削平を受けているとみられ、遺構・遺物は検出されなかった。



第56図 No.22調査区土層断面図

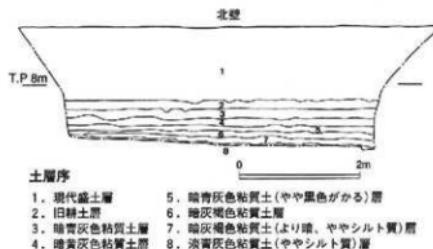


第57図 No.22調査区平面図

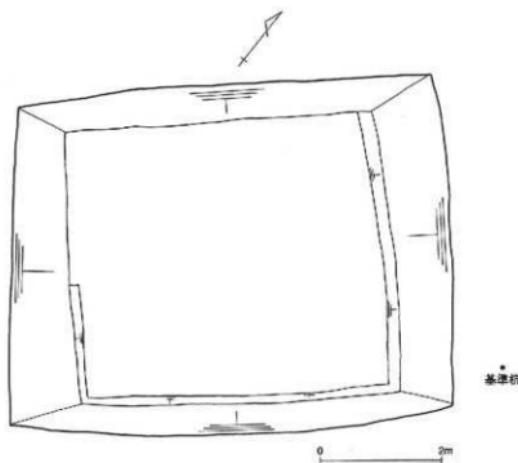
### [No.23調査区]

$7 \times 5.2m$ の調査区を設定した。約12~12.5m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（10~15cm厚）、暗青灰色粘質土層（8~18cm厚）、暗黄灰色粘質土層（5~16cm厚）、暗青灰色粘質土（やや黒色がかる）層（6~13cm厚）、暗灰褐色粘質土層（4~12cm厚）、暗灰褐色粘質土（より暗、やシルト質）層（8~12cm厚）、淡青灰色粘質土（ややシルト質）層の堆積を確認した。

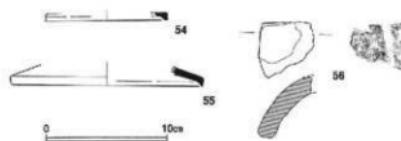
このうち、暗青灰色粘質土層では須恵器・土師器・瓦器・瓦片、暗黄灰色粘質土層では須恵器・土師器・黒色土器・瓦器片、灰釉陶器とみられる蓋細片（54）の包含が認められ、それぞれ中世の瓦器片が下限時期のものとしてあったが、暗黄灰色粘質土層では平安時代の遺物が主体であった。また、暗青灰色粘質土（やや黒色がかる）層では須恵器・土師器片・瓦片が出土し、細片ではあるが図化できたものに、飛鳥時代から平安時代初期頃のものとみられる須恵器片（55）と残存部分で布目等はないが中世以前のものとみられる丸瓦片（56）があった。また、暗灰褐色粘質土層と暗灰褐色粘質土（より暗、やシルト質）層については、掘削段階では両層を1土層としてとらえ掘削し、遺物も1土層内のものとして取り上げ、少量ながら古代以前のものとみられる須恵器・土師器片を検出した。しかし、この調査区では遺構を検出することはできなかった。



第58図 No.23調査区土層断面図



第59図 No.23調査区平面図



54: 暗黄灰色粘質土層(灰陶器器)

55・56: 暗青灰色粘質土(やや黒色がかる)層(55灰陶器器、56丸瓦)

第60図 No.23調査区出土遺物

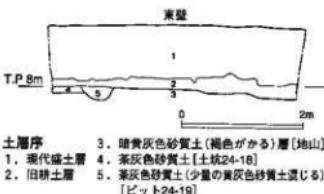
## 【No24調査区】

6.8×4.4mの調査区を設定した。約0.9~1m厚の現代盛土層以下、旧耕土層(8~35cm厚)、地山層である暗黄灰色砂質土(褐色がかる)層の堆積を確認した。調査区南半は旧耕土層が地山層を切り込む形で約10~20cmほど落ち込んでいた。そして、旧耕土層直下の地山層上面において建物跡、ピット、土坑を検出した。

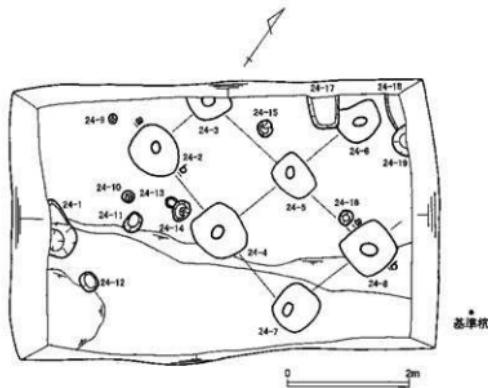
土坑は1基検出したが、土坑24-18は部分的に検出したもので、長さ65cm以上、深さ約10cmを測った。埋土は茶灰色砂質土であった。

ピットは18基検出し、このうちピット24-2~24-8の7基には柱痕が認められ、建物跡として復原できる並びを確認した。少なくとも2間×2間の規模となり、ピット24-2とピット24-7の並びの距離(柱痕間)が約3.4mで、各柱痕間が約1.7m、ピット24-3とピット24-8の並びでは約3.6mで各柱痕間が約1.8mとなる。そして、ピット24-4とピット24-6の並びでは約3mとなるが、ピット24-4とピット24-5間が約1.6m、ピット24-5とピット24-6間が約1.4mとなり、またピット24-2とピット24-3間が約1.2m、ピット24-7とピット24-8間が約1.7mというように、ピット間の距離に多少の差異があった。建物跡南北軸の方位は概ねN 15° Eを示していた。

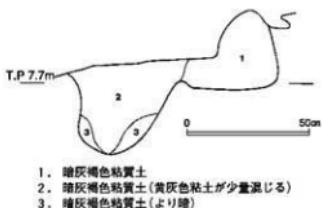
建物跡を構成する柱穴についてみると、柱穴掘り方の平面形は、やや卵形となるピット24-2と調査区にかかり全体形が不明なピット24-3の他は概ね方形を呈し、また柱痕は梢円形を呈していた。ピット24-2は掘り方長径約85cm、短径約77cm、柱痕長径約20cm、短径約15cm、ピット24-3は検出部分で掘り方径約60cm、柱痕約20cmを測った。ピット24-4は掘り方長径約85cm、短径



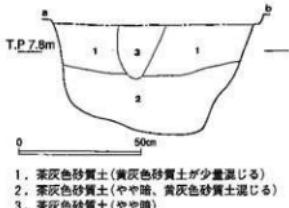
第61図 No.24調査区土層断面図



第62図 No.24調査区平面図



第63図 ピット24-1埋土(西壁)



第64図 ピット24-2埋土



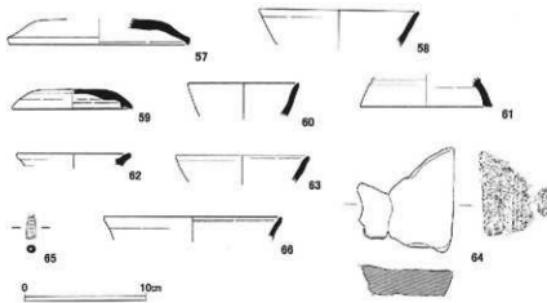
第65図 ピット24-8埋土

約80cm、柱痕長径約25cm、短径約18cm、ピット24-5は掘り方長径約73cm、短径約57cm、柱痕長径約22cm、短径約15cm、ピット24-6は掘り方長径約70cm、短径約57cm、柱痕長径約23cm、短径約15cmを測った。そして、ピット24-7は掘り方長径約73cm、短径約70cm、柱痕長径約25cm、短径約15cm、ピット24-8は掘り方径が約78cm、柱痕長径約30cm、短径約20cmを測った。今回の調査では、検出遺構を出来る限り現地保存することを基本としていたため、これらの柱穴については、ピット24-2とピット24-8の2基について半掘りして、その深さと埋土の堆積状況を確認した。深さについてはピット24-2で約50cm、ピット24-8で約40cmを測った。また埋土については茶灰色砂質土を主とするものであった。

この他のピットについてみると、ピット24-1は部分的に検出したものであるが、径90cm以上、深さ約60cmを測り、埋土は暗灰褐色粘質土を主とするものであった。ピット24-17とピット24-19についても検出部分で径(長さ)を50cm以上測るもので、ピット24-17で深さ約15cm、ピット24-19で約20cmを測り、埋土はピット24-17で茶灰色粘質土、ピット24-19で茶灰色砂質土であった。

この他、径25~30cm程度のピット(ピット24-11・24-12・24-14・24-15・24-16)と、径15~18cm程度のピット(ピット24-9・24-10・24-13)があり、深さはピット24-15で約38cm、ピット24-16で約29cmと深いものであった。また、ピット24-12で約13cm、ピット24-14で約14cmの深さを測ったが、ピット24-12については、ピット24-12の辺りが元々の地盤面レベルより旧耕土層が約20cmの深さで切り込んでいることを考えると、ピットの本来の深さは30cm程度あったと思われる。他のピットについては、深さ8cm以下のものであった。これらのピットの埋土については、暗灰褐色砂質土を主とするものであった。

ここでの出土遺物であるが、建物跡を構成する柱穴からの遺物をみると、古代以前のものとみられる須恵器・土師器片があった(59~62)。時期がわかるものとしては、ピット24-2において飛鳥時代の須恵器杯蓋(59)があった。また、この他の遺構からも古代以前のものとみられる須恵器・土師器片が出土したもの、細片が多く時期が明確にとらえられるものは少なかつ

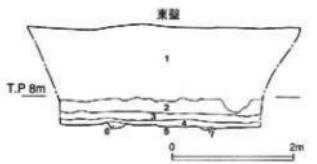


第66図 No.24調査区出土遺物

た。その中で、同じく飛鳥時代のものではないかとみられる須恵器片もしくは土師器片がピット24-1・24-11・24-14で検出されたが、これらも細片であり、部分的にみると奈良～平安時代初期にかけてのものと似るものもある。また、ピット24-11では縄目タキ痕のある平瓦片(64)があり、飛鳥時代より時代が下る可能性がある。このことから考えると、ここで検出した建物跡については概ね飛鳥時代のものと考えられるが、ピット24-11で平瓦片の出土があり、さらにピット24-10においては瓦器の細片が1点検出されており、建物跡以外のピット・土坑には飛鳥時代より新しい時期のものが含まれている可能性がある。

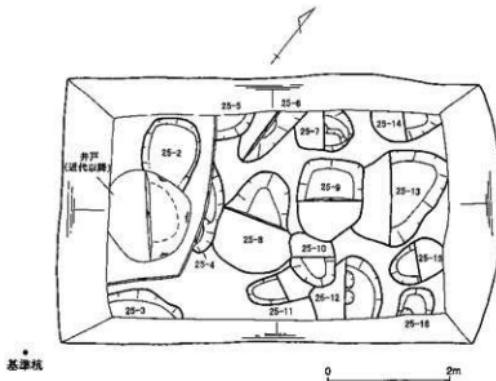
### [No.25調査区]

6.8×4.3mの調査区を設定した。約1.1～1.25m厚の現代盛土層以下、旧耕土層(15～25cm厚)、暗青灰色・暗黄灰色粘質土層(10～15cm厚)、黄色粘土(やや暗)層(5～10cm厚)、地山層である黃灰色粘土層の堆積を確認した。このうち、暗青灰色・暗黄灰色粘質土層では須恵器・土師器・瓦器・綠釉陶器片とともに近世以降のものとみられる陶磁器片を包含し、黄色粘土(やや暗)層では須恵器・土師器・黒色土器片を包含していた。



土層序  
1. 現代盛土層  
2. 旧耕土層  
3. 黃灰色粘土層  
4. 地山  
5. 黃灰色粘土層 [地山]  
6. 黃灰色粘土と暗青褐色粘土と淡灰褐色粘土が  
ブロック状に混合する [上25-3]  
7. 黃灰色粘土と暗青褐色粘土と淡灰褐色粘土が  
ブロック状に混合する [下25-5]

第67図 No.25調査区土層断面図



第68図 Na25調査区平面図

なお、調査区西端では旧耕土層下において近代以降のものとみられる井戸があり、その築造の影響を受けたためか、旧耕土層と黄色粘土（やや暗）層の間に上記の土層と質がやや異なる土層の堆積が部分的にみられた。

遺構については、2面の遺構面を検出した。暗青灰色・暗黄灰色粘質土層下（第1面）においては、調査区西端で近代以降の井戸に重複される形で土坑1基を検出した。土坑25-2は、長径1m以上、短径約95cm、深さ約10cmを測り、埋土は暗青灰色粘質土（黄灰色粘土混じる）であった。土坑25-2内からは中世以前のものとみられる土師器片を2点検出した。しかし、遺物量は少なく、その埋土と土質が似た覆土層には近世以降の遺物が含まれていたことを考えると、土坑25-2が中世以前のものであるかどうかは明確ではない。

黄色粘土（やや暗）層下（第2面）においては、土坑を14基検出した。土坑は密集して重複するものが多く、全体形がわかるものをみると、大型のものでは、土坑25-8は長径約1.7m、短径約1.2m、深さ約14cm、土坑25-9は長径約1.3m、短径約1.1m、深さ約7cm、土坑25-13は長径約1.9m、短径約1.5m、深さ約10cmを測った。また、やや小型のものでは、土坑25-10は長径約1m、短径約75cm、深さ約9cm、土坑25-15は長径約95cm、短径約60cm、深さ約7cmを測った。他の土坑については多くが調査区壁にかかるなどして全体形が不明であるが、深さは概ね10~14cmを測った。ただし、土坑25-6は約25cm、土坑25-14は約19cmとやや深く、土坑25-11は約4cmと浅いものであった。これら土坑の埋土については、黄灰色粘土と暗灰褐色粘土、淡灰褐色粘土がブロック状に混合したものであり、土坑が一気に埋められた状況を示すものである。これら土坑からの出土遺物については、土坑25-5から須恵器甕体部片1点が出土したのみであり、その時期を判断するのは難しいが、覆土層である黄色粘土（やや暗）層において黒色土器片が下限時期の遺物としてあったことから、第2面は平安時代以前のものであろうと考えられる。

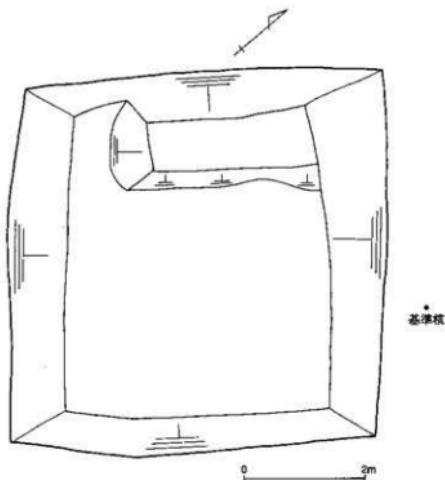
なお、ここで出土遺物で図化できたのは、暗青灰色・暗黄灰色粘質土層出土の土師器釜（67）の1点のみであった。



第69図 No.25調査区出土遺物

### 【No.26調査区】

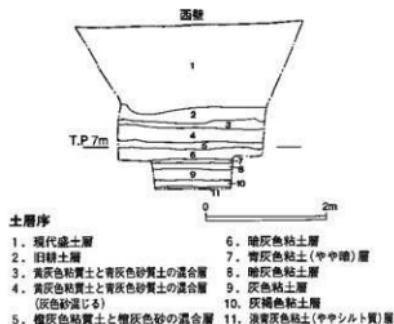
5.9×5.8mの調査区を設定した。地表面から現代盛土層を約1.7m掘削したところ、既往の工事によるコンクリートが厚く敷かれていた。そして、部分的にコンクリートを掘り下げるに、搅乱土層があり、その直下（地表面から約2.4m）において地山層である黄灰色砂質土（やや粘質）層を確認した。限られた範囲での掘削ではあったが、この調査区は既に削平を受けていると判断し、これ以上の掘削は行わなかった。



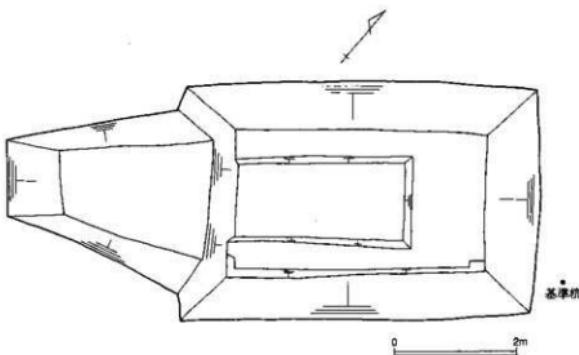
第70図 No.26調査区平面図

## 【No.27調査区】

西側部分で掘削土置き場確保のために現代盛土層の範囲内で一部拡張して掘り下げたが、基本的に $5.7 \times 3.7\text{m}$ の調査区を設定した。約 $1.3 \sim 1.4\text{m}$ 厚の現代盛土層以下、旧耕土層（ $20 \sim 25\text{cm}$ 厚）、黄灰色粘質土と青灰色砂質土の混合層（ $6 \sim 17\text{cm}$ 厚）、黄灰色粘質土と青灰色砂質土の混合（灰色砂混じる）層（ $20 \sim 26\text{cm}$ 厚）、橙灰色粘質土と橙灰色砂の混合層（ $8 \sim 14\text{cm}$ 厚）、暗灰色粘土層（ $16 \sim 22\text{cm}$ 厚）、青灰色粘土（やや暗）層（約 $6\text{cm}$ 厚）、暗灰色粘土層（ $8 \sim 12\text{cm}$ 厚）、灰色粘土層（ $16 \sim 18\text{cm}$ 厚）、灰褐色粘土層（約 $10\text{cm}$ 厚）、淡青灰色粘土（ややシルト質）層の堆積を確認した。黄灰色粘質土と青灰色砂質土の混合層以下の土層については、湿地的環境の中で堆積したものとみられるが、掘削した範囲において遺構・遺物は検出されなかった。



第71図 No.27調査区土層断面図



第72図 No.27調査区平面図

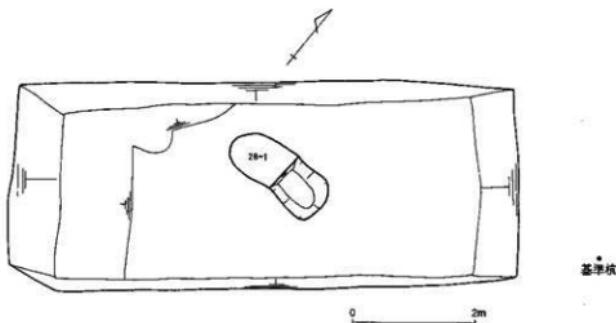
## 【No.28調査区】

8.1×3mの調査区を設定した。約1.35～1.5m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（10～30cm厚）、暗青灰色粘土（褐色がかる）層（6～12cm厚）、地山層である黄灰色粘土（やや淡）層の堆積が認められ、旧耕土層と暗青灰色粘土（褐色がかる）層の間には、部分的に灰褐色砂質土層と暗青灰色砂質土層の堆積があった。このうち、暗青灰色粘土（褐色がかる）層では須恵器・土師器・瓦器・瓦片及び石鐵の包含があり、図化できたのは須恵器片・瓦片・石鐵など（70～76）の古代以前のものばかりであったが、下限時期の遺物としては中世の瓦器片があった。また、盛土層の除去中において青磁片（68）と布目痕のある丸瓦（69）を検出した。

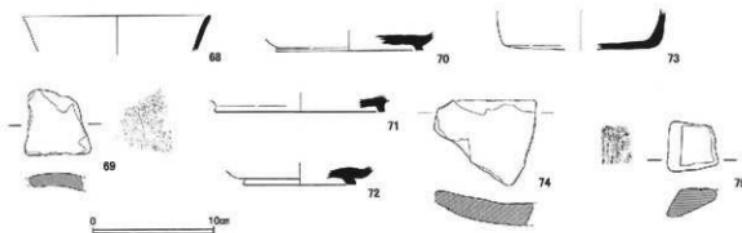
造構については、暗青灰色粘土（褐色がかる）層下において土坑1基を検出した。土坑28-1は、長径約1.8m、短径約70cm、深さ約8cmを測り、埋土は暗青灰色粘土（褐色がかる、黄褐色粘土混じる）であった。土坑内から遺物の出土はなかったが、覆土層において中世の遺物が認められたことから、造構の時期として中世以前のものである可能性が考えられる。



第73図 No.28調査区土層断面図

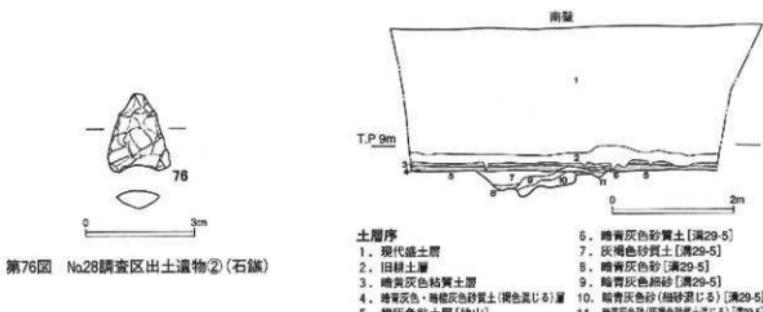


第74図 No.28調査区平面図



68・69：盛土層除去中（68青磁柄、69丸瓦）  
70～75：暗青灰色粘土（褐色がかる）層（70・71須恵器杯、72・73須恵器壺？、74・75平瓦）

第75図 No.28調査区出土遺物①



第76図 No.28調査区出土遺物②（石錐）

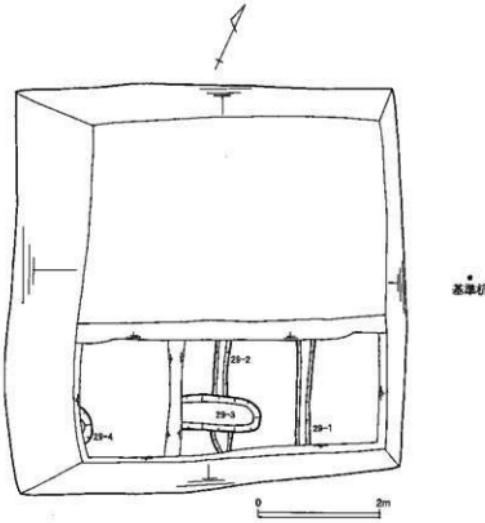
- 土層序  
 1. 現代盛土層  
 2. 旧耕土層  
 3. 暗黄灰色粘土層  
 4. 暗青灰色・暗橙灰色砂質土（褐色混じる）層  
 5. 橙灰色粘土層【地山】  
 6. 暗青灰色砂質土【溝29-5】  
 7. 灰褐色砂質土【溝29-5】  
 8. 暗青灰色砂質土【溝29-5】  
 9. 暗青灰色砂質土【溝29-5】  
 10. 暗青灰色砂質土（褐色混じる）【溝29-5】  
 11. 暗青灰色砂質土（褐色混じる）【溝29-5】

第77図 No.29調査区土層断面図

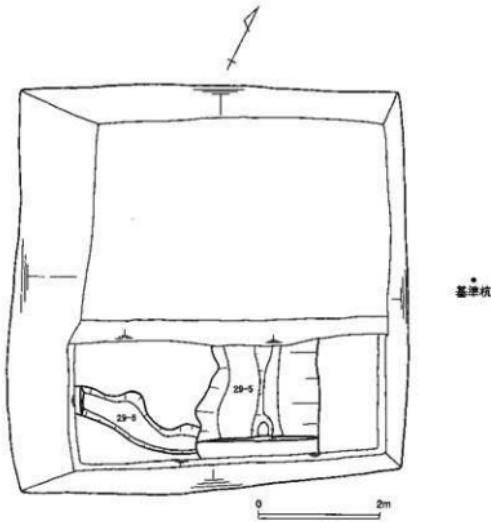
### [No.29調査区]

6.3×6.2mの調査区を設定した。調査区の北側2/3程度は攪乱を受けていたが、約2～2.1m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（10～40cm厚）、暗黄灰色粘土層（4～6cm厚）、暗青灰色・暗橙灰色砂質土（褐色混じる）層（5～10cm厚）、地山層である橙灰色粘土層の堆積を確認した。このうち、暗黄灰色粘土層と暗青灰色・暗橙灰色砂質土（褐色混じる）層において須恵器片を各々1点検出し、暗青灰色・暗橙灰色砂質土（褐色混じる）層出土の須恵器については古墳時代後期の杯身（77）であった。

遺構については、2面の遺構面を検出した。暗黄灰色粘土層下（第1面）においては、溝3条と土坑1基を検出した。溝については、溝29-1は、幅約25cm、深さ約2cmを測り、埋土は暗黄灰色粘土であり、溝29-2は、幅20～35cm、深さ約5cmを測り、埋土は暗黄灰色粘土（暗青灰色砂質土混じる）であった。溝29-1・29-2は概ねN25°Wの方位をもって平行してのびていた。溝29-3は、溝29-2に直交する形で重複して検出され、幅約60cm、深さ約3cmを測り、埋土は暗青灰色砂質土（暗黄灰色粘土混じる）であった。土坑については、土坑29-4は部分的に検



第78図 No.29調査区平面図(第1面)



第79図 No.29調査区平面図(第2面)

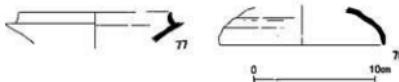
出したもので、径60cm以上、深さ約5cmを測り、埋土は暗青灰色砂質土（暗黄灰色粘質土混じる）であった。第1面の時期については、遺構内から遺物の出土がなく、覆土層においても古墳時代後期以降のものと思われる須恵器の細片1点が出土したのみであり、時期の特定は難しい。

暗青灰色・暗橙灰色砂質土（褐色混じる）層下（第2面）においては、溝2条を検出した。溝29-5は、幅1.6~2.2m、深さ約20cm（部分的に約40cm）を測り、概ねN30°Wの方位をもってのびていた。埋土は断面図のように、上層が暗青灰色もしくは灰褐色の砂質土、下層が暗青灰色系の砂層となり、流水に伴って堆積したものと考えられる。溝29-6は、溝29-5に重複される形で検出され、幅35~70cm、深さ10~22cmを測り、やや屈曲して概ねN80°Eの方位をもってのび、その埋土は暗灰褐色粘質土であった。第2面の時期については、溝29-5から遺物の出土があり、そこでは古墳時代後期の須恵器片（図化できたものは78）を中心としつつ土師器片がみられた。そして、覆土層において1点のみであるが古墳時代後期の杯身片が含まれていたことを考えると、第2面は、概ね古墳時代後期に相当するものであろうと考えられる。

### 【No.30調査区】

6.4×6.2mの調査区を設定した。約1.3~1.6m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（6~20cm厚）、暗青灰色粘質土層（15~22cm厚）、暗青灰色粘質土（黄色混じる）層（10~20cm厚）、地山層である黄灰色粘土層の堆積を確認した。このうち、暗青灰色粘質土層と暗青灰色粘質土（黄色混じる）層に須恵器・土師器・瓦器・瓦片の包含が認められたが、両層はほぼ同質であったことから、掘削段階では両層を1土層としてとらえ、遺物も1土層内のものとして取り上げた。

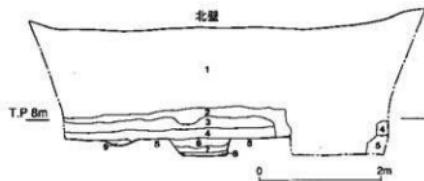
遺構については、暗青灰色粘質土（黄色混じる）層下において土坑6基、ビット1基を検出した。土坑については、土坑30-1は、平面形がやや不定形であるが、長径2.1m程度、短径1~1.5m、深さ約30cmを測り、土坑30-2は、長径1.8m以上、短径約1.4m、深さ約65cmを測った。他の土坑については部分的な検出であったが、土坑30-3は径約1.1m、深さ約30cm、土坑30-4は径1.1m以上、深さ約24cm、土坑30-5は径約60cm、深さ約20cm、土坑30-6は長径90cm以上、短径約



77: 暗青灰色・暗橙灰色砂質土（褐色混じる）層（須恵器杯身）

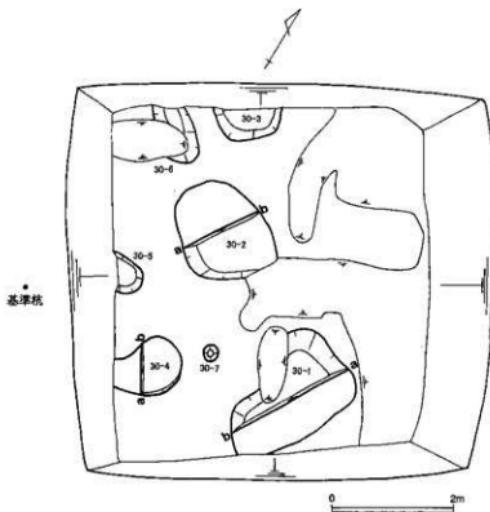
78: 溝29-5（須恵器杯蓋）

第80図 No.29調査区出土遺物

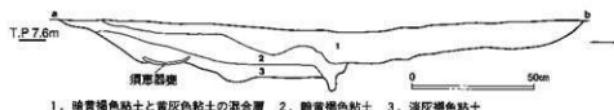


土層序  
1. 現代盛土層  
2. 旧耕土層  
3. 暗青灰色粘土層  
4. 暗青灰色粘土（黄色混じる）層  
5. 黄灰色粘土層 [地山]  
6. 暗黃褐色粘土 [土坑30-3]  
7. 灰褐色粘土 [暗青色粘土層上に混じる] [土坑30-3]  
8. 灰褐色粘土 [土坑30-3]  
9. 暗青褐色粘土 (黄色混じる) 層  
9. 暗青褐色粘土 [土坑30-6]

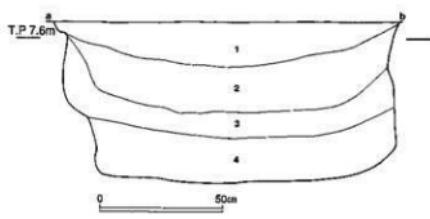
第81図 No.30調査区土層断面図



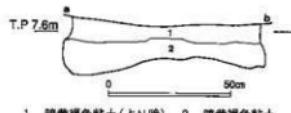
第82図 No.30調査区平面図



第83図 土坑30-1埋土



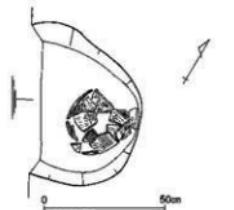
第84図 土坑30-2埋土



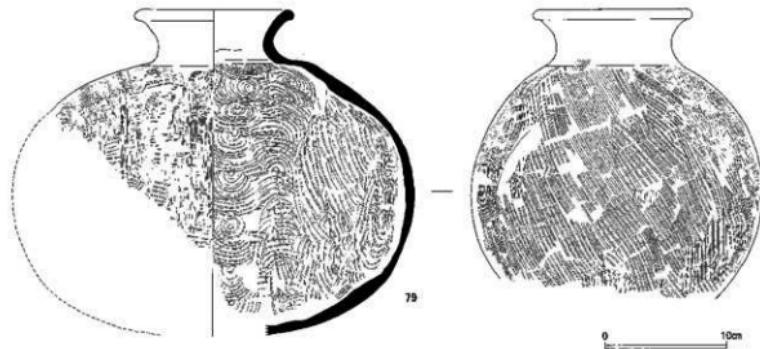
第85図 土坑30-4埋土

60cm、深さ約10cmを測った。ピットについては、ピット30-7は、径約20cm、深さ約6cmを測った。これら遺構の埋土は、土坑30-5で暗青灰色粘土（暗黄褐色粘土混じる）、ピット30-7で暗黄褐色粘土（より暗）であり、他は断面図・遺構埋土図にあるように、暗黄褐色粘土を主とするものであった。

遺構の時期については、土坑30-1・30-2・30-5において須恵器が出土した。土坑30-1・30-2出土の須恵器は壺の体部片で少量であったが、土坑30-5においては、体部の3分の1は欠損していたものの、1個体分の横瓶（79）が口縁部を下に向けた状態で検出された。この横瓶については6世紀末頃のものとみられ、ここで検出した遺構は、概ね古墳時代後期のものであろうと考えられる。



第86図 土坑30-5須恵器横瓶出土状況

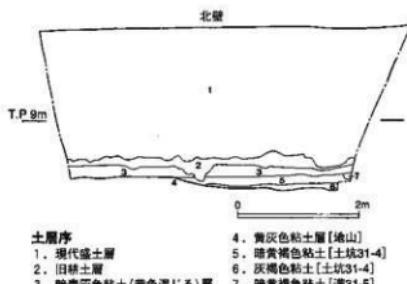


第87図 No.30調査区出土遺物

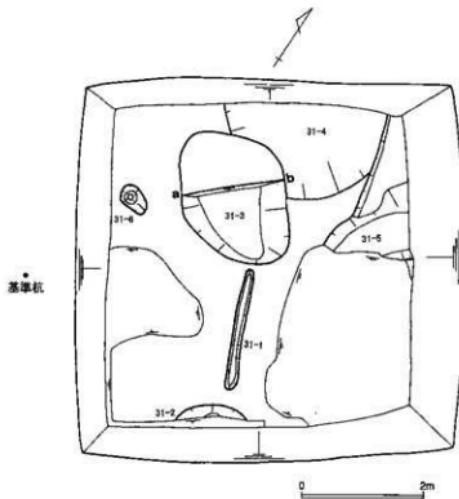
### 【No.31調査区】

6×5.9mの調査区を設定した。約2.05~2.3m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（5~25cm厚）、暗青灰色粘土（黄色混じる）層（8~20cm厚）、地山層である黄灰色粘土層の堆積を確認した。そして、暗青灰色粘土（黄色混じる）層には須恵器・土師器・瓦器片の包含が認められた。

遺構については、暗青灰色粘土（黄色混じる）層下において溝2条、土坑



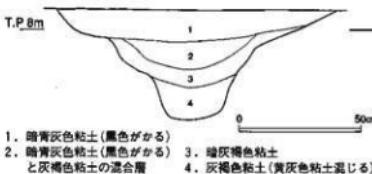
第88図 No.31調査区土層断面図



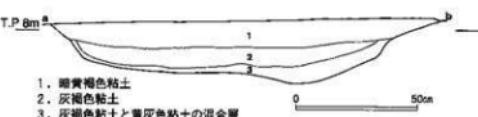
第89図 No.31調査区平面図

3基、ピット1基を検出した。溝については、溝31-1は長さ約2m、幅約15cm、深さ2cmを測り、概ねN25°Wの方位をもってたのびていた。溝31-5は部分的に検出したものであるが、最深部で約58cmを測った。土坑については、土坑31-2は部分的に検出したものであるが、径1.15m以上、深さ約45cmを測り、土坑31-3は、長径約2.45m、短径約1.75m、深さ約25cmを測った。土坑31-4は、溝31-5と土坑31-3に重複される形で検出したもので、径1.55m以上、深さ約25cmを測った。ピットについて、ピット31-6は、長径約50cm、短径約35cm、深さ約20cmを測った。これら遺構の埋土は、溝31-1で暗青灰色粘質土、土坑31-2で暗青灰色粘土（黒色がかる）と灰褐色系の粘土等からなる土、ピット31-6で暗黄褐色粘土、他の遺構では暗黄褐色粘土と灰褐色系の粘土等からなる土が認められた。

遺構の時期については、詳細な時期を判断できる遺物がなく、固化できるものもなかったが、土坑31-2・31-3・31-4及び溝31-5においておそらく古墳時代のものとみられる須恵器片を検出し



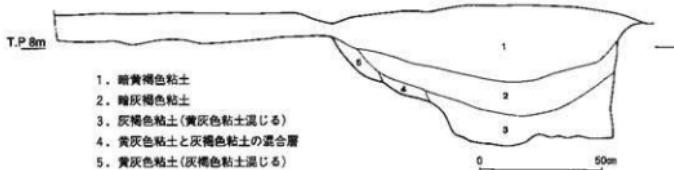
第90図 土坑31-2埋土（南壁）



第91図 土坑31-3埋土

ピットについては、ピット31-6は、長径約50cm、短径約35cm、深さ約20cmを測った。これら遺構の埋土は、溝31-1で暗青灰色粘質土、土坑31-2で暗青灰色粘土（黒色がかる）と灰褐色系の粘土等からなる土、ピット31-6で暗黄褐色粘土、他の遺構では暗黄褐色粘土と灰褐色系の粘土等からなる土が認められた。

遺構の時期については、詳細な時期を判断できる遺物がなく、固化できるものもなかったが、土坑31-2・31-3・31-4及び溝31-5においておそらく古墳時代のものとみられる須恵器片を検出し



第92図 溝31-5埋土(東壁)

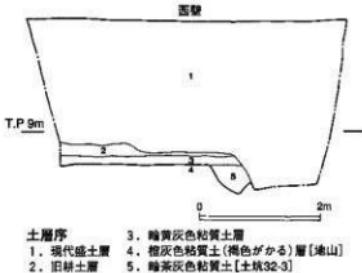
た。このことから、ここで検出した遺構は概ね古墳時代のものではないかと考えられる。ただし、溝31-1については、その埋土が覆土層とほぼ同質であり、他の遺構とは異質であったことから、時期が異なり、覆土層に伴うものであるとみると、中世の溝ではないかと考えられる。

### [No.32調査区]

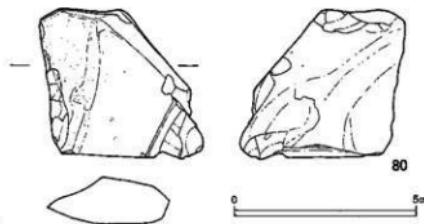
$7.4 \times 5.2\text{m}$ の調査区を設定した。調査区の北側1/3程度は擾乱を受けていたが、約2.05~2.2m厚の現代盛土層以下、旧耕土層(5~25cm厚)、暗黄灰色粘質土層(約15cm厚)、地山層である橙灰色粘質土(褐色がかる)層の堆積を確認した。このうち、暗黄灰色粘質土層ではサヌカイト剥片と土師器片を各1点検出した。サヌカイト剥片(80)は風化度合いから弥生時代のものとみられ、土師器片については中世以前のものようであるが、時期は明確でない。

遺構については、暗黄灰色粘質土層下において溝2条と土坑1基を検出した。溝32-1は、長さ2m以上、幅約85cm、深さ27~47cmを測り、N $77^{\circ}$ Wの方位をもっており、溝32-2は、長さ約1.3m、幅約40cm、深さ約31cmを測り、N $20^{\circ}$ Wの方位をもっており、土坑32-3については、長径1.3m以上、短径1m以上、深さ約40cmを測った。

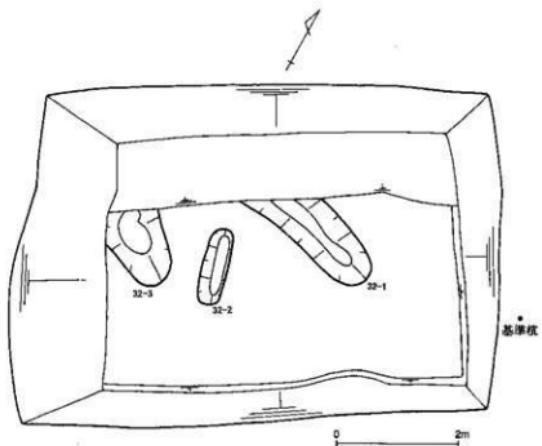
遺構の埋土は溝・土坑とともに暗茶灰色粘質土であった。遺構内からの遺物の出土はなく、その時期は特定できないが、覆土層において中世以前のものとみられる土師器片があったことから、遺構の時期も中世以前という可能性が考えられる。しかしながら、覆土層の土師器片は1点のみであり、明確なことはいえない。



第93図 No.32調査区土層断面図



第94図 No.32調査区出土遺物

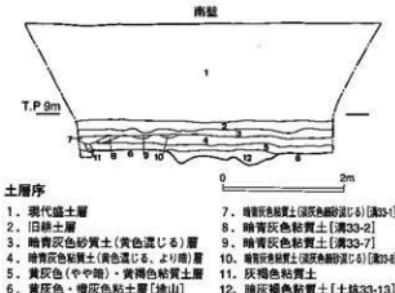


第95図 No.32調査区平面図

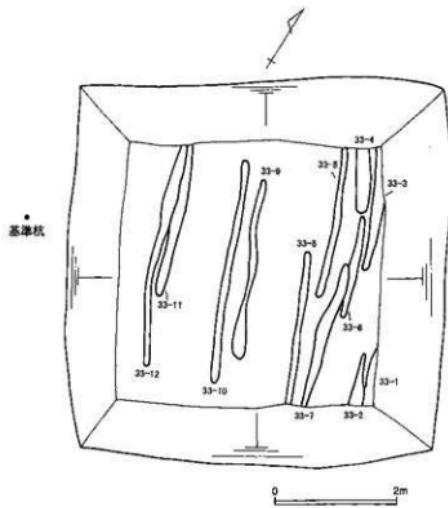
### [No.33調査区]

5.9×5.9mの調査区を設定した。約1.6m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（10～20cm厚）、暗青灰色砂質土（黄色混じる）層（5～15cm厚）、暗青灰色粘質土（黄色混じる、より暗）層（10～15cm厚）、黄灰色（やや暗）・黄褐色粘質土層（約12cm厚）、地山層である黄灰色・橙灰色粘土層の堆積が認められた。このうち、暗青灰色砂質土（黄色混じる）層では須恵器・土師器・瓦器片、暗青灰色粘質土（黄色混じる、より暗）層では須恵器・土師器・黑色土器・瓦器片の包含があり、中世を下限時期とする遺物が認められた。また、黄灰色粘質土（やや暗）層では時期不明の土師器細片が1点出土した。

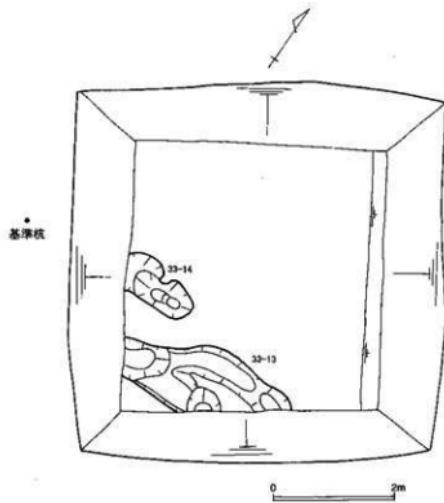
遺構については、2面の遺構面を検出した。暗青灰色砂質土（黄色混じる）層下（第1面）においては、溝を12条検出した。これらの溝は、幅10～20cm程度、深さ1～4cmを測り、概ねN25°Wの方針をもってほぼ平行してのびていた。埋土は暗青灰色粘質土であり、溝33-1と33-8には淡灰色細砂が混じっていた。これらの溝はおそらく農作業に伴って形成されたものと考えられる。その時期については、溝33-7・33-9・33-10・33-11で土師器の細片を少量検出したものの、時期を特定できるものはなかったが、その質感から中世頃のものと思われ、覆土層にも中



第96図 No.33調査区土層断面図



第97図 No.33調査区平面図(第1面)



第98図 No.33調査区平面図(第2面)

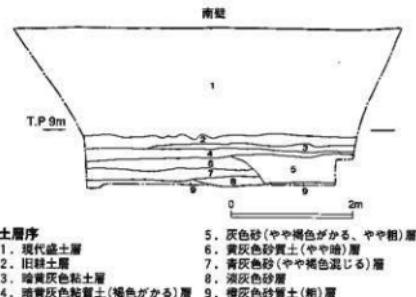
世の瓦器片を含むことを考えると、これらの溝は中世のものである可能性が考えられる。

黄灰色粘質土（やや暗）層下（第2面）においては、土坑を2基検出した。これらは暗灰褐色粘質土を埋土とし、土坑33-13はやや溝状となるが、2基の土坑ともに平面形は不定形であり、土坑内底面も凹凸が多く、状況から人為的な掘削によるものではなく、植物痕ではないかと考えられる。土坑33-13内からは土製品の破片が少量出土したが、その器種等は不明である。第2面の時期については覆土層出土遺物も土師器細片1点のみであり、明確ではないが、上位の第1面が中世のものとすると、第2面も中世以前のものという可能性が考えられる。

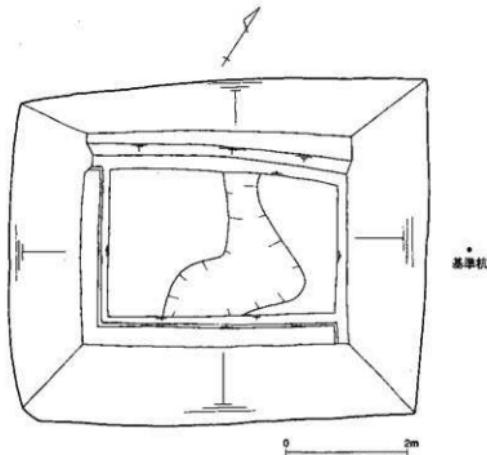
なお、ここでの出土遺物で図化できるものはなかった。

### 【No.34調査区】

6.7×5.3mの調査区を設定した。約1.75~1.85m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（7~22cm厚）、暗黄灰色粘土層（6~15cm厚）、暗黄灰色粘質土（褐色がかる）層（3~20cm厚）の堆積があり、その下位層には約30~50cmの厚さで河川堆積物とみられる灰色砂（やや褐色がかる、やや粗）層、黄灰色砂質土（やや暗）層、青灰色砂（やや褐



第99図 No.34調査区土層断面図

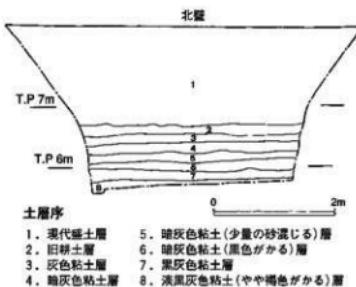


第100図 No.34調査区平面図

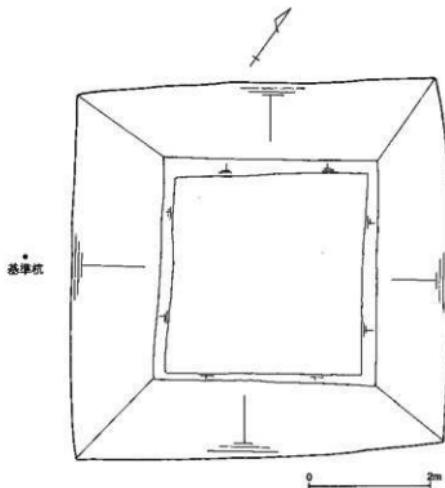
色混じる)層、淡灰色砂層等の堆積が認められた。そして、その下位層には締まった橙灰色砂質土(粗)層があり、橙灰色砂質土(粗)層上面においては上位の河川堆積物の影響を受けたとみられる窪みが認められたものの、この調査区において明確な遺構・遺物は検出されなかつた。

### [No.35調査区]

5.9×5.9mの調査区を設定した。約1.6～1.65m厚の現代盛土層以下、旧耕土層(12～20cm厚)、灰色粘土層(10～15cm厚)、暗灰色粘土層(12～20cm厚)、暗灰色粘土(少量の砂混じる)層(10～18cm厚)、暗灰色粘土(黒色がかる)層(8～20cm厚)、黒灰色粘土層(15～22cm厚)、淡黒灰色粘土(やや褐色がかる)層の堆積を確認した。このうち、灰色粘土層、暗灰色粘土層、暗灰色粘土(少量の砂混じる)層、黒灰色粘土層の



第101図 No.35調査区土層断面図



第102図 No.35調査区平面図

各土層において須恵器・土師器片を少量ずつ検出した。時期を明確にとらえ得る遺物は少なかったが、暗灰色粘土層と暗灰色粘土（少量の砂混じる）層に平安時代～中世



第103図 No.35調査区出土遺物

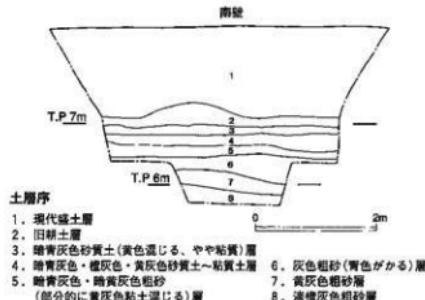
頃のものではないかとみられる土師器片があり、図化できたものでは、暗灰色粘土（少量の砂混じる）層出土の平安時代中期のものとみられる土師器皿片（81・82）があった。また黒灰色粘土層においては古代以前のものではないかと思われる須恵器片があった。

遺構については検出されなかつたが、暗灰色粘土層以下の土層は、湿地の環境の中で堆積したものではないかという様相をもっていた。ここでは、3m近くの深さまで掘削したが、地山層は確認できず、安全面を考慮して、それ以上の掘削は行わなかつた。

### [No.36調査区]

6.1×6mの調査区を設定した。約1.25～1.5m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（12～40cm厚）、暗青灰色砂質土（黄色混じる、やや粘質）層（12～18cm厚）、暗青灰色・橙灰色・黄灰色砂質土～粘質土層（12～30cm厚）、暗青灰色・暗黄灰色粗砂（部分的に黄灰色粘土混じる）層（10～25cm厚）、灰色粗砂（青色がかる）層（20～45cm厚）、黄灰色粗砂層（20～30cm厚）、淡橙灰色粗砂層の堆積を確認した。このうち、暗青灰色砂質土（黄色混じる、やや粘質）層において土師器・須恵器片を各1点検出したが、それ以外からの遺物の出土はなかつた。暗青灰色砂質土（黄色混じる、やや粘質）層より出土した須恵器片は、飛鳥～平安時代初期のものとみられる杯底部片（83）であるが、遺物量が少なく、これが暗青灰色砂質土（黄色混じる、やや粘質）層の堆積時期を示すものなのかは判断できない。

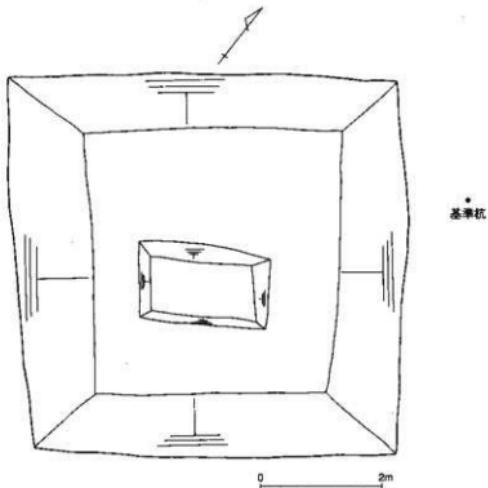
遺構については検出されなかつたが、暗青灰色・暗黄灰色粗砂（部分的に黄灰色粘土混じる）層以下においては粗砂層の堆積がみられ、流水による堆積物であると考えられる。ここでは、3m近くの深さまで掘削をしたが地山層は確認できず、安全面を考慮して、それ以上の掘削は行わなかつた。



第104図 No.36調査区土層断面図



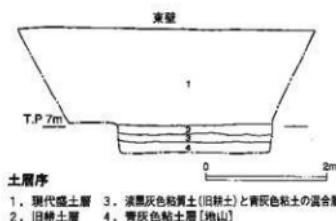
第105図 No.36調査区出土遺物



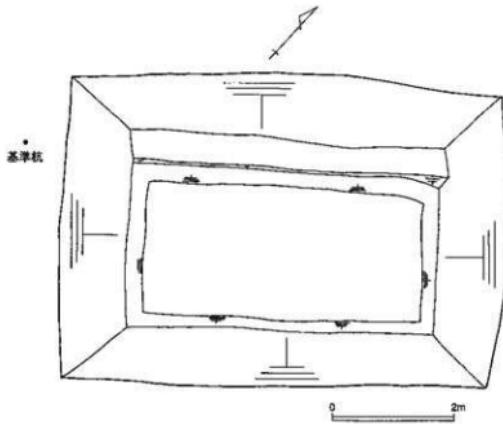
第106図 No.36調査区平面図

### [No.37調査区]

7×4.8mの調査区を設定した。約1.55～1.6m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（15～20cm厚）、整地層である旧耕土と地山の混合層（10～15cm厚）、地山層である青灰色粘土層の堆積を確認したが、明確な造構・遺物については検出されなかった。



第107図 No.37調査区土層断面図

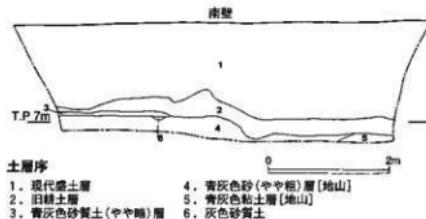


第108図 No.37調査区平面図

### 【No.38調査区】

$7.1 \times 4.3\text{m}$ の調査区を設定した。約 $1.1\sim 1.6\text{m}$ 厚の現代盛土層以下、旧耕土層（ $5\sim 40\text{cm}$ 厚）、調査区東半で青灰色砂質土（やや暗）層（ $5\sim 8\text{cm}$ 厚）の堆積があったが、西半では旧耕土層直下に地山層である青灰色砂（やや粗）・青灰色粘土層の堆積を確認した。

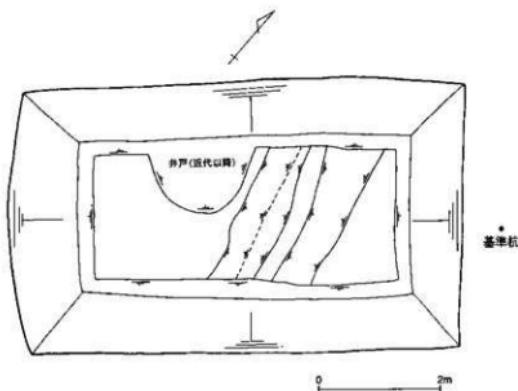
調査区内においては、地山層上面の  
レベルでみると、約 $35\text{cm}$ の高低差をもって調査区西半が東半より低く  
なり、ちょうど調査区の中ほどで南北方向に旧耕土層が土手状に高ま  
り、それを境にして西側が落ち込んでいた。このことから、この高低  
差は耕作地の造成により形成されたものであり、土手状の高まりは旧耕地区画の境目であろうと考えられる。そして、旧耕土層を掘削した段階で、その高まりに沿う形で溝が認められた。また、調査区北側において井戸と考えられる土坑があった。これらの溝、土坑からは土師器や須恵器片（84）を含みつつ、近代以降のものとみられる瓦や陶磁器片が出土し、その埋土は旧耕土層とほぼ同質のものであったことから、これらは旧耕土層に関連するものであると考えられる。そして、ここでは、それより以前の明確な遺構については検出されなかった。



第109図 No.38調査区土層断面図



第110図 No.38調査区出土遺物



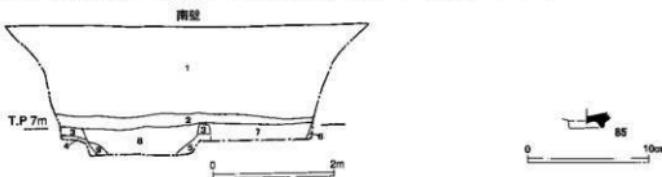
第111図 No.38調査区平面図

### 【No.39調査区】

5.9×5.3mの調査区を設定した。約145～155m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（8～20cm厚）、部分的に暗青灰色粘質土層（約15cm厚）、地山層である青灰色粘質土（ややシルト質～砂質）・砂層の堆積を確認した。

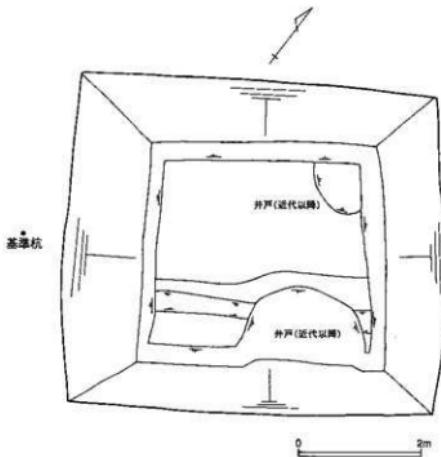
調査区内では、旧耕土層を掘削した段階で、地山層上面のレベルでみると、約20cmの高低差をもって調査区北半が南半より低くなり、耕地造成によって形成されたと思われる段差が認められた。また、旧耕土層下において溝と井戸とみられる土坑が2基確認できたが、その埋土は旧耕土とは同質のものであり、土坑には近代以降の瓦を含んでおり、これらは旧耕土層に関連するものであると考えられる。そして、ここでは、それより以前の明確な遺構については検出されなかった。

なお、近代以降の土坑内から青磁小挽片（85）が1点検出された。



第112図 No.39調査区土層断面図

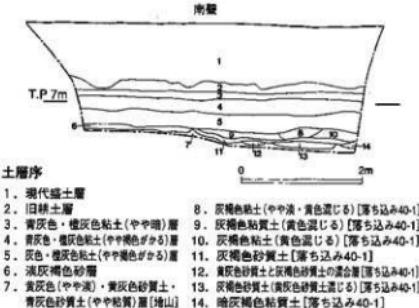
- | 土層序 |                            |
|-----|----------------------------|
| 1.  | 現代盛土層                      |
| 2.  | 旧耕土層                       |
| 3.  | 暗青灰色粘質土層                   |
| 4.  | 青灰色粘質土層(ヤシルト質)層[地山]        |
| 5.  | 青灰色砂質[地山]                  |
| 6.  | 黒灰色粘土・青灰色粘土・灰色砂の混合層[底層土]   |
| 7.  | 淡灰灰色砂質土層[近代以降地山]           |
| 8.  | 淡灰灰色砂質土と青灰色粘質土の混合層[近代以降地山] |
| 9.  | 青灰色粘質土(ヤシルト質)層[地山]         |



第114図 No.39調査区平面図

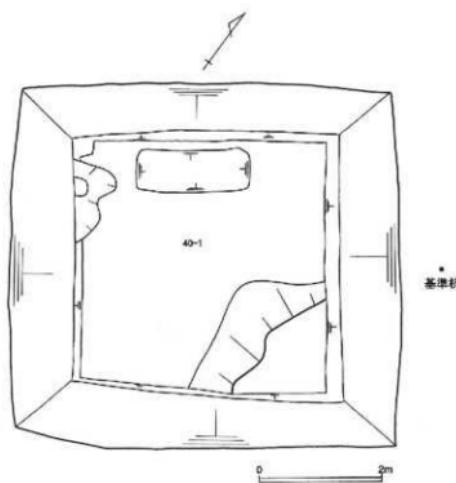
### 【No.40調査区】

6.1×5.6mの調査区を設定した。約0.9~1.05m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（3~20cm厚）、青灰色・橙灰色粘土（やや暗）層（8~15cm厚）、青灰色・橙灰色粘土（やや褐色がかる）層（17~30cm厚）、灰色・橙灰色粘土（やや褐色がかる）層（20~35cm厚）、淡灰褐色砂層（3~8cm厚）、地山層である黄灰色（やや淡）・黄灰色砂質土・青灰色砂質土（やや粘質）層の堆積を確認した。そして、青灰色・橙灰色粘土（やや暗）層以下の各土層内においては遺物の包含が認められた。

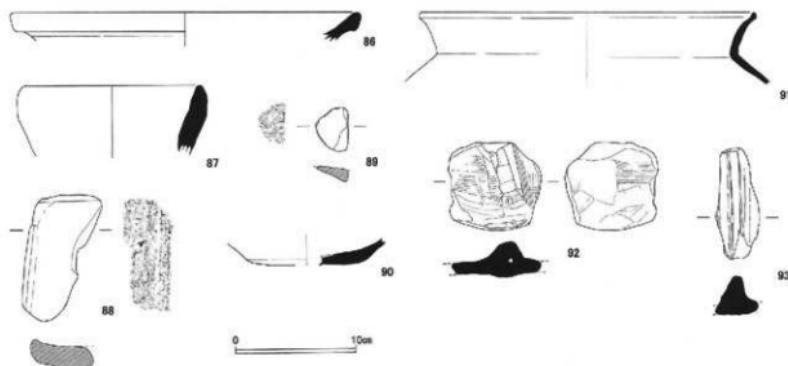


第115図 No.40調査区土層断面図

青灰色・橙灰色粘土（やや暗）層では須恵器・土師器・瓦器片の他、白磁と思われる細片を少量検出し、図化できたものに須恵器鉢（86）があった。青灰色・橙灰色粘土（やや褐色がかる）層でも須恵器・土師器・瓦器・白磁・瓦片を検出し、これら2土層内からは中世を下限時期とする遺物が認められた。灰色・橙灰色粘土（やや褐色がかる）層では、相対的に須恵器片を多く含みつつ土師器片・繩目もしくは布目をもつ平瓦片（88・89）の出土があり、図化できなかったものの揖津C型羽釜片など概ね平安時代を下限とする遺物の包含が認められた。また、



第116図 No40調査区平面図



86：青灰色・褐色粘土(やや暗)層(須恵器鉢)  
87～89：灰色・橙灰色粘土(やや褐色がかる)層(87土師器鉢, 88・89平瓦)  
90～93：落ち込み40-1(90須恵器杯身, 91土師器蓋、92・93土製品)

第117図 No40調査区出土遺物

ここでは堀の可能性が考えられる厚手の鉢片（87）が含まれていた。そして、淡灰褐色砂層では時期は明確でないが、土師器の細片を少量包含していた。

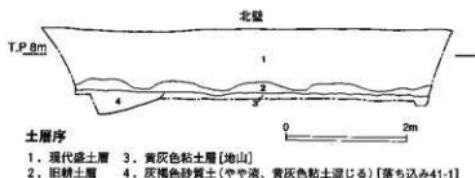
遺構については、灰色・橙灰色粘土（やや褐色がかる）層下において落ち込みを1か所検出した。落ち込み40-1は、調査区南東隅から北西側へ15~50cm程度の深さで落ち込み、検出部分で北西隅付近がもっとも深かった。埋土は灰褐色系の粘土・砂質土を主体とし、北西部下層付近では黒灰色砂質土が堆積していた。落ち込み40-1は検出状況から自然地形であると思われるが、落ち込み内からは弥生土器・須恵器・土師器・竈の可能性が考えられる土製品片（92・93）等が出土している。出土遺物の下限時期としては、明確に判断はできないが、古墳時代後期の須恵器杯身片（90）がみられることから、落ち込み40-1の埋没時期もこの頃ではないかと考えられる。

### 【No.41調査区】

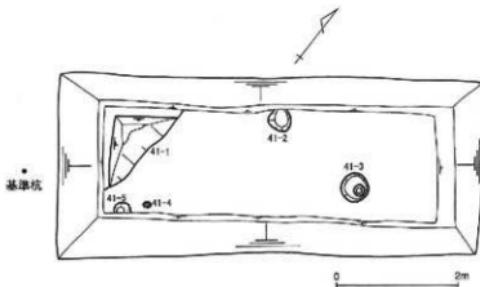
6.9×2.9mの調査区を設定した。約0.8~1m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（5~20cm厚）、地山層である黄灰色粘土層の堆積を確認した。そして、旧耕土層直下の地山層上面においてピット、落ち込みを検出した。

ピットは4基検出した。ピット41-3では柱痕を確認し、掘り方径45~50cm、柱痕径約20cm、深さ約25cmを測った。この他、ピット41-2は径約40cm、深さ約8cm、ピット41-4は径約15cm、深さ約18cm、ピット41-5は検出部分で径約28cm、深さ約9cmを測った。これらピットの埋土は灰褐色砂質土（黄灰色粘土混じる）であった。落ち込みは1か所検出した。落ち込み41-1は検出部分で深さ約40cmを測り、落ち込み肩は概ねN 5° E の方位を示していた。その埋土は灰褐色砂質土（やや淡、黄灰色粘土混じる）であった。

これらの遺構からは、土師器を主体に須恵器・黒色土器片等の遺物が出土した。これらは細片が多く、明確な時期を特定し得る遺物はなかったが、落ち込み41-1で黒色土器B類楕片が出



第118図 No.41調査区土層断面図



第119図 No.41調査区平面図

土したことから、遺構の時期としては概ね平安時代中期のものではないかと考えられる。また、図化できた遺物には落ち込み41-1出土の須恵器蓋片（94）と布目痕をもつ平瓦片（95）があった。

なお、遺構は旧耕土層直下で認められたが、これは旧耕土層の整地段階で地山層にまで達する形で造成された結果であると考えられる。このことから、この遺構面は、本来あった地盤面よりは削平されているものと考えられる。

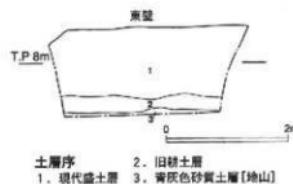
### [No.42調査区]

7×3.3mの調査区を設定した。約1.1～1.2m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（6～18cm厚）、整地層である旧耕土と地山の混合層（8～18cm厚）、地山層である青灰色砂質土層の堆積を確認した。土層内からの遺物の出土はなかったが、地山層上面においてピットを1基検出した。

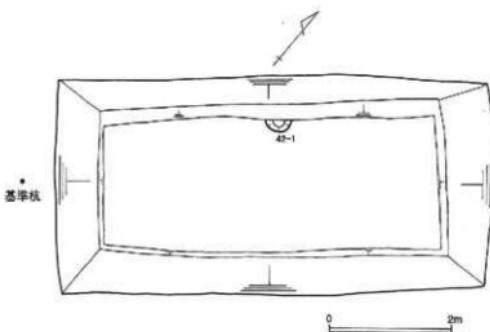
ピット42-1は、検出部分で径約40cm、深さ約5cmを測り、その埋土は暗黄灰色粘土であった。ピット内からの遺物の出土はなく、また遺物包含層も認められなかったことから、その時期は不明である。ただし、その埋土が旧耕土層とは異質であったことから、旧耕土層形成段階に伴うものではないと考えられる。



第120図 No.41調査区出土遺物



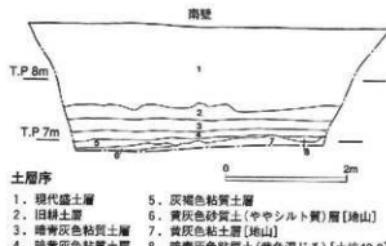
第121図 No.42調査区土層断面図



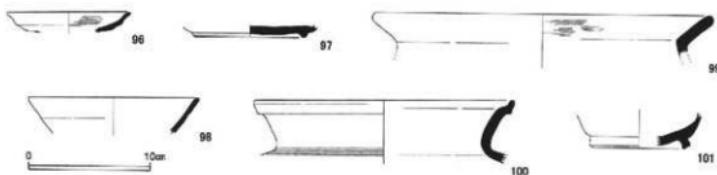
第122図 No.42調査区平面図

### 【No.43調査区】

6.1×5.7mの調査区を設定した。約1.25～1.4m厚の現代盛土層以下、旧耕土層(15～28cm厚)、暗青灰色粘質土層(15～20cm厚)、暗黄灰色粘質土層(10～18cm厚)、灰褐色粘質土層(5～15cm厚)、地山層である黄灰色砂質土(ややシルト質)・粘土層の堆積を確認した。このうち、暗青灰色粘質土層と暗黄灰色粘質土層では、須恵器・土師器・瓦器片等の包含を確認し、図化できたものを第124図に示した。

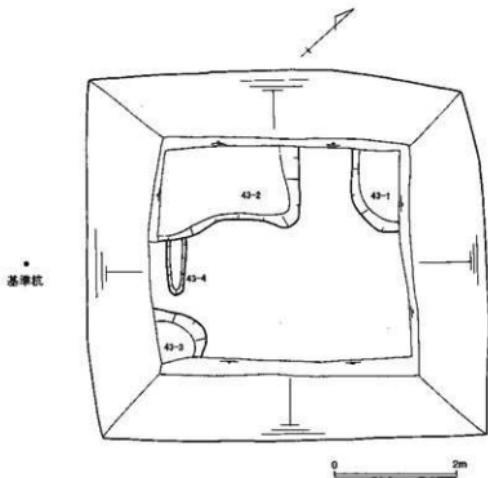


第123図 No.43調査区土層断面図

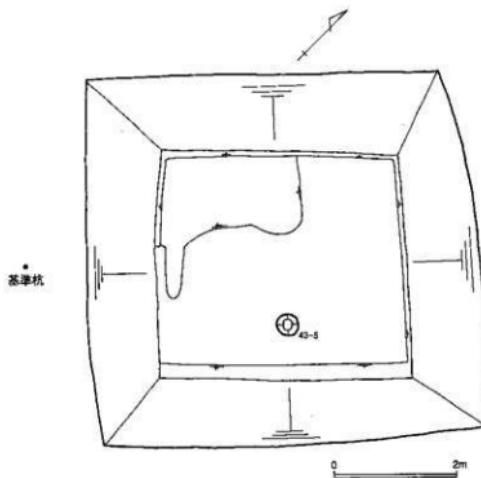


96：暗青灰色粘質土層(瓦器皿)、97～99：暗黄灰色粘質土層(97須恵器杯、98瓦器楕、99土師器鉢)  
100・101：做溝(100須恵器甌、101須恵器壺)

第124図 No.43調査区出土遺物



第125図 No.43調査区平面図(第1面)



第126図 No.43調査区平面図(第2面)

遺構については、2面の遺構面を検出した。暗黄灰色粘質土層下（第1面）においては、土坑3基、溝1条を検出した。土坑43-1は、検出部分で最大長約1.3m、深さ約4cm、土坑43-2は、検出部分で最大長約2.4m、深さ3~10cm、土坑43-3は、検出部分で最大長80cm、深さ約5cmを測った。これら土坑は浅いものであったが、その埋土は、土坑43-1で暗黄灰色粘質土、土坑43-2で暗青灰色砂質土（黄色混じる）、土坑43-3で暗青灰色粘質土（黄色混じる）であった。溝43-4については、土坑43-2に重複される形で認められた。その幅約30cm、深さ約5cmを測り、N 47° Wの方位をもってたびていた。埋土は暗青灰色粘質土（黄色混じる）であった。第1面に伴つての遺物は、土坑43-2で土師器細片2点、土坑43-3で土師器・須恵器細片各1点、溝43-4で土師器細片1点が出土したのみで、時期を特定し得る遺物の出土はなかったが、第1面の覆土層となる暗黄灰色粘質土層では古墳時代後期から古代の須恵器片（97）を含みつつ、下限時期の遺物として中世の瓦器楕片（98）や土師器鍋片（99）が認められた。このことから、第1面の時期としては中世以前のものである可能性が考えられる。

灰褐色粘質土層下（第2面）においては、ピット1基を検出した。ピット43-5は、径約35cm、深さ約23cmを測り、埋土は灰褐色粘土（少量黄灰色粘土混じる）であった。ピット内および覆土層から遺物の出土はなく、その時期は定かでないが、上位の第1面が中世以前の可能性をもつことから、第2面についても中世以前のものであるという可能性が考えられる。

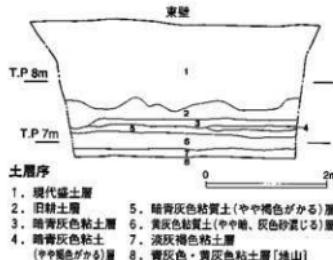
なお、層位は不明であるが、側溝中より図化できた遺物として須恵器壺片（100）・壺片（101）があった。

## [No.44調査区]

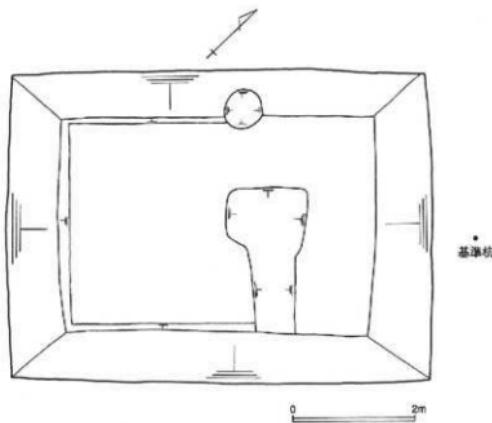
6.7×4.9mの調査区を設定した。約1.3~1.45m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（15~35cm厚）、暗青灰色粘土層（10~15cm厚）、暗青灰色粘土～粘質土（やや褐色がかる）層（6~20cm厚）、黄灰色粘質土（やや暗、灰色砂混じる）層（20~30cm厚）、淡灰褐色粘土層（10~15cm厚）、地山層である青灰色・黄灰色粘土層の堆積を確認した。

このうち、暗青灰色粘土層と暗青灰色粘質土（やや褐色がかる）層で遺物の包含があり、暗青灰色粘土層では中世のものを下限時期として須恵器・土師器・瓦器・白磁・瓦片等があり、図化できたものでは、須恵器の大型壺もしくは陶棺と思われる破片（102）、縄目タタキが残る平瓦片（103）、白磁片（104）があった。また、暗青灰色粘質土（やや褐色がかる）層では須恵器・土師器片が少量検出され、図化できたものでは、須恵器の杯身片（105）と鉢片（106）があった。

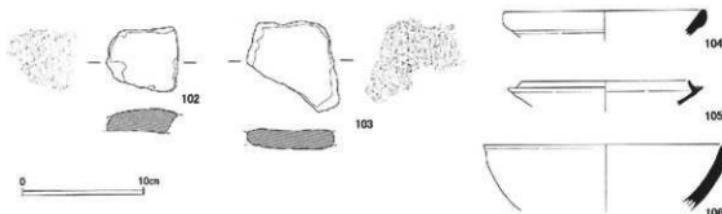
なお、この調査区では遺構については検出されなかった。



第127図 No.44調査区土層断面図



第128図 No.44調査区平面図



102~104: 淡青灰色粘土層(102須恵器腹または脚部?, 103平瓦, 104白磁碗)

105・106: 淡青灰色粘土層(やや褐色がかる)層(105須恵器杯身, 106須恵器鉢)

第129図 No.44調査区出土遺物

### 【No.45調査区】

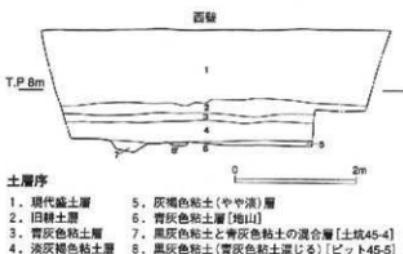
6 × 5.7mの調査区を設定した。約1.2m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（15~30cm厚）、青灰色粘土層（10~16cm厚）、淡灰褐色粘土層（約35cm厚）、灰褐色粘土（やや淡）層（約8cm厚）、地山層である青灰色粘土層の堆積を確認した。このうち、旧耕土層下の青灰色粘土層で中世のものとみられる須恵器・土師器片が、淡灰褐色粘土層においては須恵器・土師器・平瓦片の包含がそれぞれ少量ずつ認められた。

遺構については、地山層上面において土坑4基、ピット1基を検出した。土坑45-1は長径約1.25m、短径約75~90cm、深さ約15cm、土坑45-2は長径約1.6m、短径約1.1~1.4m、深さ約12cm、

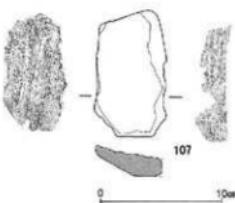
土坑45-3は長径約75cm、短径約60cm、深さ約15cm、土坑45-4は長径1.5m以上、短径約95cm、深さ約19cmを測った。埋土については、土坑45-1・45-2・45-4で黒灰色粘土と青灰色粘土がブロック状に混合したものであり、土坑45-3で黒灰色粘土に少量の青灰色粘土が混じるものであった。土坑45-1・45-2・45-4については、埋土がブロック状に粘土が入り混じることから、土坑が一気に埋められた状況がうかがえる。

ピット45-5は、検出部分で径35cm以上、深さ約3cmを測り、埋土は黒灰色粘土に青灰色粘土が混じるものであった。

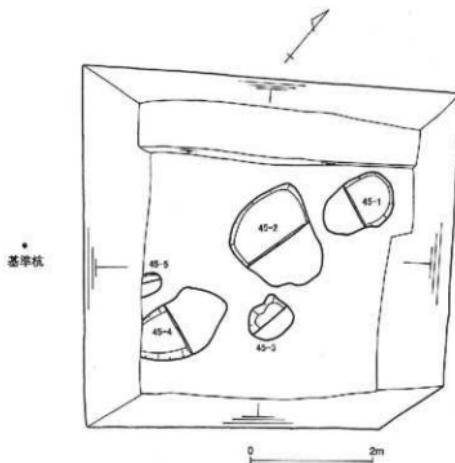
遺構内において遺物は検出されなかったが、覆土層の淡灰褐色粘土層において遺物量は少なかったものの、凸面繩目、凹面布目が残る平瓦片（107）が検出されたことから、遺構の時期としては、古代以前のものという可能性が考えられる。



第130図 No.45調査区土層断面図



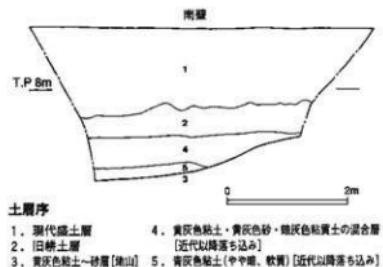
第131図 No.45調査区出土遺物



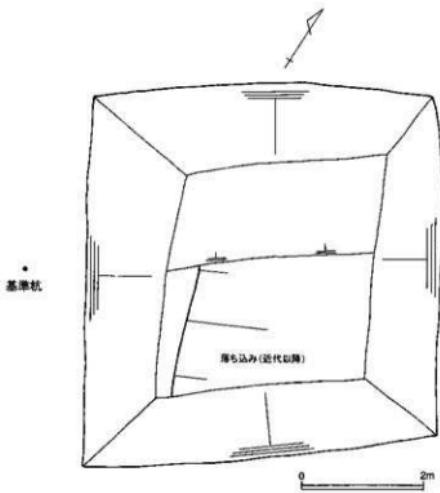
第132図 No.45調査区平面図

## 【No.46調査区】

5.7×5.7mの調査区を設定した。約1.25～1.5m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（35～55cm厚）、地山層である黄灰色粘土～砂層の堆積を確認した。調査区の北半分は擾乱を大きく受けているが、調査区南側において東方向へ地山層を約70cmの深さで切り込む形で旧耕土層や地山層の土が混合して堆積するのが認められた。その堆積土中にはレンガが含まれていた。このことから、これは近代以降の池跡などではないかと考えられる。



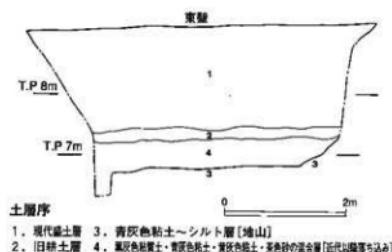
第133図 No.46調査区土層断面図



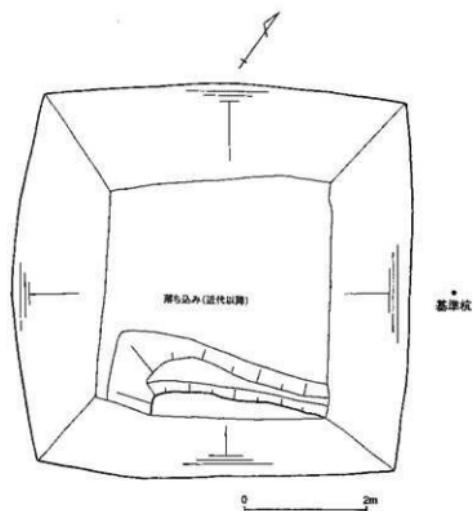
第134図 No.46調査区平面図

## 【No.47調査区】

6×5.9mの調査区を設定した。約1.8m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（15~25cm厚）、地山層である青灰色粘土～シルト層の堆積を確認した。そして、調査区の北側へ向かって地山層を切り込む形で旧耕土層や地山層の土が混合する土砂の堆積が約50cmの厚さ（部分的に90cm厚）で認められ、落ち込み内には針金が含まれていた。このことから、この落ち込みは近代以降の耕地造成のための整地層であると考えられる。



第135図 No.47調査区土層断面図

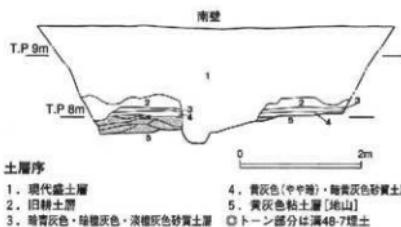


第136図 No.47調査区平面図

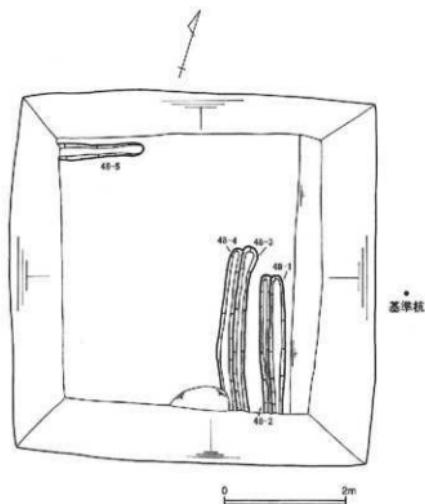
## 【No.48調査区】

5.8×5.7mの調査区を設定した。約1.15~1.2m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（15~20cm厚）、暗青灰色・暗橙灰色・淡橙灰色砂質土層（約8cm厚）、黄灰色（やや暗）・暗黄灰色砂質土層（3~8cm厚）、地山層である黄灰色粘土層の堆積を確認したが、調査区東端では約40cmの深さで旧耕土層が落ち込んでいた。このうち、暗青灰色・暗橙灰色・淡橙灰色砂質土層では少量の須恵器片を包含し、時期のわかるものとして飛鳥時代の鉢片（111）があったが、下位層の黄灰色（やや暗）・暗黄灰色砂質土層では平安時代初期頃の可能性をもつものを含みつつ古代の土師器・須恵器片（112~115）が検出されたことから、暗青灰色・暗橙灰色・淡橙灰色砂質土層はそれよりも時代が下って形成された土層であると考えられる。

遺構については、2面の遺構面を検出した。暗青灰色・暗橙灰色・淡橙灰色砂質土層下（第1面）においては、溝を5条検出した。溝は、南北方向（概ねN20°W）に平行してのびる4条と、それにはほぼ直交する方位で東西方向にのびる1条があり、おそらく農作業に伴って形成されたものと考えられる。南北方向の溝については、溝48-1と溝48-2が、そして溝48-3と溝48-4



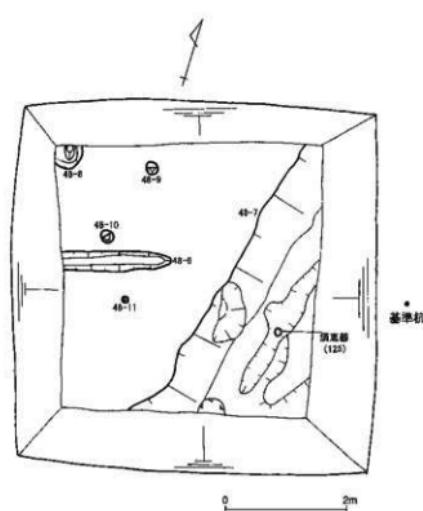
第137図 No.48調査区土層断面図



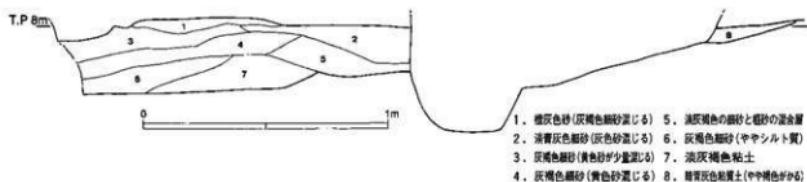
第138図 No.48調査区平面図(第1面)

が重複するのではなく、それぞれが接してのびる状況をもって検出された。これらの溝は、幅15~25cm程度を測り、深さは溝48-5で約4cm、他は1~2cm程度であり、その埋土は淡橙灰色砂質土であった。溝48-3・48-4・48-5からは須恵器または土師器の細片が少量出土した。これらは細片で時期は明確でないが、質感から中世以前のものとみられ、これら溝については中世以前のものである可能性が考えられる。

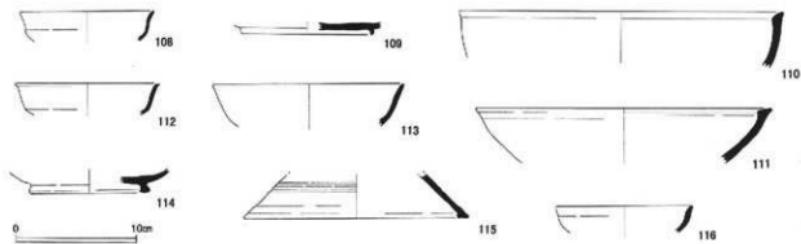
黄灰色（やや暗）・暗黄灰色砂質土層下（第2面）においては、ピット、溝を検出した。ピットは4基検出し、ピット48-8は部分的な検出で、径45cm以上、深さ約37cmを測り、埋土は灰褐色砂質土（黄灰色粘土混じる）であった。ピット48-9とピット48-10はともに径約23cmを測り、深さはピット48-9で約5cm、ピット48-10で約9cmを測った。埋土については、ピット48-9が灰



第139図 No48調査区平面図(第2面)

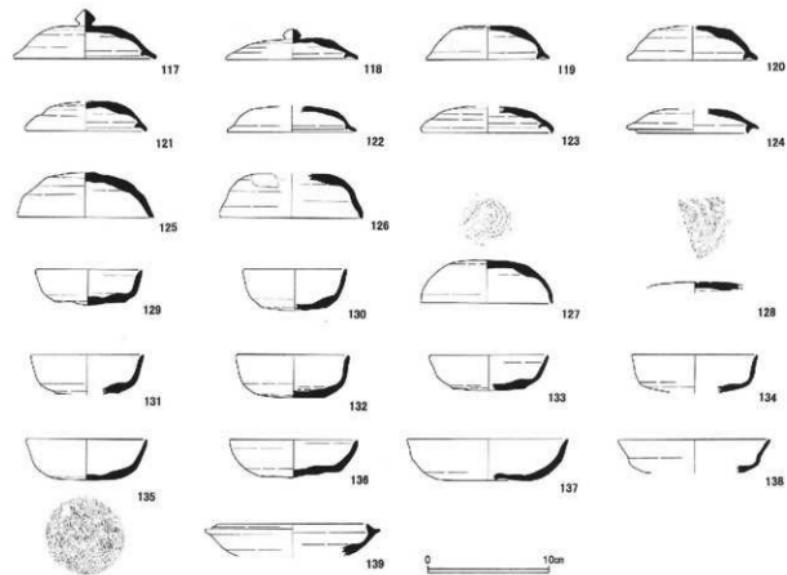


第140図 溝48-7埋土(南壁)



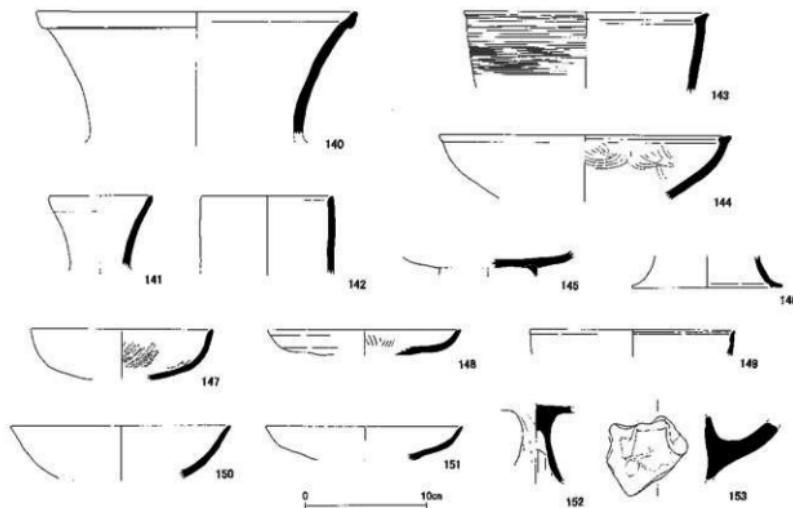
108: 深乱土中(須恵器杯)、109・110: 盆土層除去中(109須恵器杯、110須恵器鉢)  
 111: 暗青灰色・緑褐色・深褐色砂質土層(須恵器鉢)  
 112~115: 黄褐色(やや跡)・暗青色砂質土層(112・113須恵器杯、114須恵器杯?、115須恵器脚部)  
 116: ピット48-8(須恵器杯身または蓋)

第141図 No.48調査区出土遺物①



117~139: 測48-7  
 (117~127須恵器杯蓋、129~137・139須恵器杯身、138須恵器杯、128須恵器杯蓋または身)

第142図 No.48調査区出土遺物②



140~153：溝48-7

(140須恵器蓋、141須恵器長頸甌、142須恵器鉢または甌、143・144須恵器鉢、145須恵器底部、146須恵器脚部、  
147・150土師器杯、148土師器皿、149土師器皿または甌、151土師器皿または高杯、152土師器高杯、153土師器把手)

第143図 No.48調査区出土遺物③

褐色粘質土（黄灰色粘土混じる）、ピット48-10が黄灰色粘土（灰褐色・淡褐色砂質土混じる）であった。ピット48-11は径約10cm、深さ約13cmを測り、埋土は灰褐色粘土であった。溝については2条検出した。溝48-6は幅28~33cm、深さ約3cmを測り、概ねN72°Eの方位をもってのび、黄灰色砂質土（やや暗）が埋土であった。溝48-7は幅2.3m以上、深さ20~30cmを測り、概ねN15°Eの方位をもってのびていた。溝48-7の埋土は灰褐色系の砂、細砂、砂質土等を主体とするもので、おそらく自然流路跡ではないかと考えられる。

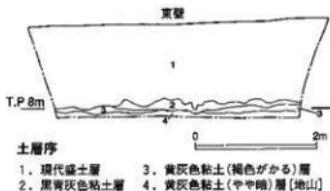
第2面の時期については、溝48-7において飛鳥時代の須恵器・土師器が多く出土した。特に須恵器蓋と杯身（117~139）が多く検出された。他の造構では、ピット48-8で須恵器・土師器の細片を各1点検出したのみで、やや不明確なところもあるが、ピット48-8出土須恵器片（116）も溝48-7出土遺物とほぼ同時期の須恵器杯片であるとみられる。このことから、第2面は概ね飛鳥時代のものであろうと考えられる。ただし、溝48-6については、他の第2面検出造構が灰褐色系の土を埋土とするのに対して、溝48-6の埋土は黄灰色砂質土（やや暗）で覆土層とほぼ同質であり、その方位は第1面検出の溝と概ね同じであるという状況から、その時期は

飛鳥時代よりも下る可能性がある。

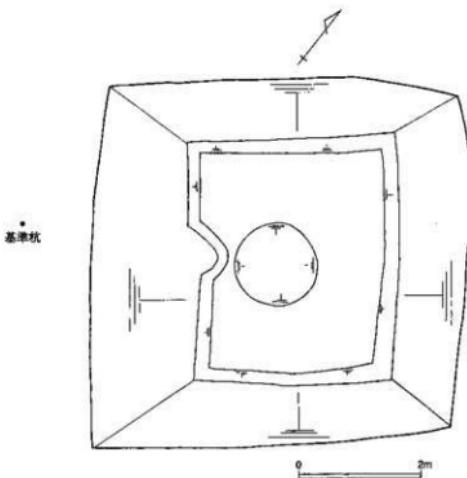
なお、溝48-7出土の須恵器鉢（144）は、その形状が上位層で検出した110と111の鉢とよく似ていた。ここでは図化するにあたり、各鉢片ごとに口径や傾きを復原して図化を行ったが、上位層出土の鉢についてはかなり摩滅した状況だったので、本来これら3点の鉢片は同一個体のものであったという可能性もある。

### 【No49調査区】

5.8×5.7mの調査区を設定した。約1.2~1.4m厚の現代盛土層以下、黒青灰色粘土層（5~20cm厚）、黄灰色粘土（褐色がかる）層（5~10cm厚）、地山層である黄灰色粘土（やや暗）層の堆積を確認した。ここでは、現代盛土層下に旧耕土層は認められず、全体的に地山層近くまで攪乱を受けていた状況であり、遺構・遺物は検出されなかった。



第144図 No49調査区土層断面図



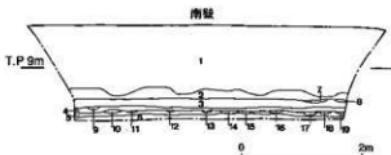
第145図 No49調査区平面図

## 【No.50調査区】

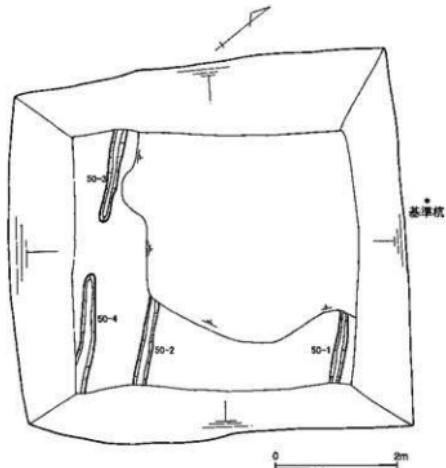
6.1×5.8mの調査区を設定した。約1.05～1.2m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（5～20cm厚）、暗青灰色砂質土層（約15cm厚）、暗青灰色砂質土（黄色混じる）層（約10cm厚）、黄褐色粘土層（5～8cm厚）、地山層である暗黄色粘土（褐色がかる）層の堆積を確認した。このうち、暗青灰色砂質土層と黄褐色粘土層において少量の遺物を検出し、暗青灰色砂質土層で埋滅した瓦片と陶器もしくは須恵器と思われる破片を各1点検出し、黄

褐色粘土層で土師器片2点と竈の可能性がある土製品の破片（154）1点を検出したが、その時期は定かでない。

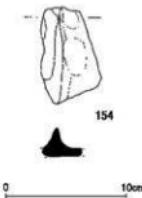
遺構については、3面の遺構面を検出したが、第1面では調査区の西側と東側で掘削の深さをそろえることができなかったため、遺構のベース面が異なる形となり、西側の溝50-2・50-3・50-4は旧耕土層下の暗青灰色砂質土層上面において検出し、東側の溝50-1は暗青灰色砂質土層下の暗青灰色砂質土（黄色混じる）層上面において検出することとなった。これら4条の溝は、



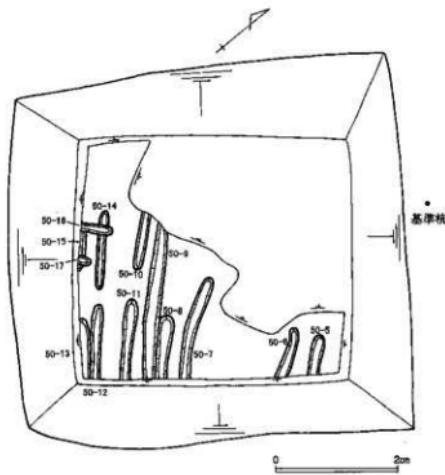
第146図 No.50調査区土層断面図



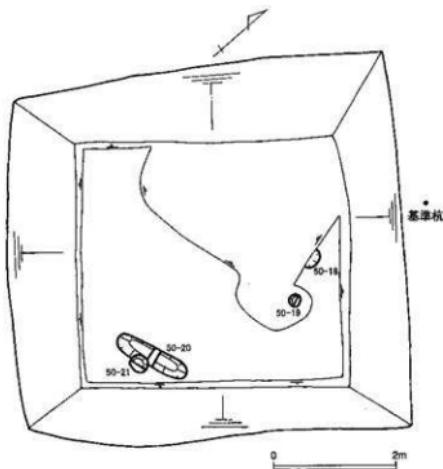
第148図 No.50調査区平面図(第1面)



第147図 No.50調査区出土遺物



第149図 No50調査区平面図(第2面)



第150図 No50調査区平面図(第3面)

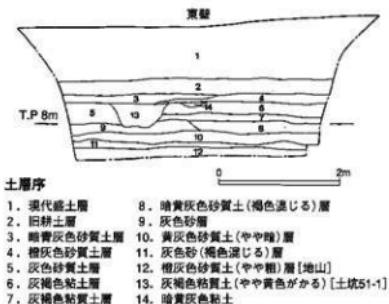
幅10~25cm程度、深さ4~5cmを測り、概ねN45°Wの方位をもってのびていた。その埋土は、溝50-1が暗青灰色粘質土、溝50-2・50-3・50-4が暗青灰色砂質土（黒色混じる）であった。第1面に伴っての遺物は、溝50-3において土師器・瓦器片が各1点出土したのみであるが、溝50-2・50-3・50-4は旧耕土層下において検出されたものであり、その埋土も旧耕土層に伴うと思われるものであったことから、時期は近代以降のものと思われる。また、溝50-1については、遺構内及び覆土層からも遺物が出土しなかったことからその時期は不明である。

暗青灰色砂質土（黄色混じる）層下（第2面）においては、溝を13条検出した。溝の幅は10~30cm、深さ2~3cm程度を測り、概ねN40~45°Wの方位をもってほぼ平行して（もしくは直交して）のびていた。それらの埋土は灰色砂質土（やや粘質）であった。遺物については、溝50-9において中世以前のものとみられる土師器片が2点出土したのみであり、覆土層においても時期を特定し得る遺物はみられなかった。このことから、第2面の時期は明確ではないが、溝50-9出土遺物から中世以前のものである可能性が考えられる。

黄褐色粘土層下（第3面）においては、ピット3基と溝1条を検出した。ピットの径は20~30cm程度を測り、その深さは、ピット50-18で約20cm、ピット50-19で約10cm、ピット50-21で約17cmを測った。また、溝50-20は、長さ約1.3m、幅約30cm、深さ13~22cmを測った。これら遺構の埋土は灰褐色粘土となるが、溝50-20とピット50-21については、その輪郭や掘り方がややぼやけていたことから人為的な掘削によるものではなく、植物痕であろうとみられる。第3面に伴う遺物としては、遺構内からの出土はなかったが、覆土層から土師器片を2点検出しており、上位の第2面のことを考慮すると、これも中世以前のものである可能性が考えられる。

## 【No.51調査区】

5.8×5.8mの調査区を設定した。0.9~1.1m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（20~30cm厚）、暗青灰色砂質土・橙灰色砂質土層（12~18cm厚）、灰色砂質土・灰褐色粘土～粘質土層（30~35cm厚）、暗黃灰色砂質土（褐色混じる）・灰色砂層（15~20cm厚）、黃灰色砂質土（やや暗）層（10~18cm厚）、灰色砂（褐色混じる）層（5~15cm厚）、地山層である橙灰色砂質土（やや粗）層の堆積を確認した。このうち、暗青灰色砂質土・橙灰色砂質土層において須恵器・土師器・白磁片等の包含を少量確認したが、それより下層において遺物の出土はなかった。



第151図 No.51調査区土層断面図

遺構については、3面の遺構面を検出した。第1面では土坑51-1を1基確認したが、本来こ

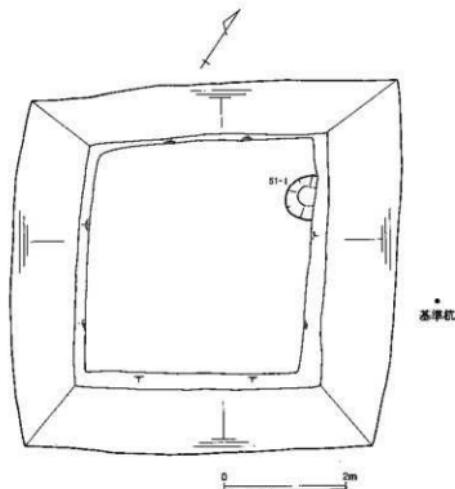
これは暗青灰色砂質土・橙灰色砂質土層下において検出すべきところ、それより下位層の灰色砂質土・灰褐色粘土～粘質土層の掘削途中に確認することとなった。このため、平面的に確認した土坑51-1の形状は本来のものではなく、壁面観察では径約95cm、深さ約40cmを測り、その埋土は灰褐色粘質土（やや黄色がかる）であった。遺構内からの出土遺物はなかったが、先述のようにその覆土層において少量の遺物を検出した。しかし、その遺物量は少なくその時期については特定し得ないが、出土した遺物に限ってみれば概ね中世を下限とするものであり、このことを考えると、土坑51-1は中世のものである可能性が考えられる。

暗黄灰色砂質土（褐色混じる）・灰色砂層下（第2面）においては、溝1条を検出した。溝51-2は幅0.7～1.5m、深さ6～10cm、N25°Wの方位をもってのび、暗黄灰色砂（褐色がかる）を埋土として確認した。おそらくは自然流路跡であろうと考えられる。

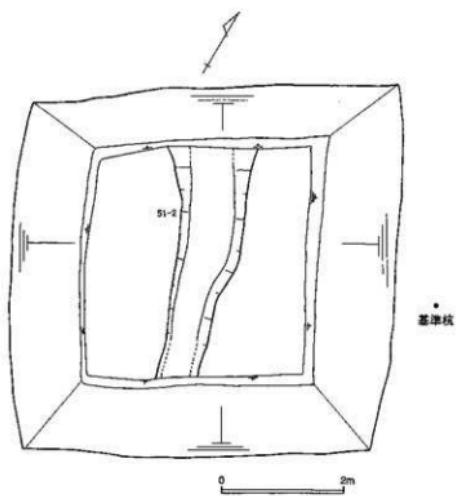
灰色砂（褐色混じる）層下（第3面）においては、落ち込み跡を1か所検出した。落ち込み51-3は、舌状の落ち込み肩をもって南側へ10cm程度の深さで落ち込んでいた。落ち込み内の埋土は、灰色砂（褐色がかる）・灰褐色砂（やや粗）・淡灰色砂からなり、落ち込み51-3は自然流路の一部である可能性が考えられる。

第2面・第3面に伴っての遺物の出土ではなく、遺構の時期は不明であるが、第1面が中世のものという可能性があることを考慮すると、第2面・第3面も中世以前のものという可能性が考えられる。

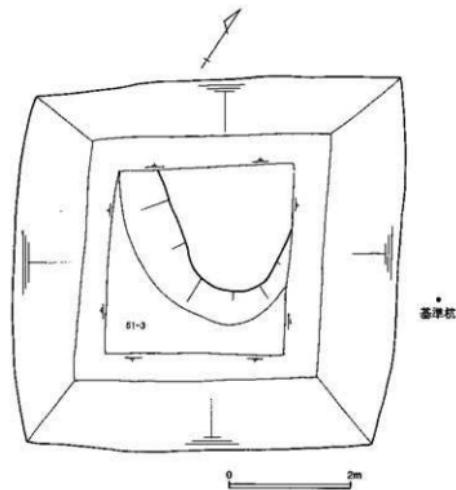
なお、ここでの出土遺物で図化できるものはなかった。



第152図 No.51調査区平面図（第1面）



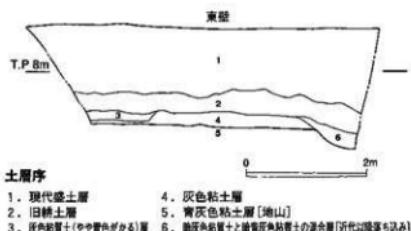
第153図 No51調査区平面図(第2面)



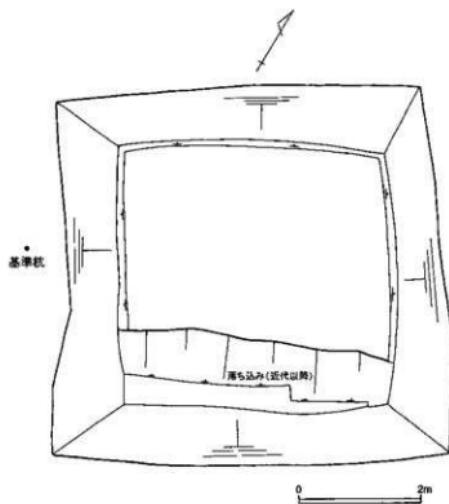
第154図 No51調査区平面図(第3面)

## 【No.52調査区】

6.2×5.9mの調査区を設定した。約1～1.4m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（30～40cm厚）、灰色粘質土（やや青色がかる）～灰色粘土層（約25cm厚）、地山層である青灰色粘土層の堆積を確認した。そして、旧耕土層下において調査区の南側で深さ約50cmの落ち込みを確認した。しかし、その埋土は旧耕土とほぼ同質のものであり、近代以降の新しい陶磁器片などを含んでいたことから、これは、近代以降の耕作に伴う落ち込みであると考えられる。



第155図 No.52調査区土層断面図



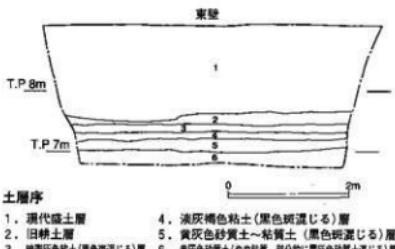
第156図 No.52調査区平面図

## 【No.53調査区】

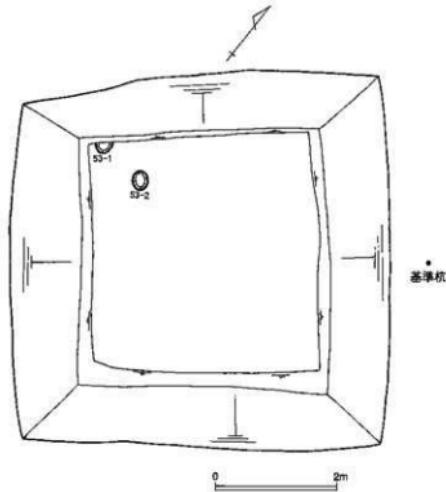
5.9×5.7mの調査区を設定した。約1.4～1.6m厚の現代盛土層以下、旧耕土層(5～23cm厚)、暗青灰色粘土(黒色斑混じる)層(約15cm厚)、淡灰褐色粘土(黒色斑混じる)層(10～15cm厚)、黄灰色砂質土～粘質土(黒色斑混じる)層(13～23cm厚)、地山層と考えられる黄灰色砂質土(やや粘質、部分的に黒灰色砂質土混じる)層の堆積を確認した。このうち、

暗青灰色粘土(黒色斑混じる)層で少量の須恵器・土師器・瓦器片、淡灰褐色粘土(黒色斑混じる)層で黒色土器もしくは土師器細片1点、黄灰色砂質土～粘質土(黒色斑混じる)層で須恵器片1点の包含を確認した。

遺構については、2面の遺構面を検出した。淡灰褐色粘土(黒色斑混じる)層下(第1面)においては、ピットを2基検出した。2基のピットは、径25cm程度、深さ約6cmを測り、埋土は、ピット53-1で淡灰褐色粘土(少量の炭化物含む)、ピット53-2で暗黄灰色粘土であった。第



第157図 No.53調査区土層断面図



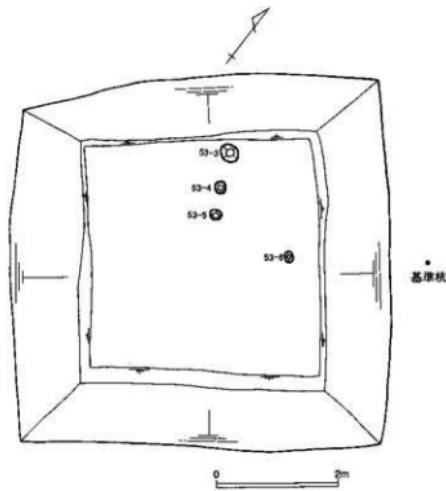
第158図 No.53調査区平面図(第1面)

1面に伴っては、覆土層から黒色土器か土師器の細片を1点検出したのみで、その時期は明確でないが、さらにその上位層の暗青灰色粘土（黒色斑混じる）層において少量ながら中世の土師器・瓦器片が出土していることから、第1面の時期としては、中世以前のものであるという可能性が考えられる。

黄灰色砂質土～粘質土（黒色斑混じる）層下（第2面）においては、ピットを4基検出した。ピットの径は15～25cm程度、深さ6～20cmを測り、埋土については、ピット53-3・53-4・53-5で黄灰色砂質土（やや粘質、黒灰色砂質土混じる）、ピット53-6で黒黃灰色砂質土であった。これらのピットについては人為的に掘り込まれた様相ではなく、遺構面上に黒色がかったしみのような部分を検出したもので、植物痕である可能性が考えられる。なお、第2面の覆土層からは須恵器壺と思われる底部片（155）が1点出土しており、断定はできないが、第2面の時期については古代までさかのほる可能性が考えられる。



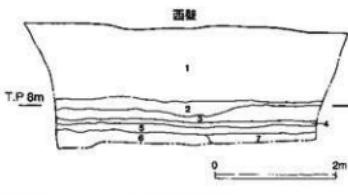
第160図 No.53調査区出土遺物



第159図 No.53調査区平面図(第2面)

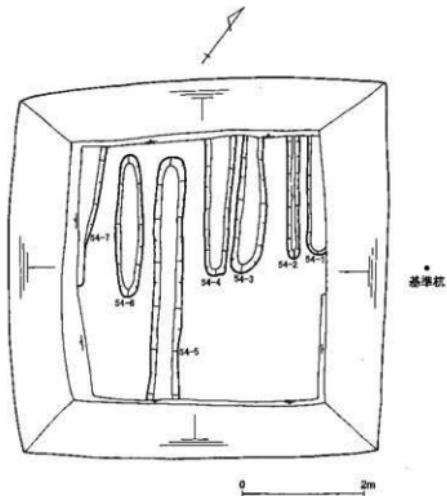
## [No.54調査区]

5.9×5.9mの調査区を設定した。約1.15~1.25m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（5~25cm厚）、暗青灰色砂質土層（10~25cm厚）、暗黄色砂質土層（5~10cm厚）、暗灰色粘質土（褐色がかる）・灰褐色粘質土層（8~15cm厚）、地山層である黄灰色粘土層の堆積を確認した。このうち、暗青灰色砂質土層においては中世以前のものとみられる少量の須恵器・土師器片の包含が認められ、暗黄色砂質土層では須恵器・土師器・瓦器・瓦片が包含し、図化できたものに土師器皿片（156）、土師器釜片（157・158）があった。また、暗灰色粘質土（褐色がかる）・灰褐色粘質土層では飛鳥時代の須恵器片を中心とした土師器・瓦片、そして若干の瓦器片、さらに陶硯片1点を検出した。図化できたものには、飛鳥時代の須恵器杯蓋片（159~161）、平安時代以前のものとみられる須恵器片（162~164）、凸面は欠損しているが凹面に布目を残す丸瓦片（166）、そして飛鳥時代のものと考えられる陶硯（円面硯）片（165）があった。脚部は欠損しているが、方形の透かしをもっていたとみられる。この陶硯片については、No.54調査区から東へ約50mの地点に設定したNo.55調査区で同一個体と考えられる陶硯片（184）が出土している。



第161図 No.54調査区土層断面図

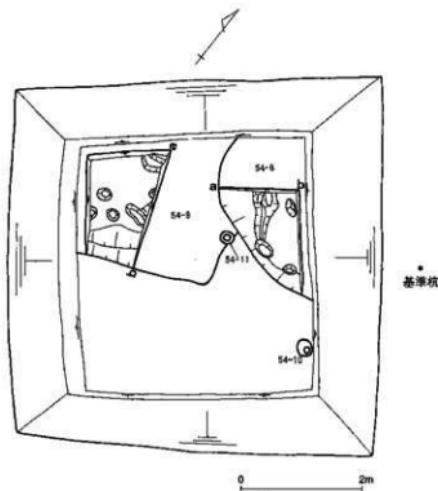
- 土層序**
1. 現代盛土層
  2. 旧耕土層
  3. 暗青灰色砂質土層
  4. 暗青灰色砂質土層
  5. 暗灰色粘質土(褐色がかる)・灰褐色粘質土層
  6. 黄灰色粘土層[地山]
  7. 暗青灰色砂質土層
- [地山54-8]



第162図 No.54調査区平面図(第1面)

遺構については、2面の遺構面を検出した。暗青灰色砂質土層下（第1面）においては、溝を7条検出した。これらの溝は概ねN37°Wの方位をもって平行してのびており、農作業に伴って形成されたものと考えられる。溝54-1と溝54-7は調査区にかかりその幅は不明であるが、溝54-2で幅約15cmを測り、他は概ね40~45cm程度の幅であった。深さは1~3cm程度を測り、埋土は暗青灰色砂質土であった。これらの各溝内からは土師器・須恵器等の細片が出土し、溝54-2・54-5・54-6・54-7には瓦器の細片がみられたことから、第1面の遺構は概ね中世のものであろうと考えられる。

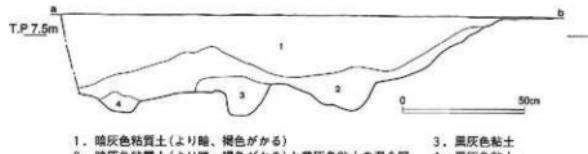
暗灰色粘質土（褐色がかる）・灰褐色粘質土層下（第2面）においては、土坑とピットを検出した。土坑は大型のもので、土坑54-8が土坑54-9に重複する形で検出された。土坑54-8は検出部分で円形状の平面形を呈し、径は2.7m以上あるとみられる。これを掘削すると、その深さは10~20cm程度であったが、部分的に土坑の上端に沿うような形で深さ5cmほどの溝がのび、また4~10cm程度の深さを測るピット状の窪みが認められた。その埋土は暗灰色粘質土（褐色がかる、より暗）を主体とするものであった。土坑54-9は検出部分で方形状の平面形を呈し、1辺2.2m以上を測った。その深さは30~40cm程度であり、これも土坑54-8と同様に、土坑内底面上において深さ5~15cm程度のピット状あるいは土坑状の窪みが認められ、また埋土も暗灰色粘質土（褐色がかる、より暗）を主体とするものであった。これら2基の土坑は、その平面形と規模から一見すると竪穴式建物跡のようにもみえるが、掘削範囲内で上坑内底面に凹凸が多い



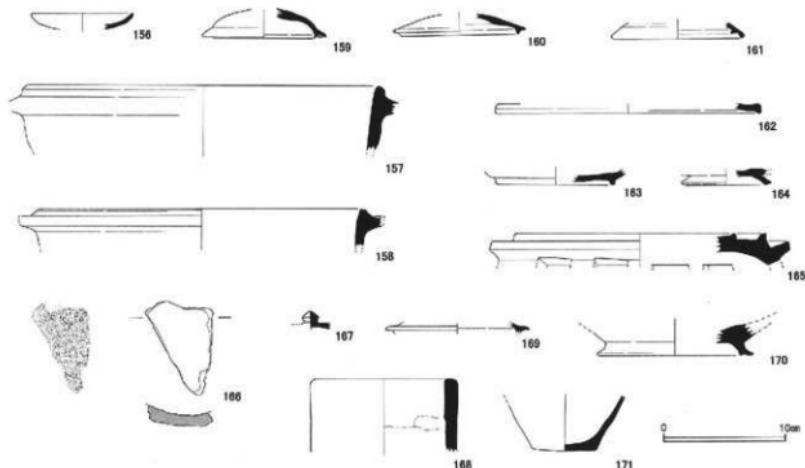
第163図 No.54調査区平面図(第2面)



第164図 土坑54-8埋土



第165図 土坑54-9埋土



第166図 Na54調査区出土遺物

く、そこでみられたピット状のものについては柱や杭などの痕跡として明確に確認できるものはなかった。このことから、これら土坑が堅穴式建物跡であるかどうかは現時点では判断できない。この他、ピットについては2基検出した。ピット54-10は径25~28cm、深さ約10cm、ピット54-11は径約25cm、深さ約3cmを測った。2基のピットとともに、灰褐色粘質土を埋土とするピット中央付近に柱痕とみられる痕跡があり、ピット54-10で暗灰色粘土（より暗）、ピット54-11で灰褐色粘質土（より褐色がかる）がその部分に認められた。しかし、これらのピットは浅いものであり、これが柱穴であるとすれば、上位部分が既に削平されているものと考えられる。

第2面の時期については、2基の土坑から少量ながら飛鳥時代の須恵器片（167・169）が検出され、覆土層においても同時期の遺物が多く包含していた状況から、この2基の土坑については飛鳥時代のものと考えられる。また、ピットからは、ピット54-10において弥生土器甕もしくは壺の底部片（171）が出土したのみであるが、ピットの埋土が覆土層とほぼ同じである状況からみて、このピットが弥生時代のものである可能性は低く、これらのピットも土坑とほぼ同時期のものではないかと考えられる。なお、土坑54-8からも弥生土器と思われる壺の口縁部（168）が検出されている。

### 【No.55調査区】

5.7×5.7mの調査区を設定した。約80~85cm厚の現代盛土層以下、旧耕土層（15~20cm厚）、暗青灰色砂質土層（10~18cm厚）、暗青灰色砂質土（やや黄色混じる）層（5~10cm厚）、地山層が人為的な影響を受けた様相（土色が若干くすむ）を示す淡黄灰色粘土層（8~12cm厚）と黄灰色粘土（褐色混じる）層（8~10cm厚）、そして明確な地山層といえる黄灰色粘土層の堆積を確認した。また、調査区南側では暗青灰色砂質土（やや黄色混じる）層下において南側へ地山層を切り込む形で青灰色砂質土（やや暗）層の堆積が確認された。このうち、暗青灰色砂質土層においては須恵器・土師器・瓦器片と灰釉陶器枕片（172）1点の包含が確認され、暗青灰色砂質土（やや黄色混じる）層では摩滅が著しく1点のみであるが、飛鳥時代の土師器杯片（173）の包含を確認した。

遺構については、暗青灰色砂質土（やや黄色混じる）層下において青灰色砂質土（やや暗）層と淡黄灰色粘土層をベース面として土坑4基とピット1基を検出した。土坑55-1は検出部分で径3.2m以上を測る大型のもので、掘削中の湧水により調査区壁面と土坑自体の輪郭が崩落する危険性があったことから完掘はしなかったが、おそらく井戸と考えられるものである。掘削は60cm程度の深さまでを行い、掘削した範囲において埋土上位には灰褐色系の砂質土・粘土、下

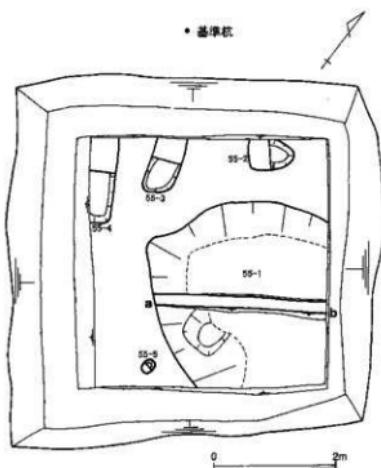


第167図 No.55調査区土層断面図

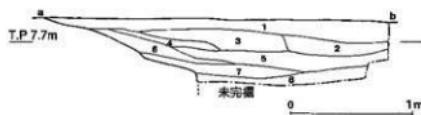
1. 現代盛土層 7. 黄灰色粘土（褐色混じる）層  
2. 旧耕土層 8. 黄灰色粘土層（地山）  
3. 暗青灰色砂質土層 9. 灰色粘土（淡黄灰色粘土裏じる）[土坑55-4]  
4. 暗青灰色砂質土（やや青色混じる）層 10. 灰色砂質土（褐色混じる）  
5. 青灰色砂質土（やや暗）層 11. 灰色砂質土  
6. 淡黄灰色粘土層 12. 灰色砂質土（褐色混じる）

#### 土層序

- 1. 現代盛土層
- 2. 旧耕土層
- 3. 暗青灰色砂質土層
- 4. 暗青灰色砂質土（やや青色混じる）層
- 5. 青灰色砂質土（やや暗）層
- 6. 淡黄灰色粘土層
- 7. 黄灰色粘土（褐色混じる）層
- 8. 黄灰色粘土層（地山）
- 9. 灰色粘土（淡黄灰色粘土裏じる）[土坑55-4]
- 10. 灰色砂質土（褐色混じる）
- 11. 灰色砂質土
- 12. 灰色砂質土（褐色混じる）



第168図 No.55調査区平面図

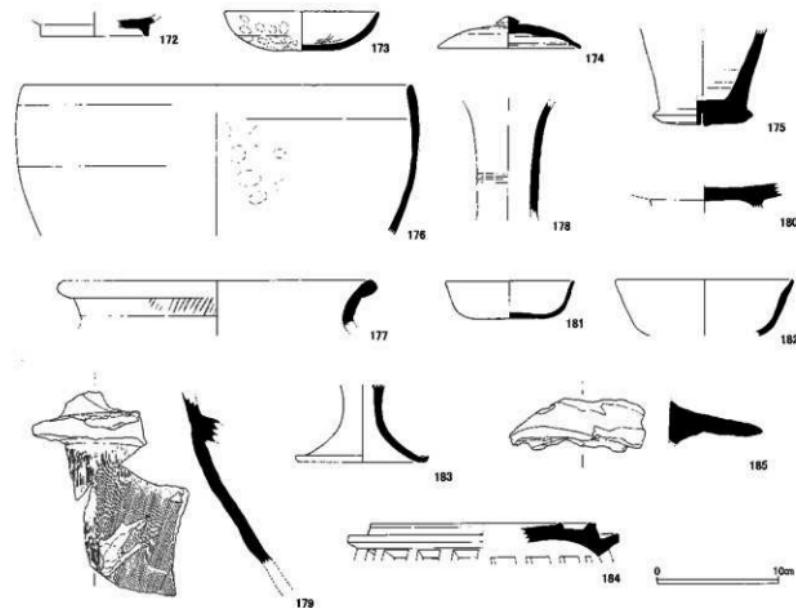


第169図 土坑55-1埋土

位に灰白色砂の堆積が認められた。この他、土坑55-2は長径約75cm、短径約50cm、深さ約5cmを測り、土坑55-3と土坑55-4は部分的な検出であったが、土坑55-3で長さ90cm以上、深さ約3cm、土坑55-4で長さ1.4m以上、深さ約10cmを測った。これら3基の土坑の埋土は灰色砂質土（淡黄灰色粘土混じる）であった。また、ピット55-5は長径約25cm、短径約18cm、深さ約6cmを測り、埋土は灰色砂質土（褐色混じる）であり、柱痕は認められなかった。

この遺構面の時期については、ここで遺物を検出できたのは土坑55-1のみであったが、土坑55-1からは飛鳥時代の須恵器杯蓋（174）や土師器杯片（181・182）などの出土があり、他の遺構も含めて、ここでの検出遺構は概ね飛鳥時代のものではないかと考えられる。また土坑55-1からは陶硯片（184）1点が出土し、これは形状と各部の寸法からNo.54出土の陶硯片（165）と

同一のものとみられる。この他、特徴的な遺物としては、蓋を受けるための鍔をもつ須恵器壺片（179）、竈の底部分ではないかと考えられる土製品（185）などが土坑55-1から検出された。



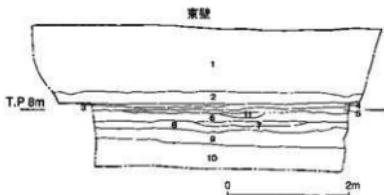
172：緑青灰色砂質土層(灰釉陶器核)、173緑青灰色砂質土(やや黄色混じる)層(土筋器杯)  
174～185：土坑55-1(174須恵器杯蓋、175須恵器すり鉢、176須恵器鉢、177・179須恵器蓋、  
178須恵器長颈甌、180須恵器底部、181・182土筋器杯、183土筋器高杯、  
184陶瓶、185土製品)

第170図 No.55調査区出土遺物

## [No.56調査区]

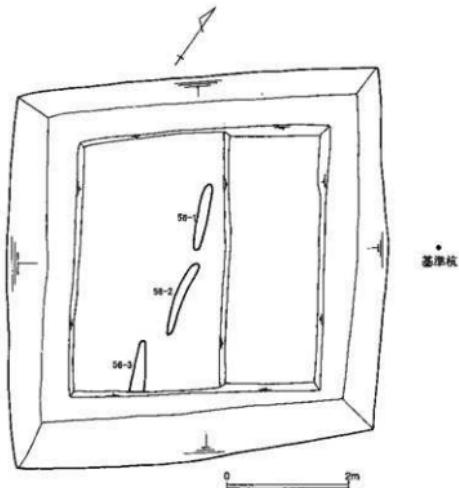
6×5.9mの調査区を設定した。約1.1m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（約20cm厚）、暗青灰色粘質土層・暗黄灰色粘質土層・暗黄色粘質土層（3層合わせて10～20cm厚）、灰褐色粘質土層（15～18cm厚）、暗黄灰色粘質土（やや褐色がかる）層（10～18cm厚）、地山層である黄灰色粘質土～砂質土層の堆積を確認した。このうち、暗青灰色粘質土層と暗黄灰色粘質土層において須恵器・土師器・瓦器片とともに近世以降の磁器片の包含を確認した。

造構については、灰褐色粘質土層上面においてスキ溝とみられる小溝を3条検出した。これらの溝は、幅10～20cm、深さ2～3cmを測り、概ねN25°Wの方位をもってのび、埋土は灰色粘質土であった。溝内からの遺物の出土はなかったが、その覆土層となる暗青灰色粘質土・暗黄灰色粘質土層に時期の新しい陶磁器片を含んでいたことから、これらの溝は近世以降のものと考えられる。



第171図 No.56調査区土層断面図

- | 土層序         |                          |
|-------------|--------------------------|
| 1. 現代盛土層    | 6. 灰褐色粘質土層               |
| 2. 旧耕土層     | 7. 淡灰褐色粘質土層              |
| 3. 暗青灰色粘質土層 | 8. 暗青灰色粘質土（やや褐色がかる）層     |
| 4. 暗黄灰色粘質土層 | 9. 黄灰色粘質土層【地山】           |
| 5. 黄色粘質土層   | 10. 黄灰色砂質土（やや粘土混じる）層【地山】 |
|             | 11. 灰色粘質土                |



第172図 No.56調査区平面図

## 【No.57調査区】

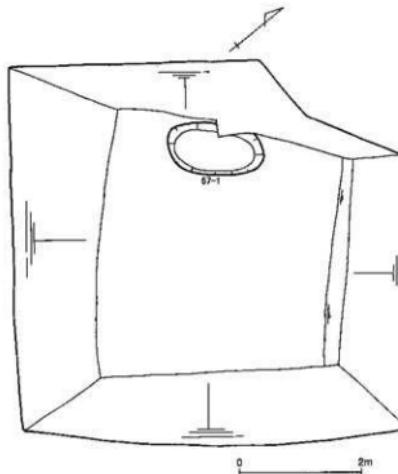
やや五角形気味となるが概ね6.3×5.2mの調査区を設定した。約1.6～1.9m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（約20cm厚）、暗青灰色粘質土層（約5～10cm厚）、暗黄色粘質土層（約6～10cm厚）、灰褐色粘土層（約10～20cm厚）、暗灰褐色粘土層（約15～25cm厚）、暗黄灰色粘土～灰色砂質土（褐色かかる）層（8～15cm厚）、地山層である灰色砂質土～黄灰色粘土層の堆積を確認した。このうち、暗青灰色粘質土層において平安時代～中世のものとみられる土師器細片を4点検出したが、それより下位層において遺物の包含は確認できなかった。

造構については、第1面として調査区西側において井戸とみられる土坑を1基検出したが、土坑57-1は旧耕土層下において確認したもので



第173図 No.57調査区土層断面図

\*基準杭



第174図 No.57調査区平面図(第1面)

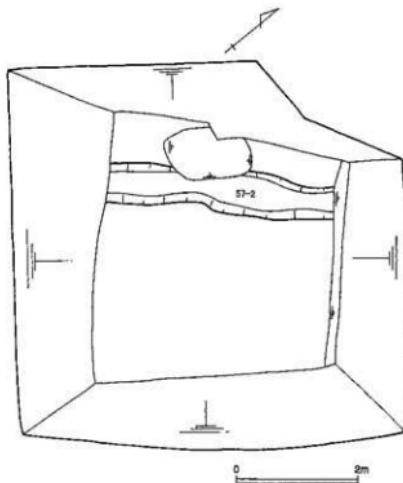
あり、層位的に時期の新しいものと考えられる。また、調査区東壁断面上において、土坑57-1と同時期のものと考えられる土坑状の堆積が確認された。

暗黄色粘質土層下（第2面）においては、溝を1条検出した。溝57-2は、幅50～75cm、深さ4～10cmを測り、概ねN43°Eの方位をもってのび、その埋土は灰色砂質土であった。

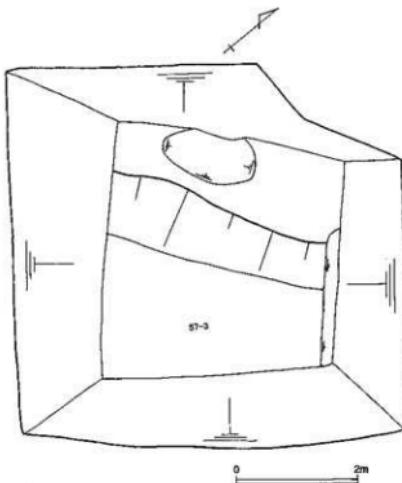
暗黄灰色粘土～灰色砂質土（褐色がかる）層下（第3面）においては、落ち込みを1か所検出した。落ち込み57-3は調査区の南側へ向かって14～19cm程度の深さで落ち込み、その落ち込み肩は概ねN62°Eの方位をもってのびていた。その埋土は褐色がかった黄灰色粘土・粘質土であった。この落ち込み57-3については、堆積状況からみて自然地形であろうと考えられる。

第2面・第3面については、それに伴う遺物の出土がなく、その時期は定かでないが、暗青灰色粘質土層において平安時代～中世のものとみられる遺物の包含があり、それより下位層にあたる第2面・第3面は、中世以前のものであるという可能性が考えられる。しかしながら、暗青灰色粘質土層からの出土遺物は細片でごく少量であることから、暗青灰色粘質土層自体の堆積時期が、中世以前のものであるかどうかの判断も難しい状況である。

• 基準杭



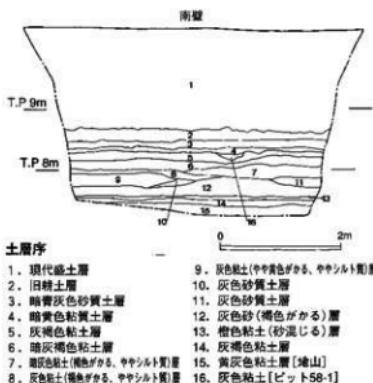
第175図 Na57調査区平面図(第2面)



第176図 No.57調査区平面図(第3面)

### [No.58調査区]

$6 \times 4.8\text{m}$  の調査区を設定した。約1.7m厚の現代盛土層以下、旧耕土層（約10~20cm厚）、暗青灰色砂質土層（5~20cm厚）、暗黄色粘土層（3~10cm厚）、灰褐色粘土層（10~15cm厚）、暗灰褐色粘土層（8~20cm厚）、河川堆積物とみられる灰色~暗灰色粘土（褐色がかる、ややシルト質）・やや黄色がかる灰色粘土（ややシルト質）・灰色砂質土・灰色砂（褐色がかる）等からなる堆積層（45~55cm厚）、そして橙色粘土層（3~8cm厚）、灰褐色粘土層（4~10cm厚）、地山層である黄灰色粘土層の堆積を確認した。このうち、暗青灰色砂質土層においては須恵器・土師

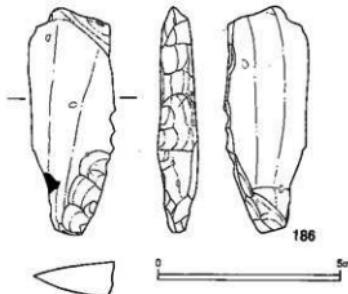


第177図 No.58調査区土層断面図

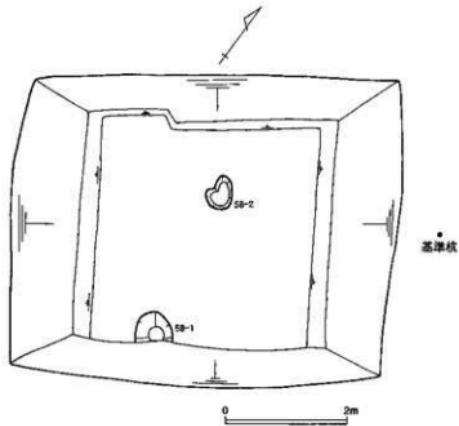
器・黒色土器等の細片を少量包含していた。

遺構については、暗黄色粘質土層下においてピットを2基検出した。ピット58-1は検出部分で径約50cm、深さ約12cmを測り、ピット58-2は平面形がやや歪で径30~50cm、深さ約9cmを測った。2基のピットとも埋土は灰色粘土であった。遺構に伴う遺物としては、ピット58-1から土師器とみられる細片がごく少量出土したものの、その時期は定かでない。ただし、遺構面の上位層である暗青灰色砂質土層で少量ながら平安時代~中世の遺物の出土があったことから、これら遺構の時期として中世以前のものという可能性が考えられる。

なお、暗灰褐色粘土層下においては、先述のように45~55cm厚の河川堆積物と思われる土層を確認したが、当初は部分的な堆積層だけをとらえ、落ち込み跡として掘削してそれを記録した。その際、灰色粘土（褐色がかる、ややシルト質）層内において国府型ナイフ形石器（186）を1点検出した。ただし、この河川堆積物を含め、その下位層からも遺物の出土はないことから、この河川堆積物が旧石器時代に形成されたものかどうかは不明である。



第179図 No.58調査区出土遺物



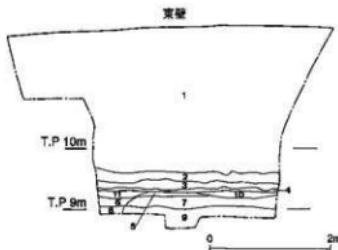
第178図 No.58調査区平面図

## 【No.59調査区】

5.8×5.6mの調査区を設定した。約2.2~2.4m厚の現代盛土層以下、旧耕土層(約20cm厚)、暗青灰色粘質土層(8~18cm厚)、黄灰色シルト質粘土(やや暗、褐色斑混じる)層(約8cm厚)、地山層である黄灰色・青灰色粘質土層等の堆積を確認した。

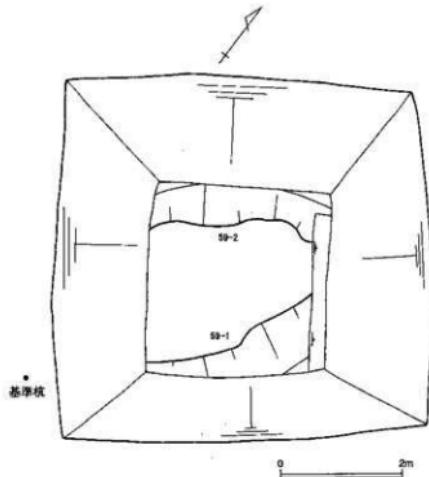
黄灰色シルト質粘土(やや暗、褐色斑混じる)層下

の地山層上面においては、調査区の南側と北側で落ち込みを2か所検出した。落ち込み59-1は、南側へ検出部分で約15cmの深さで落ち込み、落ち込み肩の方位は概ねN30°Eを示し、黄灰色シルト質粘土(やや青色がかる、やや褐色斑混じる)が埋土であった。落ち込み59-2は、北側へ検出部分で約23cmの深さで落ち込み、落ち込み肩の方位は概ねN53°Eを示し、青灰色シルト質粘土(やや褐色斑混じる)が埋土であった。この調査区では遺物の出土がなかったことから、これら落ち込みの時期については定かでない。



第180図 No.59調査区土層断面図

土層序	
1. 現代盛土層	6. 青灰色粘質土(ややシルト質)層[地山]
2. 旧耕土層	7. 黄灰色粘質土(ややシルト質)層[地山]
3. 暗青灰色粘質土層	8. 青灰色シルト層[地山]
4. 黄灰色シルト質粘土(やや暗、褐色斑混じる)層	9. 黄灰色粘質土(ややシルト質、褐色斑多く混じる)層[地山]
5. 黄灰色粘質土(褐色斑混じる)層[地山]	10. 黄灰色シルト質粘土(やや青色がかる、やや褐色斑混じる)層[落ち込み59-1]
	11. 青灰色シルト質粘土(やや褐色斑混じる)層[落ち込み59-2]



第181図 No.59調査区平面図

## 第4章 まとめ

ここでは、各調査区で得た調査成果をもとに、今回の調査で確認できた吹田操車場跡地地区（仮称）内での遺跡の包蔵状況の特徴についてまとめる。

① 今回の確認調査では、近現代の工事等によって大きく削平を受けている調査区を除いては、ほとんどの調査区において遺物の包含、もしくは遺構が検出された。このことから、今回の確認調査対象地区においては、時期や保存状況、密度に差はあるが、ほぼ全域に何らかの遺構・遺物が包含されていると考えられる。

② №3・№19・№23・№27・№34・№35・№36・№51・№58の各調査区は、土層の堆積状況から谷状地形の中に設定したと考えられる調査区である。このうち、№19・№35・№36の3か所、そして№34・№51・№58の3か所は、それぞれ場所的にまとまっており、おそらく北から南へとのびる谷筋に当たるのではないかと考えられる。また、これらの調査区では、№19・№23を除いて相対的に遺物の出土量は少なく、遺構・遺物がまったく認められない調査区（№3・№27・№34）もあった。

③ 多くの調査区で中世以前の可能性をもつ農耕関連のものとみられる溝を検出した。吹田操車場遺跡付近では嶋下郡南部条里とよばれる真北から西へ33度傾く条里地割がみられ、№11・№12各調査区で真北から西へ29度、№29・№31・№33各調査区で真北から西へ31度傾く溝がそれぞれ検出された<sup>(4)</sup>。これら溝の方位は若干ずれるものの、概ね条里地割に沿って形成されたものと考えられる。また、条里地割の方位とはかなりずれる溝も認められた。これについては、狭い調査範囲の中での部分的なずれや地形的な制約などといった要因が考えられる。

④ №48・№54・№55の3調査区で、飛鳥時代の遺構・遺物がまとまって検出された。このことから、この付近に飛鳥時代の集落等が展開していた可能性が考えられる。また、場所的に離れるが、№24においても飛鳥時代のものと考えられる建物跡が検出され、これが前者の地点の遺構と一連して続くものなのか、もしくは時期的に異なって展開していたものなのかが今後注目される。

⑤ №41で平安時代中期頃のものと考えられる柱穴が検出されたことから、この付近に当期の建物跡が存在する可能性が考えられる。

⑥ №25・№45では古代以前のもの、№30で古墳時代後期のものとみられる大型の土坑がまとめて検出された。（財）大阪府文化財センターが行った発掘調査（C1・C2地区）では古

墳時代後期から奈良時代にかけての群集土坑が検出されており、今回検出された土坑も群集土坑として広がるものなのかが注目される。

⑦ (財) 大阪府文化財センターの発掘調査においても指摘されているが、今回の調査で出土した古墳時代後期から飛鳥時代にかけての須恵器には焼成不良のものが多く、この付近で須恵器焼成後の選別が行われた可能性も含めて今後検討をする。

⑧ №58において国府型ナイフ形石器が検出された。これまでにも(財)大阪府文化財センターが行った調査で旧石器は確認されていたが、今回の調査で吹田操車場遺跡に国府文化期に相当する旧石器があることがわかった。

⑨ 飛鳥時代のものと考えられる陶硯片が、№54・№55で検出された。これらは同一個体のものとみられる。この陶硯片には使用された痕跡が認められず、未使用品であったと考えられる。なお、(財)大阪府文化財センターが行った発掘調査においても7世紀末から8世紀前半の跨脚硯が出土しており、吹田操車場遺跡での陶硯は2例目となる。

以上、今回の確認調査で得られた成果を箇条にしてまとめたが、今回は確認調査であるためポイントとしての調査であり、遺構・遺物の面的な広がりまでを把握することはできなかった。しかし、調査対象地区全域において遺構・遺物が包含されている可能性を確認できたことは、この調査の大きな成果であったといえる。

(注) この付近の磁北は真北から西へ約6度傾いていることから、本文中の磁北での計測値を真北で換算した。

#### (参照文献)

吹田市史編さん委員会「吹田市史第1巻」1990年

吹田市史編さん委員会「吹田市史第8巻」1981年

(財)大阪府文化財調査研究センター「吹田操車場遺跡」1999年

(財)大阪府文化財調査研究センター「吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点」2001年

(財)大阪府文化財センター「片山荒池遺跡」2006年

(財)大阪府文化財センター「吹田操車場遺跡Ⅲ」2008年

第2表 調査区概要一覧表

(標高:T.P 単位:m)

調査区番号	現地基高	最高・ lowest 基高	名余深厚	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
1	9.70	7.85	0.00	—	削平	—	
2	9.65	7.60	0.00	—	削平	—	
3	9.40	6.30以下	0.00	—	削平	—	
4	9.35	7.05	0.00	—	削平	—	
5	9.30	7.55	0.00	中世以前	溝、 sondage	土師器、須恵器、瓦器	
6	9.10	7.60	0.00	不明(中世以前か?)	sondage	土師器	
7	9.50	7.80	0.00	—	削平	—	
8	9.30	7.65	0.15	中世以前	sondage	土師器、須恵器、瓦器	
9	8.85	7.85	0.00	—	削平	土師器(便土室内)	
10	8.55	7.50	0.00	—	削平	—	
11	8.45	7.50	0.20	平安	溝、ピット	土師器、須恵器、黑色土器、灰陶陶器、瓦器	
12	8.50	7.30	0.20	平安、中世	溝、土坑	土師器、須恵器、黑色土器、瓦器、青磁、灰陶、瓦	
13	8.85	7.00	0.15	中世以前	—	土師器、須恵器、瓦	
14	8.90	5.70以下	0.00	—	—	—	
15	8.80	8.70	0.00	—	—	—	
16	8.50	8.75	0.15	平安、中世	土坑、溝、ピット、 sondage	土師器、須恵器、瓦器、石製品	
17	9.70	8.45	0.60	弥生～建倉	溝、ピット	劣生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦	
18	10.50	9.30	0.00	—	削平	—	
19	9.30	7.20	1.00	古墳、平安、中世	ピット、土坑	土師器、須恵器、瓦	
20	8.15	7.30	0.40	縄文、古墳、平安、中世	sondage	石器、土師器、須恵器、黑色土器、瓦器、瓦	
21	9.20	7.60	0.30	中世以前	溝、ピット	土師器、須恵器、瓦器、瓦	
22	9.10	7.50	0.00	—	削平	—	
23	8.95	7.60	0.60	古代、中世	—	土師器、須恵器、灰陶陶器、黑色土器、瓦器、瓦	
24	9.00	8.00	0.00	古代(亀島)、中世	族物跡、柱穴、ピット、土坑	土師器、須恵器、瓦器、瓦、土壁	・古墳時代のものとみられる遺物 壁を検出
25	9.15	7.75	0.20	平安以前、中世	土坑	土師器、須恵器、須賀陶器、黑色土器、瓦器	・平安時代以前のものとみられる 土筑跡を検出
26	9.20	8.80	0.00	—	削平	—	
27	9.05	8.30	0.00	—	—	—	
28	9.40	7.75	0.15	縄文、古代、中世	土坑	石器、土師器、須恵器、瓦器、青磁、瓦	
29	11.00	8.70	0.15	古墳	溝、土坑	土師器、須恵器	
30	9.80	8.05	0.35	古墳、中世	土坑、ピット	土師器、須恵器、瓦器、瓦	・古墳時代の土筑跡を検出 ・土坑内から須恵器焼瓶を検出

調査区分	現地盤高	遺構・古墳層 上面標高	包含層厚	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
31	10.60	8.25	0.20	古墳、中世	ピット、土坑、溝	土師器、須恵器、瓦器	
32	10.85	8.60	0.15	弥生、中世以前	土坑、溝	サヌカイト片、土師器	
33	10.60	8.75	0.40	平安、中世	溝、土坑	土師器、須恵器、墨色土器、瓦器	
34	10.70	8.10	0.00	—	—	—	
35	8.35	6.55	0.95以上	平安、中世	—	土師器、須恵器	
36	8.45	7.00	1.30以上	古代	—	土師器、須恵器	
37	8.45	8.75	0.00	—	—	須恵器 (縄土層内)	
38	8.70	6.75	0.00	—	—	土師器、須恵器 (縄土層内)	
39	8.70	6.90	0.00	—	—	青磁 (近代以降堆積状)	
40	8.35	7.20	1.20	弥生、古墳、平安、中世	落込み	陶土器、土師器、須恵器、瓦器、白磁、瓦、土部器	
41	8.40	7.35	0.00	平安	ピット、柱穴、落込み	土師器、須恵器、墨色土器、瓦	・平安時代の柱穴を検出
42	8.60	7.25	0.00	不明	ピット	—	
43	8.95	7.35	0.50	古墳、古代、中世	土坑、溝、ピット	土師器、須恵器、瓦器	
44	9.00	7.40	0.60	古墳、古代、中世	—	土師器、須恵器、瓦器、白磁、瓦、陶器?	
45	9.00	7.60	0.40	古代、中世	土坑	土師器、須恵器、瓦	・古代以前の土坑跡を検出
46	9.00	7.30	0.00	—	—	—	
47	9.30	7.30	0.00	—	—	—	
48	9.55	8.15	0.30	古代(飛鳥)、中世以前	溝、ピット	土師器、須恵器	・東内から飛鳥時代の多量の遺物を検出
49	9.50	7.95	0.00	—	—	—	
50	9.70	8.50	0.30	中世以前	溝、ピット	土師器、須恵器、瓦器、瓦、土部器	
51	9.80	8.50	1.15	中世以前	溝、ピット、落込み	土師器、須恵器、白磁	
52	9.80	7.35	0.20	—	—	土師器、須恵器 (縄土層内)	
53	9.10	7.45	0.45	中世以前	ピット	土師器、須恵器、瓦器	
54	9.35	8.00	0.50	弥生、古代(飛鳥)、中世	溝、ピット、土坑	陶土器、土師器、須恵器、瓦器、陶器	・飛鳥時代の大型土坑を検出 ・陶器を検出
55	9.10	8.10	0.40	飛鳥、平安、中世	ピット、土坑	土師器、須恵器、瓦器、灰陶陶器、陶器	・飛鳥時代の大規模土坑を検出 ・陶器を検出
56	9.40	8.10	0.45	中世	溝(近代以降)	土師器、須恵器、瓦器	
57	10.15	8.35	0.75	平安、中世	土坑、溝、落込み	土師器	
58	10.35	8.50	1.10	古石器、平安、中世	ピット	ナイフ形石器、土師器、須恵器、墨色土器	・深井型ナイフ形石器を検出
59	12.00	9.30	0.00	不明	落込み	—	

第3表 実測遺物一覧表

遺物番号	調査区域	層位・深度	種類	時期	備考
1	No.5	落ち込み5-1	瓦器柄	鎌倉	・和泉型
2	No.6	盛土層除き中	土師器皿	中世	
3	No.6	灰色砂質土(褐色がかる)層	黒色土器B絞版	平安中期	・摩滅のため調整不明
4	No.6	灰色砂質土(褐色がかる)層	瓦器柄	平安後期	・橢円型・岸辺著しい
5	No.6	灰色砂質土(褐色がかる)層	瓦器柄	平安後期?	・橢円型・焼成不良・摩滅のため調整不明
6	No.6	灰色砂質土(褐色がかる)層	瓦器柄	平安後期～鎌倉	・和泉型・焼成不良・摩滅のため調整不明
7	No.6	灰色砂質土(褐色がかる)層	瓦器柄	鎌倉	・大和型?・焼成不良
8	No.6	灰色砂質土(褐色がかる)層	土師器羽釜	平安後期～鎌倉	
9	No.11	溝11-3	須恵器杯蓋	古墳後期	
10	No.11	溝11-3	土師器皿	平安中期	
11	No.11	溝11-3	土師器皿	平安中期	・ての字状口縁
12	No.11	溝11-3	瓦器柄	平安後期	・橢円型
13	No.11	灰褐色砂質土層	灰陶陶器板	平安中期	
14	No.11	灰褐色砂質土層	土師器皿	平安中期	・ての字状口縁
15	No.12	灰色砂質土(鉄分多く含む)層	土師器皿	平安中期	・ての字状口縁
16	No.12	灰色砂質土(鉄分多く含む)層	瀬戸焼おろし皿	鎌倉～貯蔵前期	
17	No.12	近代以降土坑	黒色土器A鋸歯	平安中期	・摩滅のため調整不明
18	No.12	近代以降土坑	平瓦	古代	・凹面布目・凸面ヘラナデ
19	No.13	近代以降土坑	丸瓦	古代?	・凹面に布目と考えられる痕跡残る・摩滅のため不明確
20	No.16	暗青灰色粘質土(部分的に茶褐色)層	須恵器底部	古代	
21	No.16	暗青灰色粘質土(部分的に茶褐色)層	瓦器柄	鎌倉	・和泉型・摩滅のため調整不明
22	No.16	暗青灰色粘質土(部分的に茶褐色)層	瓦器柄	鎌倉	・和泉型・摩滅のため調整不明
23	No.16	落ち込み16-5	須恵器鉢	平安	
24	No.16	落ち込み16-5	瓦器柄	平安後期	・橢円型・摩滅著しい
25	No.16	落ち込み16-5	瓦器柄	鎌倉	・和泉型
26	No.16	落ち込み16-5	瓦器柄	鎌倉	・和泉型
27	No.16	溝16-2	石製品(用途不詳)	—	・船形?
28	No.17	近代以降土坑	須恵器鉢	中世	・高輪に參り底
29	No.17	茶褐色砂質土層	須恵器蓋	古代	
30	No.17	茶褐色砂質土層	須恵器蓋	古代	
31	No.17	茶褐色砂質土層	平瓦	白鳳～奈良	・凸面格子目・凹面布目・桜褐色に施成
32	No.17	茶褐色砂質土(より縫)層	須恵器杯蓋	飛鳥	・天井形にへ弓記号
33	No.17	茶褐色砂質土(より縫)層	土師器把手	古代	
34	No.17	茶褐色砂質土(より縫)層	土師器把手	古代	
35	No.17	ビット17-8	瓦器柄	鎌倉	・和泉型・焼成不良
36	No.17	溝17-2	須恵器盤	古墳後期～飛鳥	
37	No.19	暗灰色粘土(青色がかる)層	須恵器甕	古墳後期	・口頭部に斜突枚
38	No.19	暗灰色粘土(青色がかる)層	須恵器蓋	古代	
39	No.19	暗灰色粘土層	土師器蓋	古墳?	
40	No.19	暗灰色粘土(より縫)層	土師器皿	奈良～平安前朝	
41	No.19	暗灰色粘土(より縫)層	須恵器杯	古代	
42	No.19	暗灰色粘土(より縫)層	須恵器鉢	—	
43	No.19	暗灰色粘土(より縫)層	平瓦	白鳳～奈良	・凸面格子目・凹面布目・須恵器
44	No.19	暗灰色粘土(やや墨色がかる)層	須恵器甕	古墳後期	
45	No.19	黒灰色粘質土層	須恵器甕	古墳後期	
46	No.19	土坑19-1	須恵器杯蓋	古墳後期	
47	No.19	撲出土中	丸瓦	古代	・凹面布目・凸面ヘラナデ・須恵器

遺物番号	調査区分	層位・遺構	種類	時期	備考
48	No.20	暗青灰色粘土層	土師器羽塗	平安後期?	
49	No.20	暗青灰色粘土層	平瓦	古代	・凹面布目、凸面ヘラナデ
50	No.20	落ち込み20-1	土師器座	古墳	
51	No.20	落ち込み20-1	土師器高杯?	古墳	・摩滅のため調整不明瞭
52	No.20	落ち込み20-1	石盤	縄文	・サスカイト板
53	No.20	落ち込み20-1	石盤	縄文	・サスカイト板
54	No.23	暗青灰色粘土層	灰釉陶器蓋	平安	
55	No.23	暗青灰色粘質土(やや墨色がかる)層	須恵器蓋	飛鳥~平安初期	
56	No.23	暗青灰色粘質土(やや墨色がかる)層	丸瓦	中世以前	・摩滅著しい
57	No.24	ピット24-1	須恵器蓋	飛鳥~奈良	
58	No.24	ピット24-1	須恵器杯	飛鳥~平安初期	
59	No.24	ピット24-2	須恵器杯蓋	飛鳥	
60	No.24	ピット24-2	須恵器杯	飛鳥?	
61	No.24	ピット24-2	須恵器脚鉢(蓋?)	飛鳥?	
62	No.24	ピット24-4	須恵器蓋	古代以前	
63	No.24	ピット24-11	土師器杯	飛鳥	・摩滅のため調整不明瞭
64	No.24	ピット24-11	平瓦	古代	・凸面綺目、凹面摩滅著しい・施成不良
65	No.24	ピット24-11	土錐	—	
66	No.24	ピット24-14	土師器杯	飛鳥~平安初期	・摩滅のため調整不明
67	No.25	暗青灰色・暗黄灰色粘質土層	土師器蓋	平安中期	・倭津O型
68	No.25	盛土削除土中	青磁碗	—	
69	No.25	盛土削除土中	丸瓦	古代	・凹面布目、凸面ヘラナデ
70	No.25	暗青灰色粘土(褐色がかる)層	須恵器杯	平安初期?	
71	No.25	暗青灰色粘土(褐色がかる)層	須恵器杯	平安初期?	
72	No.25	暗青灰色粘土(褐色がかる)層	須恵器蓋?	古代	
73	No.25	暗青灰色粘土(褐色がかる)層	須恵器蓋?	古代	
74	No.25	暗青灰色粘土(褐色がかる)層	平瓦	古代	・凹面、凸面ともヘラナデ・須恵質
75	No.25	暗青灰色粘土(褐色がかる)層	平瓦	古代	・凸面綺目、凹面欠損
76	No.25	暗青灰色粘土(褐色がかる)層	石盤	縄文	・サスカイト板
77	No.25	暗青灰色・模様灰色砂質土(褐色泥じる)層	須恵器杯身	古墳後期	
78	No.29	溝29-5	須恵器杯蓋	古墳後期	
79	No.30	土坑30-5	須恵器杯底	古墳後期	・体部の1/3欠損
80	No.32	暗黄灰色粘土層	サスカイト剝片	弥生	
81	No.35	暗灰色粘土(少量の砂混じる)層	土師器皿	平安中期	
82	No.35	暗灰色粘土(少量の砂混じる)層	土師器皿	平安中期	
83	No.36	暗青灰色砂質土(黄色混じる、やや粘質)層	須恵器杯	飛鳥~平安初期	
84	No.38	近代以降溝	須恵器杯	平安初期?	
85	No.39	近代以降土坑	青磁碗	—	
86	No.40	青灰色・褪灰色粘土(やや細)層	須恵器鋤	鎌倉	
87	No.40	灰岩・褪灰色粘土(やや褐色がかる)層	土師器鉢(埋?)	—	
88	No.40	灰色・褪灰色粘土(やや褐色がかる)層	平瓦	古代	・凸面綺目・摩滅著しい
89	No.40	灰色・褪灰色粘土(やや褐色がかる)層	平瓦	古代	・凹面布目、凸面欠損・摩滅著しい
90	No.40	落ち込み40-1	須恵器身舟	古墳後期	
91	No.40	落ち込み40-1	土師器蓋	古墳	・摩滅のため調整不明
92	No.40	落ち込み40-1	土製品(蓋?)	—	
93	No.40	落ち込み40-1	土製品(蓋?)	—	
94	No.41	落ち込み41-1	須恵器蓋	平安初期	

遺物番号	器型区分	部位・構造	種類	時期	備考
95	No.41	薄ち込み41-1	平瓦	古代	・表面密目・摩滅著しい
96	No.43	暗青灰色粘質土層	瓦器皿	縄文	
97	No.43	暗青灰色粘質土層	須恵器杯	平安初期?	
98	No.43	暗青灰色粘質土層	瓦器皿	縄文	・摩滅のため調整不良
99	No.43	暗青灰色粘質土層	土師器盤	中世	
100	No.43	側溝	須恵器盤	飛鳥～平安初期	
101	No.43	側溝	須恵器皿	古代	
102	No.44	暗青灰色粘土層	須恵器皿または陶器?	古代以前	・外観に細いハケ目
103	No.44	暗青灰色粘土層	平瓦	古代	・白面織目・摩滅著しい
104	No.44	暗青灰色粘土層	白磁碗	—	
105	No.44	暗青灰色粘質土(やや褐色がかる)層	須恵器杯身	古墳後期	
106	No.44	暗青灰色粘質土(やや褐色がかる)層	須恵器皿	古代	・焼成不良
107	No.45	淡灰褐色粘土層	平瓦	古代	・凸面織目、凹面布目
108	No.45	埋乱土中	須恵器皿	飛鳥	
109	No.45	埋土層除去中	須恵器皿	平安初期?	
110	No.45	埋土層除去中	須恵器皿	飛鳥	・焼成不良
111	No.45	暗青灰色・暗緑灰色・淡緑灰色砂質土層	須恵器皿	飛鳥	・焼成不良
112	No.45	黄灰色(やや暗)・暗黄灰色砂質土層	須恵器皿	飛鳥?	
113	No.45	黄灰色(やや暗)・暗緑灰色砂質土層	須恵器皿	古代	
114	No.45	黄灰色(やや暗)・暗黄灰色砂質土層	須恵器皿?	飛鳥～平安初期	
115	No.45	黄灰色(やや暗)・暗緑灰色砂質土層	須恵器皿底部(蓋?)	古代	
116	No.45	ビット45-8	須恵器皿底または蓋	飛鳥?	
117	No.45	溝45-7	須恵器皿蓋	飛鳥	
118	No.45	溝45-7	須恵器皿蓋	飛鳥	
119	No.45	溝45-7	須恵器皿蓋	飛鳥	
120	No.45	溝45-7	須恵器皿蓋	飛鳥	・焼成不良
121	No.45	溝45-7	須恵器皿蓋	飛鳥	・つまみ割れ
122	No.45	溝45-7	須恵器皿蓋	飛鳥	
123	No.45	溝45-7	須恵器皿蓋	飛鳥	
124	No.45	溝45-7	須恵器皿蓋	飛鳥	
125	No.45	溝45-7	須恵器皿蓋	飛鳥	・焼成不良
126	No.45	溝45-7	須恵器皿蓋	飛鳥	・天井部の一部がハケ状にナデられる・焼成不良
127	No.45	溝45-7	須恵器皿蓋	飛鳥	・天井部内面に同心円紋・焼成不良
128	No.45	溝45-7	須恵器皿蓋または身	飛鳥	・ヘラ切り後にヘラ記号・焼成不良
129	No.45	溝45-7	須恵器皿身	飛鳥	・蓋部へラ切り未調整
130	No.45	溝45-7	須恵器皿身	飛鳥	・蓋部へラ切り未調整
131	No.45	溝45-7	須恵器皿身	飛鳥	・蓋部へラ切り未調整
132	No.45	溝45-7	須恵器皿身	飛鳥	・蓋部回転ヘラケズリ
133	No.45	溝45-7	須恵器皿身	飛鳥	・焼成不良
134	No.45	溝45-7	須恵器皿身	飛鳥	
135	No.45	溝45-7	須恵器皿身	飛鳥	・底部にヘラ記号・焼成不良
136	No.45	溝45-7	須恵器皿身	飛鳥	・底部へラ切り未調整
137	No.45	溝45-7	須恵器皿身	飛鳥	・底部へラ切り未調整
138	No.45	溝45-7	須恵器皿	飛鳥	・焼成不良
139	No.45	溝45-7	須恵器皿身	飛鳥	・焼成不良
140	No.45	溝45-7	須恵器皿	飛鳥	
141	No.45	溝45-7	須恵器皿長環壺	飛鳥?	

遺物番号	調査区No.	層位・遺構	種類	時期	備考
142	Na48	溝48-7	須恵器杯または盃	飛鳥	
143	Ne48	溝48-7	須恵器鉢	飛鳥	
144	Ne48	溝48-7	須恵器鉢	飛鳥	・機能不良
145	Ne48	溝48-7	須恵器底部(鉢?)	飛鳥?	
146	Ne48	溝48-7	須恵器脚部(高杯?)	飛鳥?	
147	Ne48	溝48-7	土師器皿	飛鳥	・摩滅著しい
148	Ne48	溝48-7	土師器皿	飛鳥	・摩滅著しい
149	Ne48	溝48-7	土師器杯または盃	飛鳥	・摩滅著しい
150	Ne48	溝48-7	土師器杯	飛鳥	・摩滅著しい
151	Ne48	溝48-7	土師器底または高杯	飛鳥	・摩滅著しい
152	Ne48	溝48-7	土師器高杯	飛鳥?	
153	Ne48	溝48-7	土師器把手	飛鳥	
154	Ne50	黄褐色砂質土層	土器底(縁?)	—	
155	Ne53	黄褐色砂質土～粘質土(灰色混じる)層	須恵器盃	古代	
156	Ne54	暗黄色砂質土層	土師器皿	中世	
157	Ne54	暗黄色砂質土層	土師器皿	平安中期	・須津C型
158	Ne54	暗黄色砂質土層	土師器皿	平安中期	・須津C型
159	Ne54	暗灰色粘質土(褐色がかる)・灰褐色粘質土層	須恵器杯盤	飛鳥	
160	Ne54	暗灰色粘質土(褐色がかる)・灰褐色粘質土層	須恵器杯盤	飛鳥	
161	Ne54	暗灰色粘質土(褐色がかる)・灰褐色粘質土層	須恵器杯盤	飛鳥	
162	Ne54	暗灰色粘質土(褐色がかる)・灰褐色粘質土層	須恵器盤	飛鳥～平安初期	
163	Ne54	暗灰色粘質土(褐色がかる)・灰褐色粘質土層	須恵器杯	平安初期?	
164	Ne54	暗灰色粘質土(褐色がかる)・灰褐色粘質土層	須恵器底部	古代	
165	Ne54	暗灰色粘質土(褐色がかる)・灰褐色粘質土層	陶器	飛鳥?	
166	Ne54	暗灰色粘質土(褐色がかる)・灰褐色粘質土層	丸瓦	古代	・瓦面目、凸面欠損
167	Ne54	土坑54-8	須恵器盤	飛鳥	
168	Ne54	土坑54-8	弥生土器甕?	弥生	・摩滅著しい
169	Ne54	土坑54-9	須恵器杯盤	飛鳥	
170	Ne54	土坑54-9	須恵器皿	飛鳥?	
171	Ne54	ピット54-10	弥生土器甕または盃		・摩滅著しい
172	Ne55	暗青灰色砂質土層	反輪陶器柄	平安	
173	Ne55	暗青灰色砂質土(やや黄色混じる)層	土師器杯	飛鳥	・摩滅著しい
174	Ne55	土坑55-1	須恵器杯盤	飛鳥	
175	Ne55	土坑55-1	須恵器すり鉢	飛鳥?	
176	Ne55	土坑55-1	須恵器鉢	飛鳥?	
177	Ne55	土坑55-1	須恵器皿	古墳後期～飛鳥	
178	Ne55	土坑55-1	須恵器長颈甕	飛鳥?	
179	Ne55	土坑55-1	須恵器甕(有鋤)	飛鳥?	
180	Ne55	土坑55-1	須恵器底部(鉢?)	飛鳥?	・機能不良・摩滅著しい
181	Ne55	土坑55-1	土師器杯	飛鳥	・草薙のため開鑿不明
182	Ne55	土坑55-1	土師器杯	飛鳥	・草薙のため開鑿不明
183	Ne55	土坑55-1	土師器高杯	飛鳥?	
184	Ne55	土坑55-1	陶器	飛鳥?	
185	Ne55	土坑55-1	土器底(縁?)	—	
186	Ne58	灰褐色粘土(褐色がかる、ややシルト質)層	ナイフ形石器	旧石器	・国府型ナイフ形石器

## 報告書抄録

ふりがな	すいたそうしゃじょういせきかくにんちょうさほうこくしょ
書名	吹田操車場遺跡確認調査報告書
副書名	吹田操車場跡地地区（仮称）の整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	賀納章雄・増田真木
編集機関	吹田市教育委員会
所在地	〒564-0041 大阪府吹田市泉町1丁目3番40号 TEL(06)6384-1231
発行年月日	西暦 2008年11月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯 ° ′ ″	東 經 ° ′ ″	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
吹田操車場遺跡	吹田市芝田町他	27205	73	34° 46' 13"	135° 31' 53"	20071225 20080717	1,992	吹田操車場 跡地地区 (仮称)の 整備事業

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
吹田操車場遺跡	集落遺跡	旧石器時代	なし	国府型ナイフ形石器	なし
		縄文時代	なし	石器	なし
		弥生時代	なし	弥生土器、サヌカイト片	なし
		古墳時代	土坑、溝	須恵器、土師器	なし
		飛鳥時代	建物跡、土坑、ピット、溝	須恵器、土師器、陶器	建物跡の検出 円筒鏡の出土
		平安時代	柱穴、ピット、落ち込み	土師器、須恵器、瓦、 黒色土器、瓦器、碌軸 陶器、灰釉陶器	
		中世	溝、ピット、土坑、落ち込み	土師器、須恵器、瓦器	なし



No. 1 调查区



No. 3 调查区



调查背景



No. 2 调查区



No. 5 調査区



No. 7 調査区



No. 4 調査区



No. 6 調査区



No. 9 调查区



No.11調查区(第1面)



No. 8 调查区



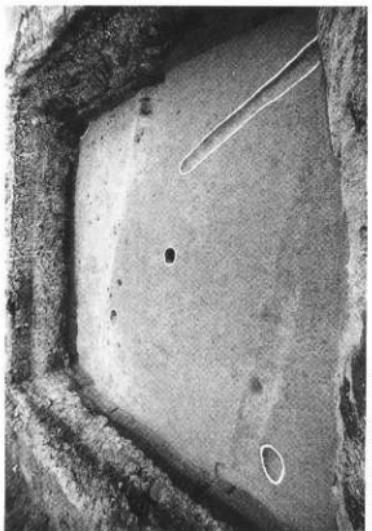
No.10調查区



No.11調查区



No.12調査区



No.11調査区(第2面)



No.12調査区(15)出土状況



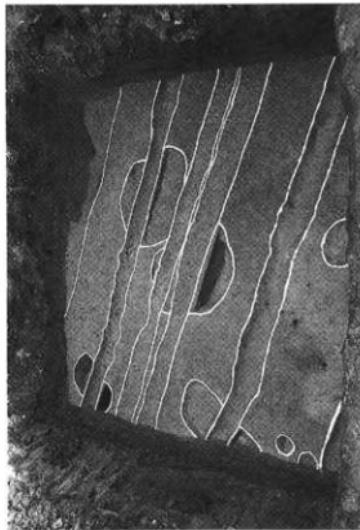
No.15調查区



No.16調査区瓦器(24)出土状況



No.14調査区



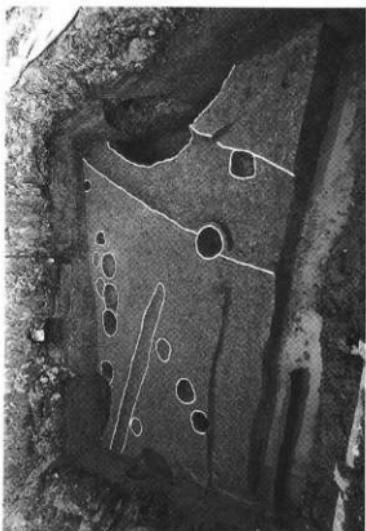
No.16調査区



No.18調查区



No.20調査区



No.17調査区



No.19調査区



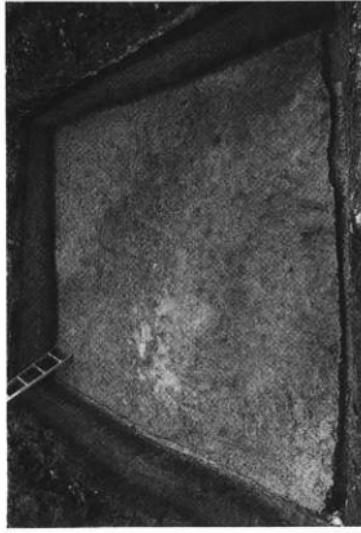
No.22調查区



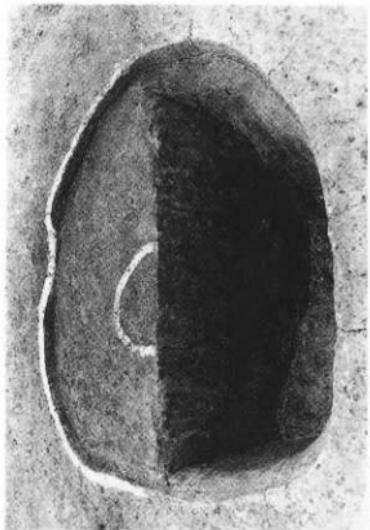
No.24調查区



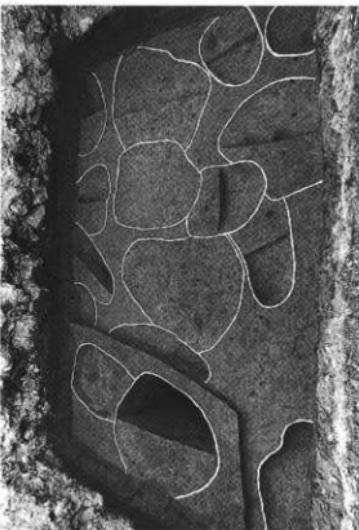
No.21調査区



No.23調査区



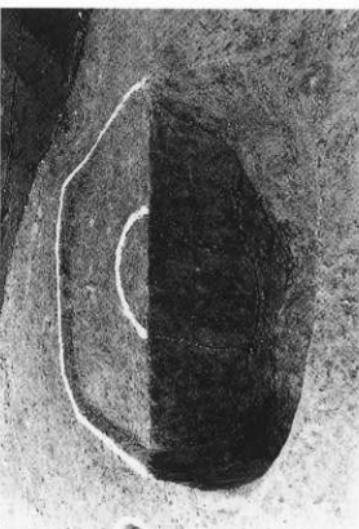
No.24調査区 ピット24-2



No.25調査区



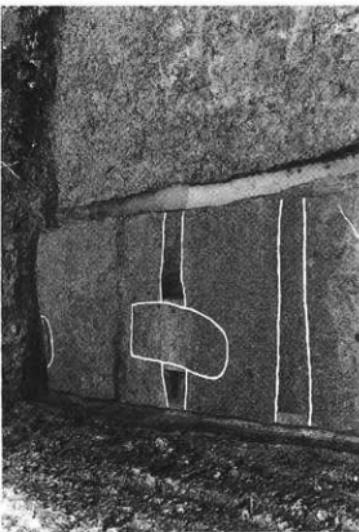
No.24調査区



No.24調査区 ピット24-8



No.27調査区



No.29調査区(第1面)



No.26調査区



No.28調査区